熊本県文化財調査報告　　第134集

柏木谷遺跡

―― 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 ――

1993

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　　第134集

かやのきだに

柏木谷遺跡

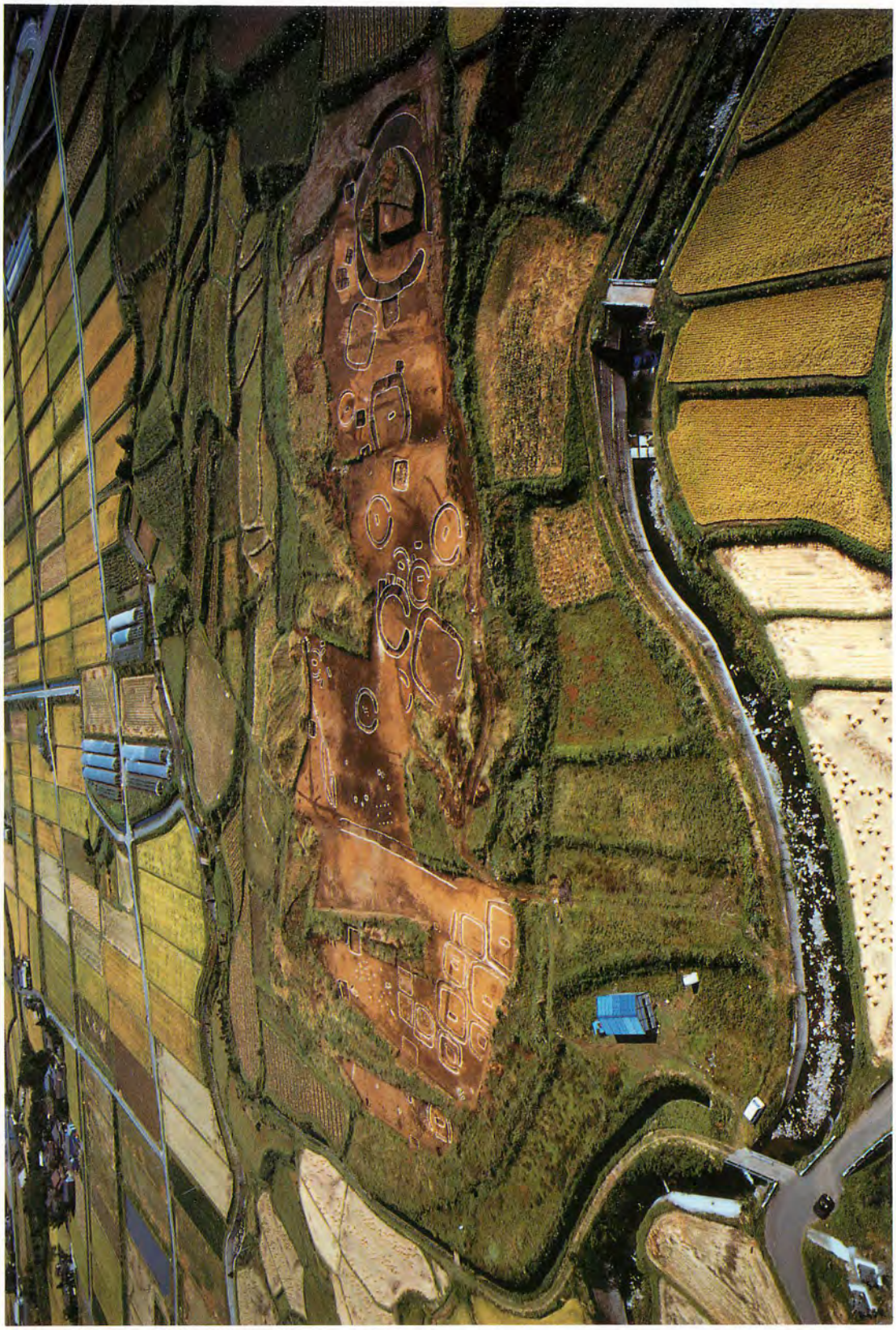
――県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告――

1993

熊本県教育委員会

柏木谷遺跡空中写真

口 絵 2



空中写真（西側上空から）

序　　文

熊本県教育委員会では県営圃場整備事業に伴う事前の埋蔵文化財の発掘調査を県内各地で進めておりますが，今回は南阿蘇の久木野村久石地区における柏木谷遺跡の調査を終了し，その報告書を刊行するはこびとなりました。

自然環境に恵まれた南阿蘇地区は，人々の憩いの場所として大変大事にされているところであります。調査を進めてまいりますと，従来，古代遺跡が希薄な地域と認識されてきたことを全て打ち消すかのように，各時代の多くの遺跡が明らかになってまいりました。

ここに報告いたします柏木谷遺跡からは縄文時代から古墳時代にかけての多くの住居跡や古墳が検出されました。古代から多くの人々が住んでいたことを証明するものでありますし，学術的にも大変価値の高いもので先ごろ県指定文化財に決定されたところでもあります。

この報告書が学術研究の一助となれば幸いであります。そして史跡公園とされる計画が伝えられますが，文化財の保護と活用が積極的に行われますことに大いなる期待をいたします。

最後になりましたが，発掘調査の実施に当たりましては県農政部当局や地元教育委員会並びに地権者の方々をはじめ多数の方々の多大のご協力を賜りました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

平成５年３月31日

熊本県教育長

道　越　　温

例　　言

1．本書は熊本県農政部の「県営圃場整備事業久石地区」に伴い事前に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査を実施したのは熊本県阿蘇郡久木野村大字久石に所在する柏木谷遺跡で，県農政部からの委託を受けて熊本県教育委員会文化課が行った。

3．当遺跡の発掘調査は平成２年度～平成３年度にかけて行ったもので，整理報告は平成４年度に実施したものである。

4．遺跡名は久木野村大字久石字柏木谷に基づき柏木谷（かやのきだに）遺跡とした。

5．本書に使用した地形図は久木野村教育委員会から提供を受けた。また遺跡全体図は同教育委員会作成1,000分の１図，及び熊本県農政部作成計画図10,000分の１に加筆し製図を行っている。

6．柏木谷遺跡は平成５年３月１日，熊本県指定文化財に指定されている。

7．指定後史跡公園が計画されており，全体を土盛りで覆ったあと整備が行われる予定である。遺構は完全な保存が計られることになる。

8．発掘調査及び報告書作成における作業は下記により行っている。

＜測量・実測＞　江本　直　藏坐浩一　山隈　誠　本山千絵　中村幸美　吉田正一　丹生英里

＜製　　図＞　江本　本山　坂田朋子　椎葉博昭　山田大介

＜写 真 撮 影＞　藏坐　山隈　江本　白石　巖

＜執　　筆＞　江本

9．出土遺物及び実測図等は熊本県文化財収蔵庫に整理保管している。

本　文　目　次

序　　文……1
例　　言……2
第Ⅰ章　序　　説……9
　第１節　調査の経緯と経過……9
　第２節　遺跡概観……11
　第３節　調査地について……13
第Ⅱ章　調査結果……15
　第１節　全体の遺構・遺物……15
　第２節　縄文時代の調査……15
　　(1)　縄文早・前・中期の遺構・遺物……15
　　(2)　縄文晩期の遺構・遺物……19
　第３節　弥生時代の調査……21
　　(1)　住居群の構成……21
　　(2)　各住居跡の調査結果……21
　　各住居跡の検出と遺物……21～44
　　(3)　長頸壺・勾玉・玉類……45
　第４節　古墳時代の調査……49
　　(1)　古墳群の配置状況……49
　　(2)　方形周溝墓の調査……49
　　各方形周溝墓の検出と遺物……49～71
　　(3)　円形周溝墓の調査……71
　　各円形周溝墓の検出と遺物……88
　　(4)　円墳の調査……88
　　(5)　箱式石棺・土壙の調査……90
　第５節　柱穴遺構その他の遺構・遺物……93
　第６節　鉄器製品について……93
第Ⅲ章　総　　括……104

挿　図　目　次

第１図　柏木谷遺跡位置図……12
第２図　柏木谷遺跡全体測量図……16
第３図　第20・21号住居跡実測図……17
第４図　縄文早・前・中期土器実測図……18
第５図　第15・16・17号住居跡実測図……19
第６図　縄文晩期土器・縄文時代石器実測図……20
第７図　第１号住居跡実測図……22
第８図　第２号住居跡実測図……23
第９図　第３号住居跡実測図……24
第10図　第４号住居跡実測図……25
第11図　第４号住居跡出土遺物実測図……25
第12図　第５号住居跡実測図……26
第13図　第５号住居跡出土遺物実測図……27
第14図　第５号住居跡出土遺物実測図……28
第15図　第６号住居跡実測図……29
第16図　第６号住居跡出土遺物実測図……30
第17図　第６号住居跡出土遺物実測図……31
第18図　第７号住居跡実測図……32
第19図　第８号住居跡実測図……34
第20図　第８・11・12号住居跡出土遺物実測図……36
第21図　第９号住居跡実測図……37
第22図　第10号住居跡実測図……37
第23図　第11号住居跡実測図……38
第24図　第12号住居跡実測図……39
第25図　第13号住居跡実測図……40
第26図　第13・18号住居跡出土遺物実測図……41
第27図　第14号住居跡実測図……42
第28図　第18号住居跡実測図……43
第29図　第19号住居跡実測図……44
第30図　重弧文長頸壺実測図……45

第31図　勾玉・玉類実測図……46
第32図　第１号方形周溝墓実測図……49
第33図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図……50
第34図　第２号方形周溝墓実測図……52
第35図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図……53
第36図　第３号方形周溝墓実測図……54
第37図　第４号方形周溝墓実測図……55
第38図　第５号方形周溝墓実測図……57
第39図　第６号方形周溝墓実測図……58
第40図　第６号方形周溝墓出土遺物実測図……59
第41図　第７号方形周溝墓実測図……61
第42図　第７・10号方形周溝墓出土遺物実測図……62
第43図　第８号方形周溝墓実測図……63
第44図　第９号方形周溝墓実測図……64
第45図　第10号方形周溝墓実測図……66
第46図　第10号方形周溝墓出土遺物実測図……67
第47図　第11号方形周溝墓実測図……69
第48図　第12号方形周溝墓実測図……70
第49図　第12号方形周溝墓出土遺物実測図……71
第50図　第１号円形周溝墓実測図……72
第51図　第２号円形周溝墓実測図……74
第52図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図……74
第53図　第３号円形周溝墓実測図……75
第54図　第４号円形周溝墓実測図……76
第55図　第３・４号円形周溝墓出土遺物実測図……77
第56図　第４号円形周溝墓出土遺物実測図……78
第57図　第４号円形周溝墓出土遺物実測図……79
第58図　第５号円形周溝墓実測図……81
第59図　第６号円形周溝墓実測図……82
第60図　第７号円形周溝墓実測図……83
第61図　第６・７号円形周溝墓出土遺物実測図……84
第62図　第８号円形周溝墓実測図……85
第63図　第９号円形周溝墓実測図　第１～６号土壙実測図……86

第64図　第８・９号円形周溝墓出土遺物実測図……87
第65図　円墳・平板測量図……89
第66図　円墳・墳丘断面図……90
第67図　第９号円形周溝墓実測図　第１～６号土壙・箱式石棺実測図……91
第68図　掘立柱建物実測図……92
第69図　古代遺物実測図……93
第70図　鉄製品実測図(1)……94
第71図　鉄製品実測図(2)……95
第72図　鉄製品実測図(3)……96
第73図　鉄製品実測図(4)……97

表　目　次

第１表　勾玉・玉類出土状況一覧表……47
第２表　住居跡一覧表……48
第３表　方形周溝墓一覧表……98
第４表　円形周溝墓一覧表……98
第５表　出土遺物観察一覧表(1)……100
第６表　出土遺物観察一覧表(2)……101
第７表　出土遺物観察一覧表(3)……102
第８表　鉄製品一覧表……103

写　真　目　次

写真１　第１号住居跡
写真２　第３号住居跡
写真３　第５号住居跡
写真４　第６号住居跡検出状況
写真５　第６号住居跡重弧文土器出土状況
写真６　第８号住居跡
写真７　第10号住居跡
写真８　第11号住居跡遺物出土状況
写真９　第12号住居跡
第２号住居跡
第４号住居跡
第５号住居跡遺物出土状況
第６号住居跡遺物出土状況
第７号住居跡
第９号住居跡
第11号住居跡
第12号住居跡
第13号住居跡

写真10	第14号住居跡	第14号住居跡遺物（勾玉未製品）出土状況
写真11	第15・16・17号住居跡	第18号住居跡
写真12	第18号住居跡	第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況
写真13	第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況	第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況
写真14	第18号住居跡遺物（玉）出土状況	第18号住居跡遺物出土状況
写真15	第18号住居跡遺物出土状況	第19号住居跡
写真16	第20・21号住居跡（東から）	第20・21号住居跡（南から）
写真17	第１号方形周溝墓	第１号方形周溝墓主体部
写真18	第２号方形周溝墓	第３号方形周溝墓
写真19	第３号方形周溝墓周溝内遺物出土状況	第４号方形周溝墓
写真20	第５号方形周溝墓	第６号方形周溝墓
写真21	方形周溝墓群（第１～７号）	第７号方形周溝墓
写真22	第７号方形周溝墓主体部	第７号方形周溝墓鉄器出土状況
写真23	第８号方形周溝墓	第９号方形周溝墓
写真24	第10号方形周溝墓	第10号方形周溝墓鉄器出土状況
写真25	第11号方形周溝墓	第11号方形周溝墓主体部周溝内遺物出土状況
写真26	第11号方形周溝墓	第１号円形周溝墓
写真27	第１号円形周溝墓主体部箱式石棺（西側から）	第２号円形周溝墓
写真28	第３号円形周溝墓	第４号円形周溝墓
写真29	第４号円形周溝墓周溝内遺物出土状況	第５号円形周溝墓
写真30	第４号円形周溝墓主体部	第４号円形周溝墓周溝内遺物出土状況
写真31	第７号円形周溝墓	第７号円形周溝墓
写真32	第８号円形周溝墓	第８号円形周溝墓周溝内遺物出土状況
写真33	第９号円形周溝墓	箱式石棺検出状況
写真34	円墳主体部検出状況	掘立柱建物検出状況
写真35	第１号土壙鉄器出土状況	
写真36	縄文前期・中期土器	
写真37	縄文晩期土器・縄文時代石器	第４号住居跡出土遺物
写真38	第５号住居跡出土遺物	
写真39	第６号住居跡出土遺物	

写真40　第６号住居跡出土遺物
写真41　第８・11・12号住居跡出土遺物
写真42　第13・18号住居跡出土遺物
写真43　重弧文土器片・勾玉・玉類
写真44　第１号方形周溝墓出土遺物
写真45　第２号方形周溝墓出土遺物
写真46　第６号方形周溝墓出土遺物
写真47　第７・10号方形周溝墓出土遺物
写真48　第10号方形周溝墓出土遺物
写真49　第12号方形周溝墓出土遺物　　第２号円形周溝墓出土遺物
写真50　第３・４号円形周溝墓出土遺物
写真51　第３・４号円形周溝墓出土遺物
写真52　第４号円形周溝墓出土遺物
写真53　第４号円形周溝墓出土遺物
写真54　第６・７号円形周溝墓出土遺物
写真55　第８・９号円形周溝墓出土遺物
写真56　古代遺物　　鉄製品

第Ⅰ章　序　　説

第１節　調査の経緯と経過

当県農政部耕地課から「県営圃場整備事業阿蘇久石地区」の実施に先駆ける埋蔵文化財の発掘調査を委託されて，柏木谷遺跡を平成２年度後半から同３年度の２ヵ年にわたって実施することになる。平成２年12月事務手続きや現場事務所の開設などの作業から開始する。事前の文化課職員による踏査や試掘調査によって調査対象面積は約8,000㎡にわたることが確認されており，出土した遺構や遺物から弥生時代の住居跡や古墳時代の数十軒の住居跡群が検出されるものと予想された。発掘調査の結果，予想を越える主要な遺構が数多く発見され，調査区の拡張なども行いながら平成３年12月20日に調査を終えている。主な調査の経緯を示すと次のとおりである。

平成２年度

12月

熊本県農政部耕地課と県教育庁文化課との協議により柏木谷遺跡の発掘調査を実施することが決まる。文化課での調査担当班が決められる。

発掘調査届けを文化庁長官に通知。久木野村教育委員会及び耕地課に調査の協力依頼を行う。発掘調査作業員の確保のための地元への依頼を済ませる。

調査現場事務所建設。調査器材搬入。重機導入の準備を終える。

１月

Ａ地区調査：先祖供養祭　県阿蘇事務所耕地課担当者打合せ　調査開始

表土剥ぎ作業・清掃作業・遺構検出作業　層位観察トレンチ調査

弥生時代住居跡，古墳時代方形周溝墓，中世土壙などを確認，調査

２月～３月

Ａ地区調査：弥生時代住居跡，古墳時代方形周溝墓調査

平成３年度

４月～６月

Ｂ地区調査：表土剥ぎ作業・清掃作業・遺構検出作業

弥生時代住居跡，古墳時代方形周溝墓・円形周溝墓確認調査

７月～８月

Ｂ地区調査：弥生時代住居跡，古墳時代方形周溝墓・円形周溝墓確認調査

溝遺構調査

９月～10月

Ｂ地区調査：円形周溝墓　住居跡　土壙群調査　　円墳周溝確認　掘立柱建物調査
円墳拡張調査　　専門調査員現地調査

11月～12月

Ｂ地区調査：先祖供養墓前祭　円墳周溝調査　主体部調査　方形・円形周溝墓調査
空中写真撮影　調査終了　　遺物・器材撤収

平成４年度

平成４年５月～平成５年３月

文化財収蔵庫にて遺物の整理作業を実施。

○水洗い　○ネーミング　○接合　○実測　○写真撮影　○実測図面整理・製図
○遺物実測・検討・製図　○執筆　○原稿・図面割りつけ作業

以上，下記の調査組織のもとで調査及び報告書作成作業を実施している。

調査の組織

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　大塚　正信（首席教育審議員・文化課長）
　　江崎　　正（前文化課長）
調査総括　　島津　義昭（主幹・文化課文化財調査第１係長）
同　　松本　健郎（主幹・前文化課文化財調査第１係長）
調査主査　　江本　　直（文化課参事）
調査員　　藏坐　浩一（文化課文化財保護主事）
　同　　山隈　　誠（文化課嘱託）
専門調査員　原口　長之（熊本県立装飾古墳館館長）
　同　　田辺　哲夫（初代熊本県文化課長）
　同　　白木原和美（熊本大学文学部教授）
　同　　小田富士雄（福岡大学文学部教授）
　同　　甲元　眞之（熊本大学文学部助教授）
　同　　武末　純一（福岡大学文学部助教授）

調査指導及び協力者

下條信行（愛媛大学文学部教授）　久木野村村誌編纂委員会　高木恭二（宇土市教育委員会）木村幾多郎（大分市博物館館長）久木野村教育委員会　田尻盛穂（白水村文化財保護委員長）清田純一（城南町教育委員会）　村上恭二（名古屋大学文学部助手）　久木野村文化財保護委員会　久木野村耕地課　浦田信智（西合志町教育委員会）　中山清隆（東京女子短期大学

助教授）　緒方勉（肥後考古学会員）　山下志保（熊本大学文学部助手）

調査事務

教育庁文化課　隈　昭志（教育審議員）　松崎厚生（課長補佐）　木下英治（主幹・経理係長）　高浜保子（参事）　相馬治久（参事）

作業者

〔発掘調査〕渡辺良子　江藤末子　後藤初江　市原ミル子　浅尾光子　古澤ソヨ　古沢富士子　古沢カヨ　古沢優子　古沢英子　古沢千鶴子　古澤民子　羽田節子　古澤さえ子　宮崎敬士

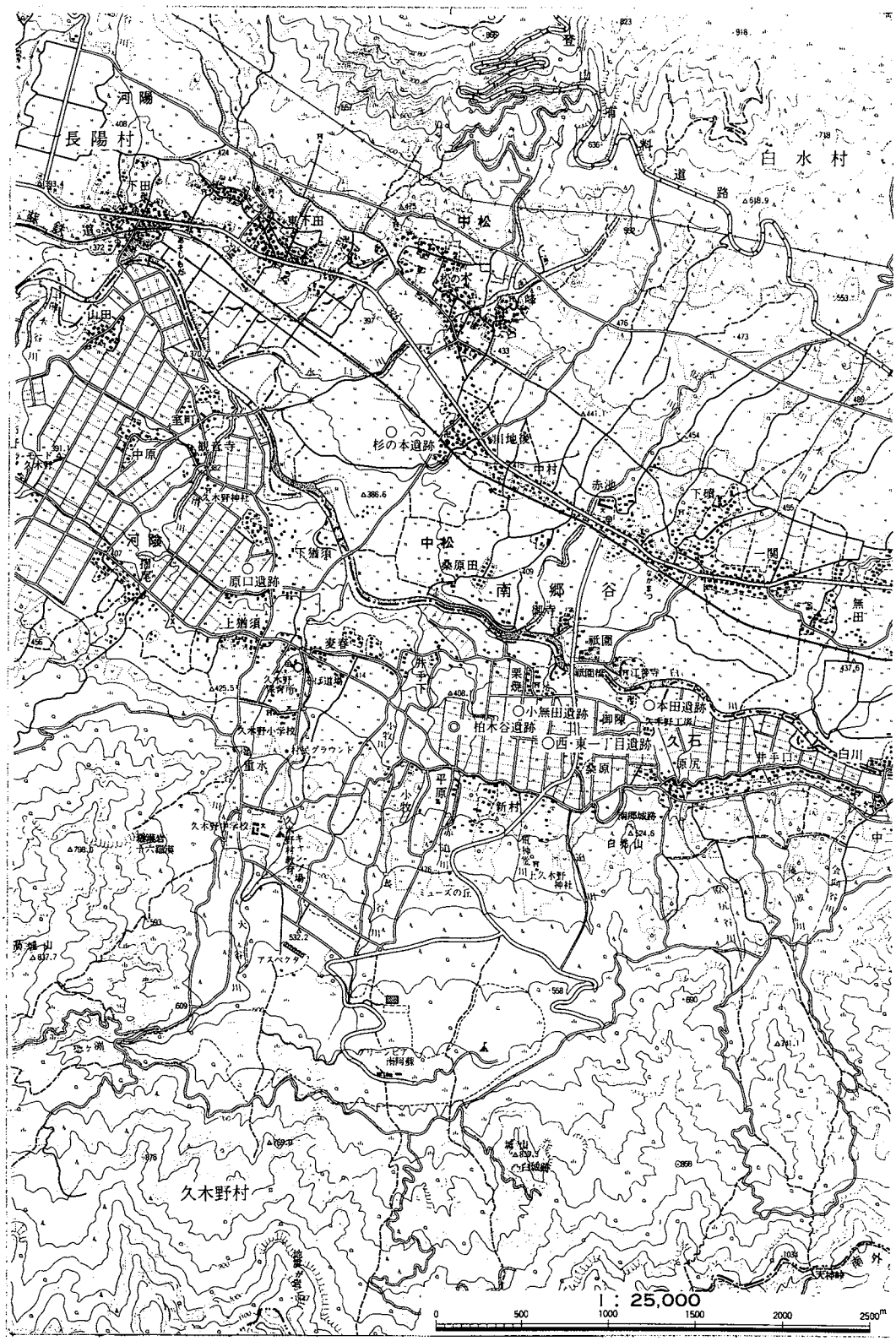
〔整　　理〕江島園子　水本寿美子　小山正子　塚本博子　塩田喜美子　吉田律子　竹村理佐　米倉五月　重永照代　勝田智子　河野智子　後藤ちづ子　大塚磯子　上村孝子　後藤直美　宇野玲子　山元友子

第2節　遺跡概観

柏木谷（かやのきだに）遺跡は熊本県阿蘇郡久木野村大字久石字柏木谷に位置し，字名から遺跡名がとられたものである。熊本平野を西流し有明海に注ぐ白川は，その源を阿蘇カルデラ内に発していることが良く知られている。この世界最大の阿蘇カルデラは，中央部に位置する活火山の中岳や高岳・根子岳などの連山で大きく南北に区切られている。そして，広大なカルデラ内は北側を阿蘇谷，南側を南郷谷と呼ばれ，久木野村は後者に位置する。なお，白川は西外輪で合流し熊本平野へと流れ落ちるが，阿蘇谷の方は黒川で，南郷谷の方は白川とそれぞれに呼ばれている。この白川左岸に位置する久木野村は，南西外輪からの急峻で広大な丘陵と，左岸水田地帯からなっている。因みに平成２年10月の国勢調査によれば村総面積 51.27 ㎢で，遺跡一帯の標高は中央部で海抜約 710 ｍを測っている。

雄大な自然環境に恵まれたこの村は「やすらぎの里」として今日の人々に大きな憩いの場を提供している。代表的なものに世界有数の野外ステージ「アスペクタ」や保養施設が建設され年間多くの来訪者を受け入れたり，伝統的な農業生産に基づく村営の「そば道場」の開設や温泉の掘削にも成功し大いなる脚光を浴びてきている。

さて，従来より一の宮町の中通古墳群や阿蘇町の弥生～古墳時代の集落跡遺跡など阿蘇谷地区での古代遺跡群は良く知られていたところであるが，南郷谷地区では特に古墳群の存在は非常に希薄な状況を示すことが続き，わずかに高森町の色見遺跡の方形周溝墓や久木野村の六の小石古墳群などが知られていたにすぎないところであった。しかし，昭和50年代後半から南郷谷地区において県営圃場整備事業に伴う本格的な埋蔵文化財発掘調査が実施されるにしたがい，各時代の多くの遺跡が調査確認され，次第に阿蘇谷地区と遜色のない状況を示すかのようになってきている。



第1図　柏木谷遺跡位置図

久木野村地区での発掘調査が続いているのである。本田遺跡，東一丁田遺跡，西一丁田遺跡，佐敷遺跡，西佐敷古墳，小無田鶴Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡，南僧坊遺跡，原口遺跡などであり縄文時代から弥生・古墳時代はもとより古代・中世にわたる大集落跡や墓域が発掘調査されている。しかし，全てが発掘調査にとどまっている。報告書のすみやかなる刊行が追求されよう。

小無田鶴遺跡では定型的石器の検出には至ってはいないが，後期旧石器時代の産物であることを示す「ＡＴ」火山灰層（約22,000年前）前後の石器群の所在が確認されており，南郷谷地区はもとより阿蘇カルデラ内の人類の黎明期の確実な足跡を示すものである。また，縄文早期の押型文土器の検出例は多くこの地方で普遍化しつつあるようであり，前期の轟式土器や曽畑式土器もかなりまとまった出土を見せている。これらの土器群の形状や文様構成に乱れや崩れが見られることは否めず，海岸部から内陸部へと移っていく時間的移行を示すものであろうか。熊本平野部との密度の疎さが特徴と取れようが縄文晩期の遺物の出土も確かであり，わずかではあるが弥生前期への移行期の遺物も認められるようである。一方，弥生後期の集落跡の展開は爆発的で平野部での特徴と同じくしている。西一丁田遺跡では住居跡内から鏡片の出土も聞かれる。佐敷遺跡では古墳時代集落跡が検出されている。墓域をいずれにするのかを明らかにしないが，今回の柏木谷遺跡の古墳群と非常に近い地理的位置にあり，その関連性が強く問われよう。古代の竈を有する住居跡の検出も多く，南僧坊遺跡では中世人骨が取り上げられている。

柏木谷遺跡での試掘調査は発掘調査に先立つ平成元年の夏に文化課職員により実施され，対象面積約２万㎡の中に百数十カ所に及ぶ試掘トレンチが設けられており，弥生土器が最も多く，土師器や須恵器もかなり出土している。近くの遺跡群で示されるような弥生時代や古墳時代の住居跡群が出土するものと判断されている。数少ないが縄文土器片や陶器片の出土があったことの報告も行われている。

第３節　調査地について

柏木谷遺跡は久木野村役場より直線で東約 1,000 mにあり，主要道路で最近改修工事が進み直線的に通過しやすい県道熊本－高森線道路のすぐ北側である。因みに北側を仰げば阿蘇五山の烏帽子岳（1,337 m）に御竈門山（1,152 m）と夜峰山（912 m）が連座している。一方南外輪は地蔵が岩（1,337 m）と駒返峠（1,153 m）に下がり城山（839 m）がそびえる。そして北側に急峻な丘陵が広がり山麓地帯を形成している。

調査地はこの山麓地帯の北側に延びる丘陵背部に当たる。西側は長谷川（ながたにがわ）の氾濫で大きく抉られ，東側は谷部となりそれぞれの比高差は著しい。調査地の最大長さは南北で約 200 m，最大幅は東西で約80mであり，一帯は段々畑を呈しており最も高い南端で約 422.5 m，最も低い北端で約 410.6 mであり，その差は約12mを測っている。

およそ北側を調査第Ⅰ区，南側を調査第Ⅱ区と仮称して調査を進め，次に磁北に合わせて経線を決め，この経線に直行する緯線を引き10mのグリッドを設けた。全体を網羅するように設けたグリッドは経線が東から西に英字で，緯線を北から南に数字で呼ぶこととした。例えて呼べば円墳の主体部はＬ－20グリッドに位置することになる。

調査地の地層はおよそ，耕作・客土→旧地表・黒色土→黄褐色粘質土→アカホヤ層となるため，表土剥ぎ作業は旧地表・黒色土層の下位面や黄褐色粘質土層の上位面で行うことを原則とし，これにしたがい遺構確認・検出作業を行っていった。

参考文献

野田　拓治編　『塚原』　熊本県文化財調査報告　第16集　　熊本県教育委員会　　1975
江本　　直編　『陽の丘遺跡』　　長陽村教育委員会　　1985
藤崎　清一他編　『むらの歩み』久木野村誌第二巻　　久木野村教育委員会　　1990
熊本県教育委員会編　『文化財通信くまもと』第２号　　1991
熊本県教育委員会編　『文化財通信くまもと』第３号　　1992
熊本県教育委員会編　『文化財通信くまもと』第６号　　1993

第Ⅱ章　調査結果

第１節　全体の遺構・遺物

今回の調査で検出できた各時代ごとの遺構と遺物は下記のとおりである。

(1)　縄文時代

住居跡　前期２軒　第20・21号住居跡

晩期３軒　第15・16・17号住居跡

遺　物　土器・石器

(2)　弥生時代

住居跡　後期16軒

土壙墓　５基

(3)　古墳時代

方形周溝墓　12基　　円形周溝墓　９基

円　　墳　１基　　単独石棺　１基

(4)　古代～近世

掘立柱建物　１基　　土壙墓（中世）１基　　溝遺構（近世）２基

第２節　縄文時代の調査

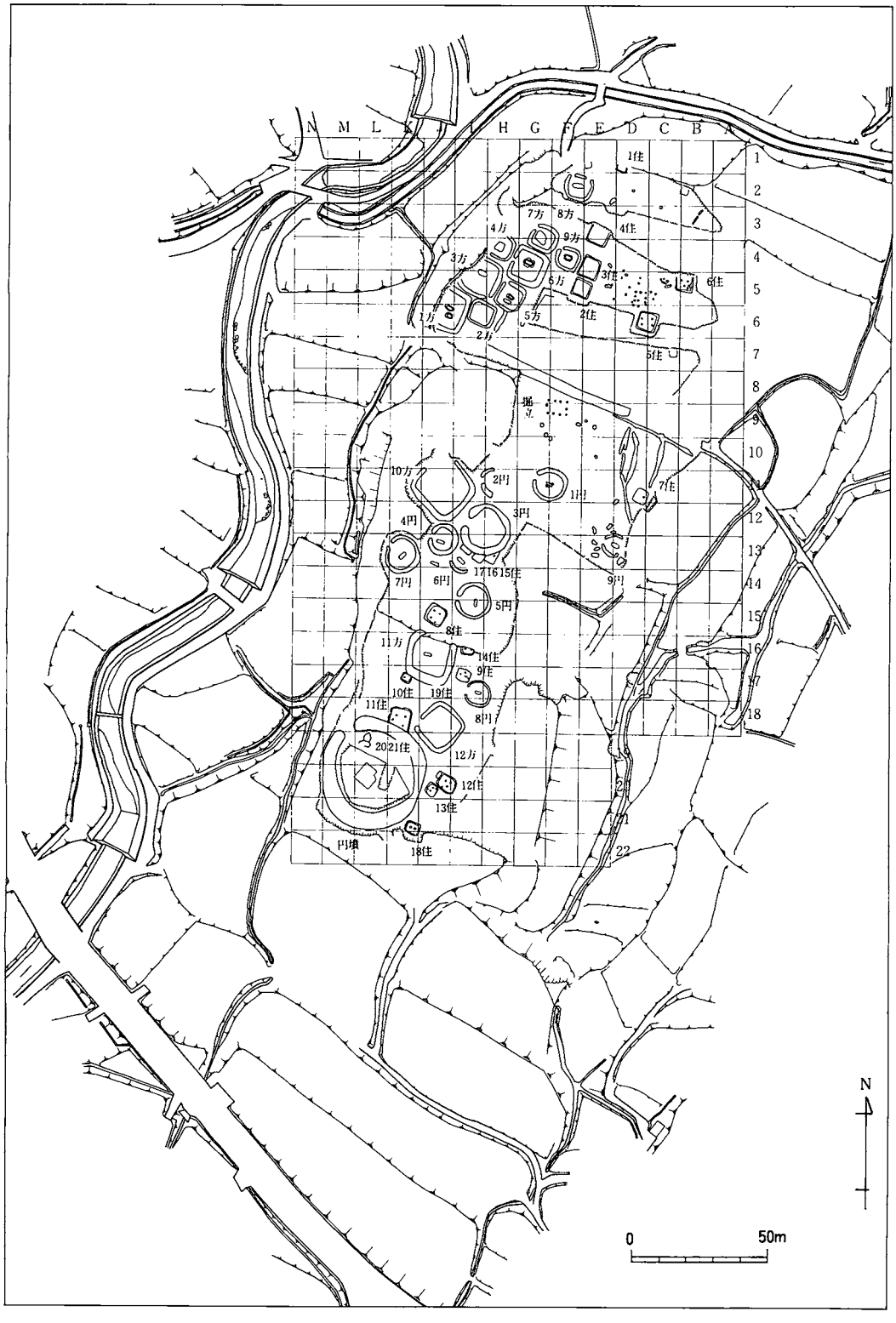
(1)　縄文早・前・中期の遺構・遺物（第３図）

〔遺　　構〕

縄文時代として捉えた遺構は上記したように前期２軒と晩期３軒の住居跡である。前期の２軒の住居跡は円墳の墳丘下から検出されたものである。双方の形状は小判形もしくは長楕円形を呈している。長径で３ｍに及ばない小型の住居跡である。著しい床面の硬化面などは見られないが，埋土から早期の撚糸文土器の底部片や前期の土器片が検出されており，後行する前期の住居跡であると判断している。

この遺跡の基本的な層位を円墳の墳丘の断面で観察すると（第66図円墳墳丘断面図参照），ほぼ中位に30～40cmの厚さの黒色土が走る。すなわち第Ⅴ層の旧地表土と第Ⅵ層の「黒ボク土層」である。この下位に第Ⅶ層・「黄褐色粘質土層」があり，深いところは100 cm程の厚さになることがある。そしてその下に第Ⅷ層・「黒ニガ層」が続くことになる。

第Ⅶ層・「黄褐色粘質土層」の下部にあたるところには「アカホヤ火山灰」（約6,200年前の鹿児島県喜界島火山灰）が認められ，第Ⅷ層・「黒ニガ層」は約10,000年前の阿蘇火山起源の



A

第２図　柏木谷遺跡全体測量図

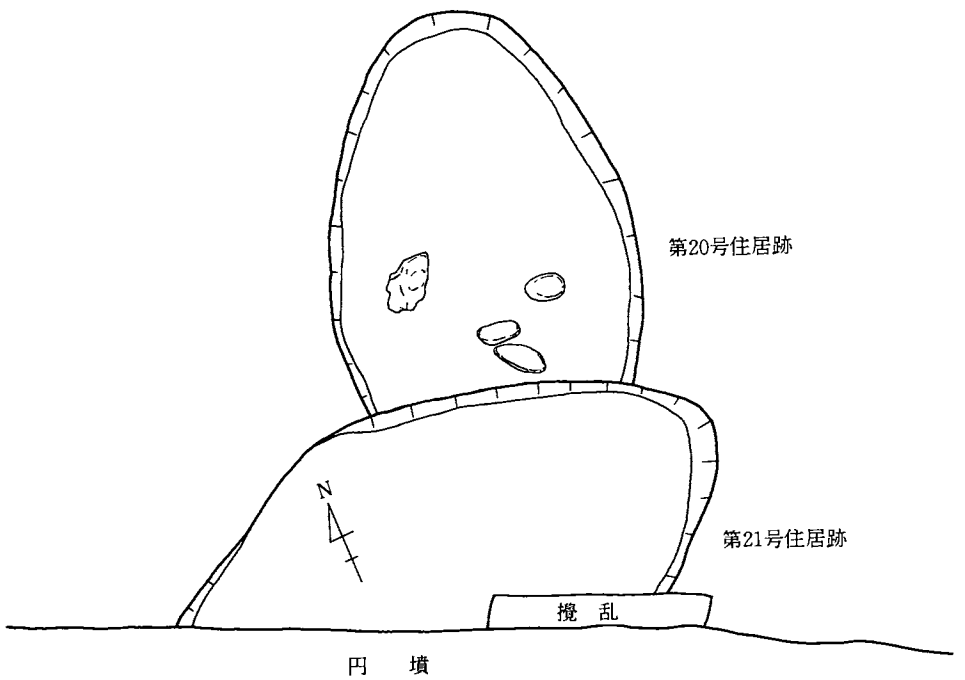
テフラと考えられる。

この住居跡は「黄褐色粘質土層」を掘り込んで作られ，埋土は黄褐色を主調とした色調である。

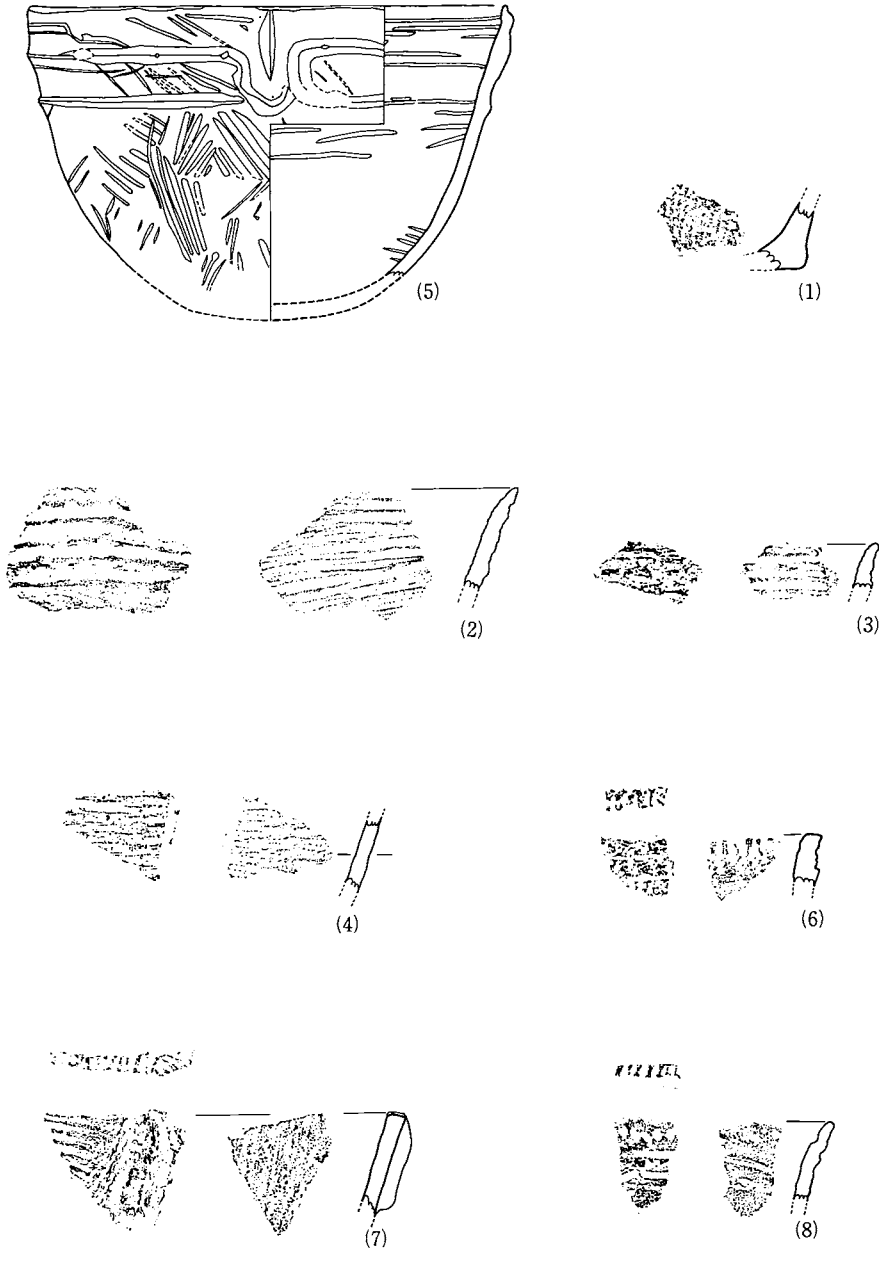
この前期の土器片は第20・21号住居跡のほかにも出土地点がある。一方は，円墳の周溝の埋土の中や主体部トレンチなど円墳の周囲から出土しているもので，２軒の住居跡のほかにも住居が営まれていた可能性がある。他方は第５号住居跡付近にやや集中して土器が出土している。前者は古墳の周溝の埋土などから出土したものであり，一次的出土状態を明らかにするにはいたらないが，後者は弥生時代の第５号住居跡の北側壁面から出土しており，轟式土器の出土層位の確認にてがかりを与えてくれそうである。

第５号住居跡付近は上記の「黄褐色粘質土」が厚く堆積しており，80cmほどの厚さがある。住居跡はこの土に掘り込まれている。そして，轟式土器は住居跡の掘り口の高さから20～30cm程下がった壁面から出土しており，「黄褐色粘質土層」の上位から中位にかけてに包蔵されていたものと判断することができる。

「黄褐色粘質土」の下部には汚れのない「アカホヤ火山灰」が確認されることから，この土器は「アカホヤ火山灰」降下した以降の時期に包含された可能性が強いと述べておくことができよう。



第３図　第20･21号住居跡実測図



第４図　縄文早･前･中期土器実測図（１～８）

0　5　10cm

〔遺　　物〕

縄文早・前期の遺物（第４図）

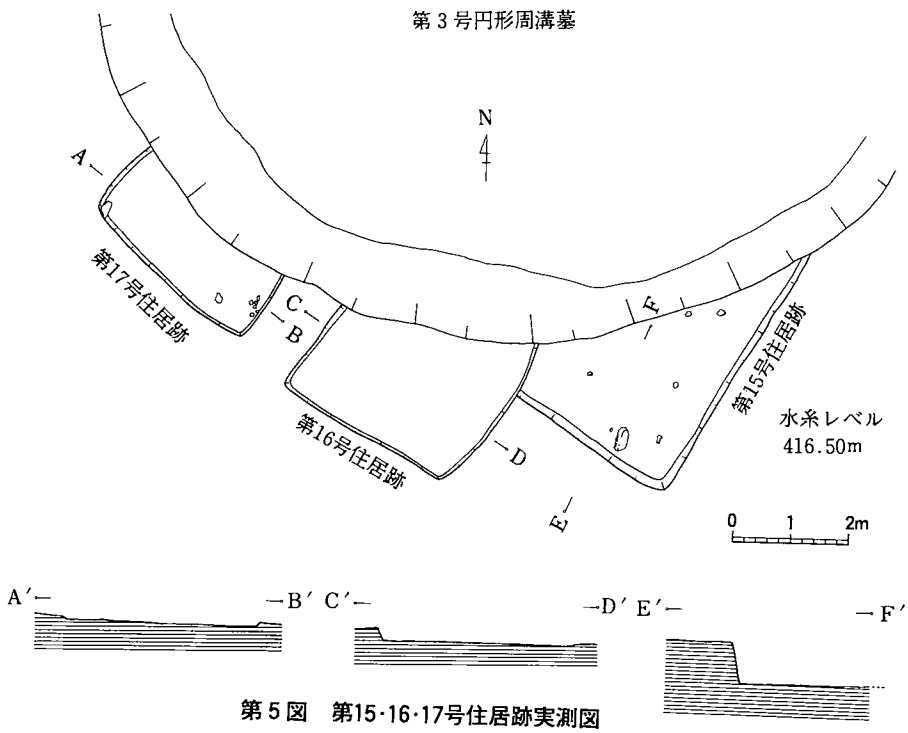
（１～４）は第20・21号住居跡及びその周辺から出土した土器である。(1)は平底を呈する底部片で，器面に撚糸による回転押圧痕跡が明瞭に残されている。（２～４）は轟式土器片である。口縁部及び胴部片で深鉢と判断されるが内外面に特徴的な条痕が見られる。焼成はやや弱く幾分粗い胎土である。(5)は完形に復原できた資料である。第５号住居跡北側壁面から出土している。器形は丸底で口縁が開く深鉢である。復原により口径20.9cm，器高13.4cmを測る。色調は黒褐色を呈し器面に煤の付着がある。内外面には特徴的な条痕の調整痕がみられ焼成は充分である。細い隆帯文を施しているのは特徴的である。

中期の遺物

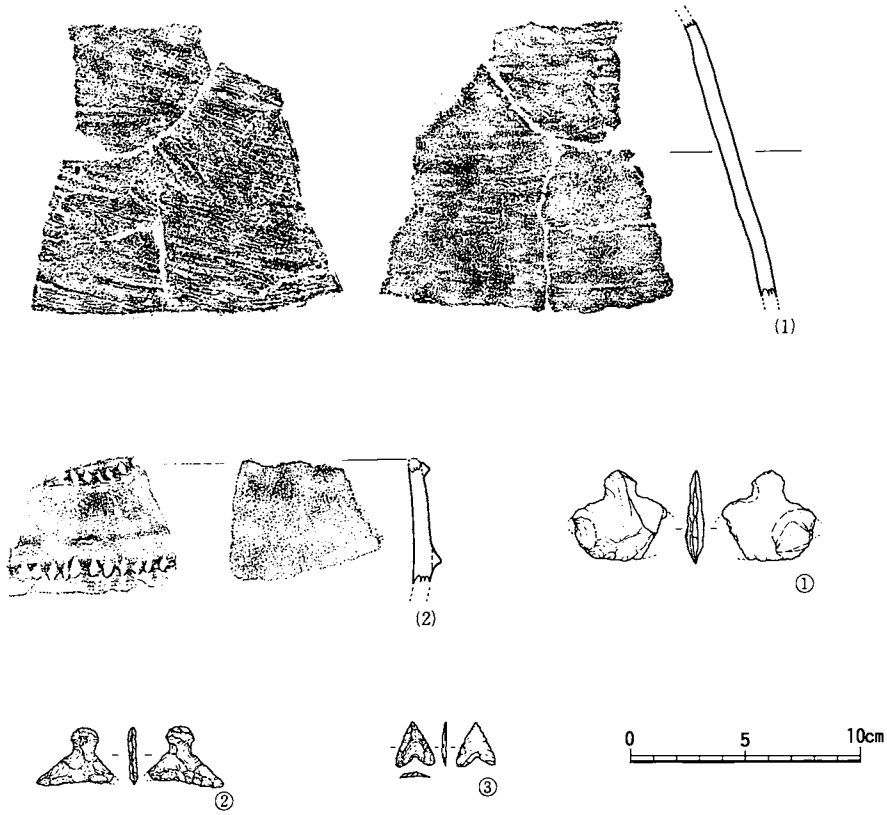
縄文土器の細片（６～８）を３点取り上げている。いずれも口縁部片で，内外面及び口唇部に施文されている。条痕文や刺突文で貝殻による施文も行われている。また，(7)には縦走する隆帯がある。中期の土器としておきたい。

(2)　縄文晩期の遺構・遺物（第５図）（第６図）

Ｈ．Ｉ-13グリッドで３軒の住居跡を検出している。第15～17号住居跡で，いずれも北側半分



第５図　第15･16･17号住居跡実測図



第６図　縄文晩期土器（１・２）　**縄文時代石器実測図**①～③

を第３号円形周溝墓で断ち切られている。形状はやや隅丸を呈する方形で床面までは20～30cmが残されていた。第16号が第15号を切り時期的に後行する。３軒の住居跡が横に並び，第15号住居跡の床面に晩期土器が出土したことにより縄文晩期の住居跡であることが判断される。土器は深鉢の口縁部と胴部片である。口縁部には二条の刻目突帯文が巡らせている。胴部片は粗製土器であり煤の付着が著しい。

(3)　縄文時代の石器（第６図）

３点の石器があり，石匙２点と石鏃１点である。いずれも石質は安山岩で粗いリタッチでそれぞれに仕上げている。２点の石匙は横形の形状を示し，両面を交互剥離により刃部を形成するがツマミは何とか作られたものである。石鏃は三角形をイメージして製作されたのであろうが裏面はリタッチも少なく片面加工に終わるかにあり，不規則な形状にとどまっている。

第３節　弥生時代の調査

(1)　住居群の構成

弥生時代は住居跡16軒と土壙５基を検出している。すなわち，今回検出した21軒の住居跡の中で前記してきた縄文時代の住居跡５軒を除く16軒の住居跡はすべて弥生時代の住居跡と判断している。

消失したり未調査地区での状況は推することはできないが，16軒の住居跡で見るかぎり中間地帯に広い空白地帯を持ちながらおよそ①～③の３グループに分けることができよう。

①北側の最も低い場所に位置する６軒　「第（１・２・３・４・５・６）号住居跡」

第５・６号住居跡を典型とするが，第１～４号住居跡については不規則な形状，浅い床面，柱穴の不確認，少ない遺物など前者と同じく捉えるのには疑問を有している。削平されてしまっているが東側及び北側にも存在していたものであろう。

②中央部東側に位置する１軒　「第７号住居跡」

今回の調査でここ中央部は各時代をとおしての空白地帯である。その中に第７号住居跡１軒だけが検出されている。１軒だけにとどまるとは考えがたく住居跡群は東側に多く存在していたものであろう。

③南側の最も高い場所に位置する９軒　「第（８・９・10・11・12・13・14・18・19）号住居跡」

９軒の住居跡を１つのグループとしたが，１つの大型住居跡に中型ないし小型の４～５軒の住居跡が付随するとした捉え方をすれば更に２つのグループとして分けられようか。すなわち第８号と第11号をそれぞれ大型の住居跡と捉えると，これに残りの４軒及び３軒の住居跡が付随する状況を呈するのである。

(2)　各住居跡の調査結果

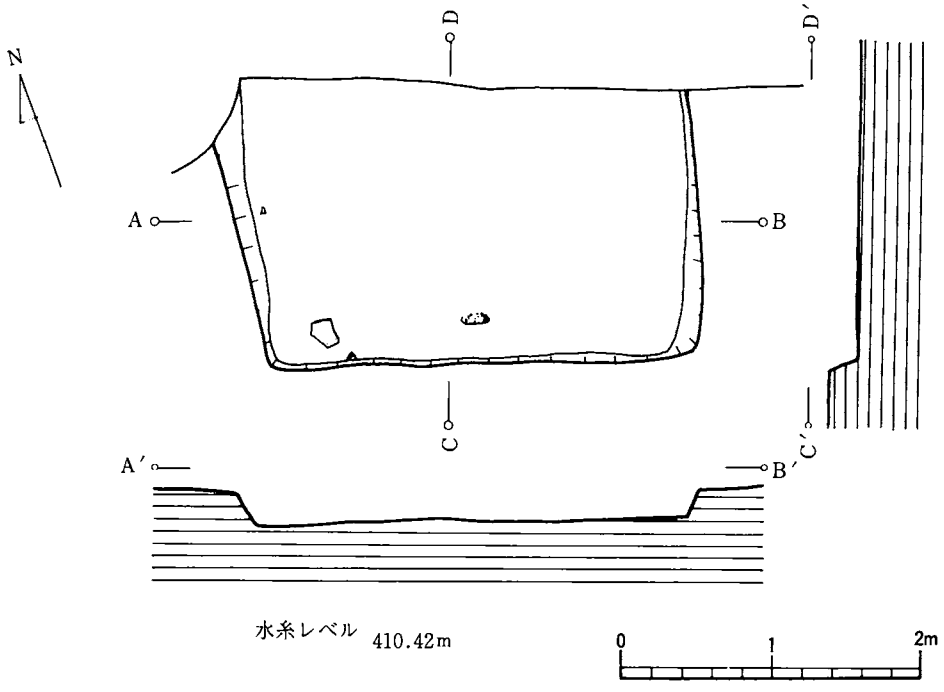
出土した16軒の住居跡を番号に従い報告を行っていくことにしたい。

第１号住居跡（第７図）

今回の調査区の最も北側にあたりＤ－１グリッドで検出された。床面には若干の硬化面が残り，壁高は10cm弱で，規模の小さい住居跡である。削平されているが北側に小グループの住居跡が存在していたと思われる。

第２号住居跡（第８図）

第１～９号方形周溝墓群の東側に近接して第３・４号住居跡と並んで検出された。床面には



第７図　第１号住居跡実測図

若干の硬化面が残り，壁高は10cm弱で，柱穴は明確にできなかった。土器片は散在する程度であった。

第３号住居跡（第９図）

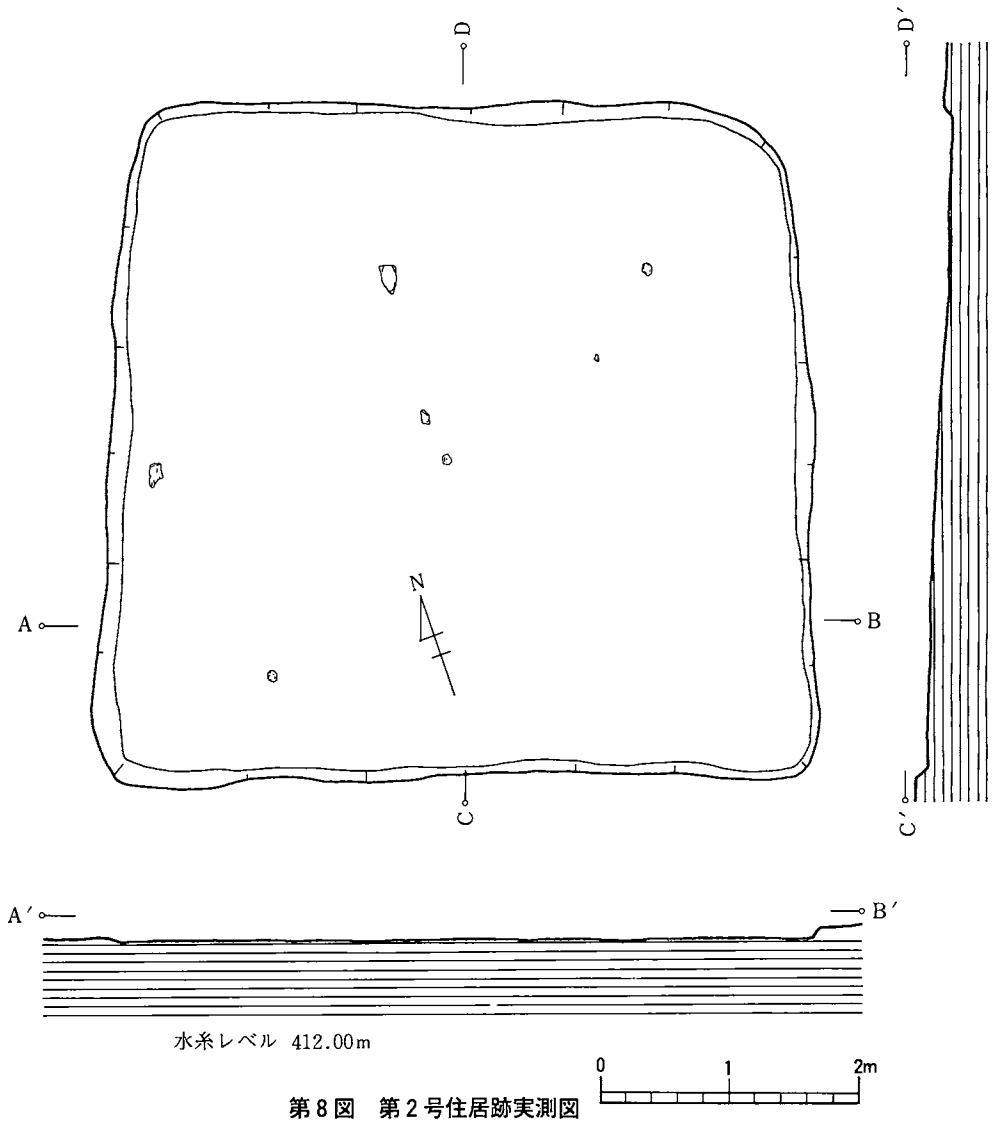
第１～９号方形周溝墓群の東側に近接して第２・４号住居跡と並んで検出された。床面には若干の硬化面が残り，壁高は10cm弱で，柱穴は明確にできなかった。土器片は散在する程度であった。西隅がやや出っ張り幾分不規則な形状である。

第４号住居跡（第10図）

第１～９号方形周溝墓群の東側に近接して第２・３号住居跡と並んで検出された。床面には若干の硬化面が残り，壁高は20cm弱で，柱穴は明確にできなかった。土器片は散在する程度であった。やや大型の住居跡でほぼ正方形である。

出土遺物（第11図）

高坏の実測が可能であった。やや小型の高坏で脚部片資料である。明褐色の色調で石英などの砂粒を多く含んおり焼成は充分である。筒部に刷毛目の調整痕が見られる。４個の透かしが設けられている。



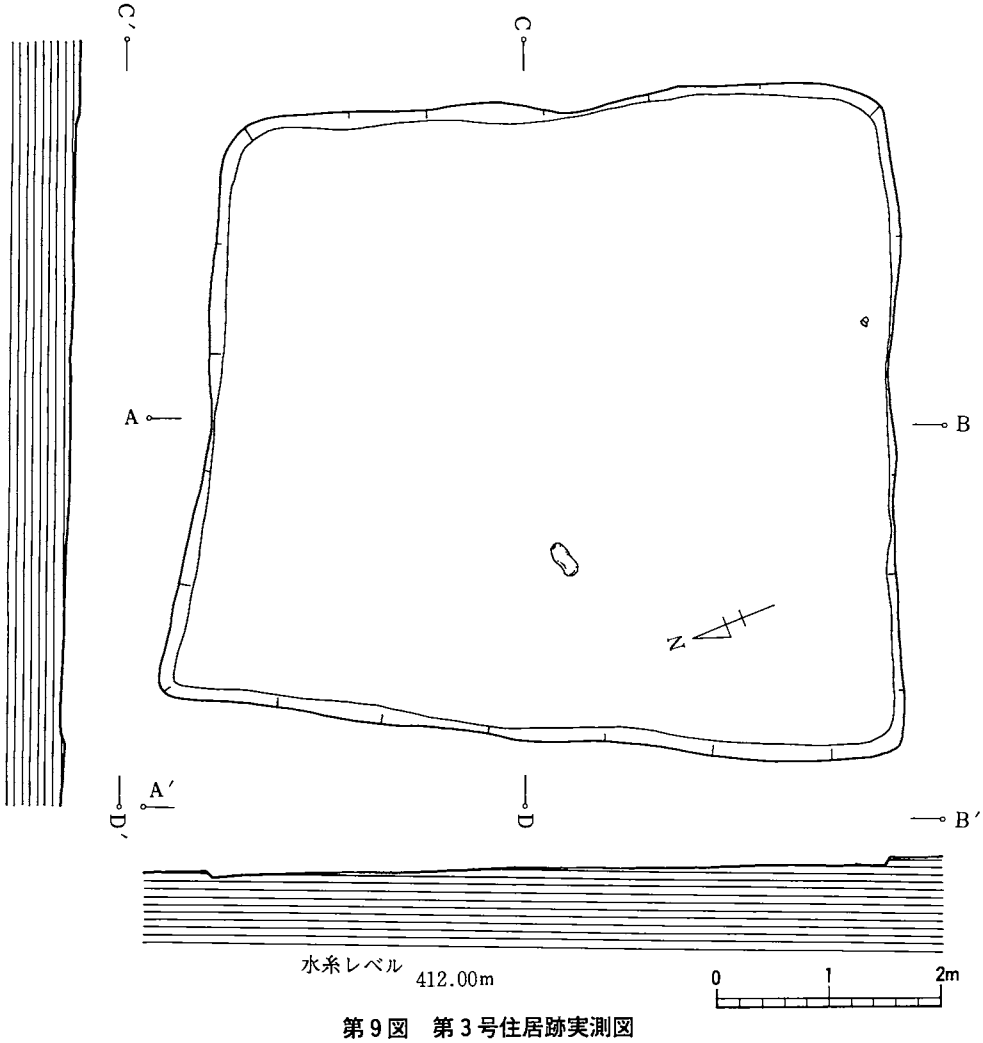
第8図　第2号住居跡実測図

第5号住居跡（第12図）

第C.D-6グリッドで検出された。第6号住居跡に近接する。5.78m×5.72mの規模で最大壁高は0.64mを測り遺存状態は良好である。隅丸でほぼ正方形の形状である。柱穴は6個確認でき角度が幾分ずれているが4本柱の住居跡であろう。中央部には炉跡がある。床には硬化面が残り焼土や炭化物が確認できた。遺物の出土が多い。なお，北側壁面から轟式土器が出土しており，この土器については縄文時代の出土遺物の項で報告している。

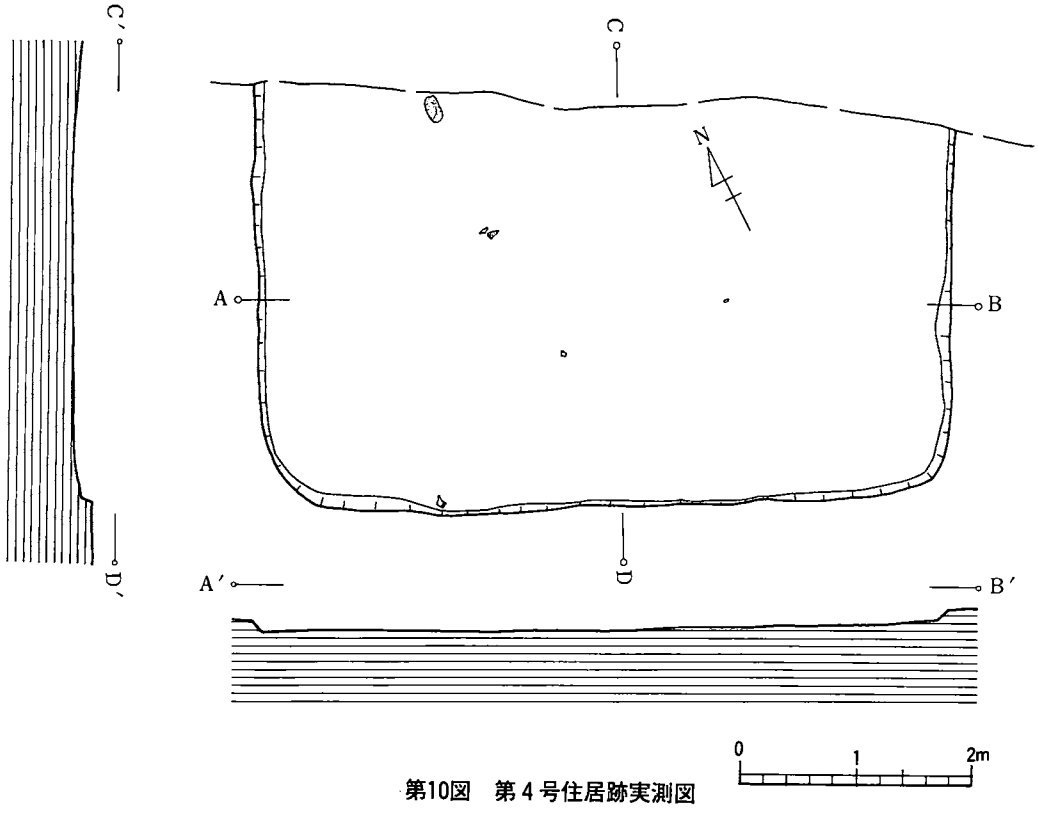
出土遺物（第13・14図）

(1)は口径が32.4cmを測る大型の甕形土器である。器壁も厚く10mmを越えるところも見られる。明褐色の色調で石英などの砂粒を多く含んでおり焼成は充分である。器面に刷毛目の調整痕が

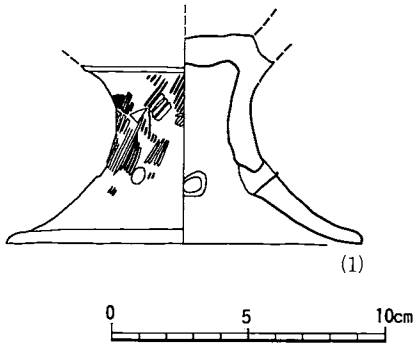


第９図　第３号住居跡実測図

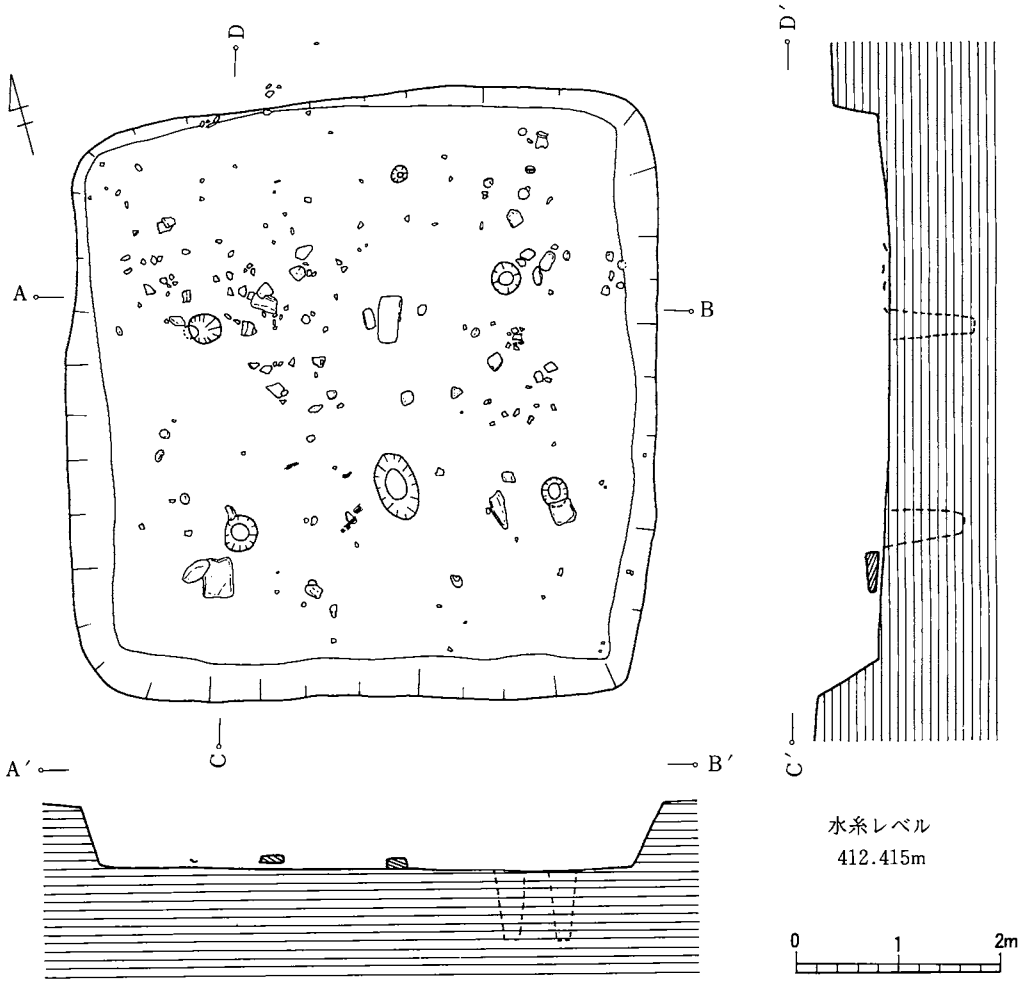
見られるが，内面は横ナデを主調とした調整で仕上げている。頸部と肩部に２条の突帯を横走させ，縦走は３条が確認され消失部分を推定すると４条になろう。器面には煤の付着が著しい。（2～4）は甕形土器で（2.4）は脚台を失している。口縁部は「く」の字にそれぞれに外反するが，幾分湾曲したり口唇部に凹線をもつなどの変化が見られる。内外面は丁寧な刷毛目調整が施されており刷毛目幅には差異がある。いずれも器面には煤の付着がある。（5.6）は壺形土器であろうか。（5）は頸部が窄まり(6)の底部は尖底状を呈する特色がある。（7.8）は壺形付甕形土器の脚部片である。（7）は脚が長く内面天井の砂粒の押圧痕が著しい。（8）は逆に脚の短い脚台で刷毛目調整が明瞭に残る。（9）は小型の壺である。



第10図　第４号住居跡実測図



第11図　第４号住居跡出土遺物実測図

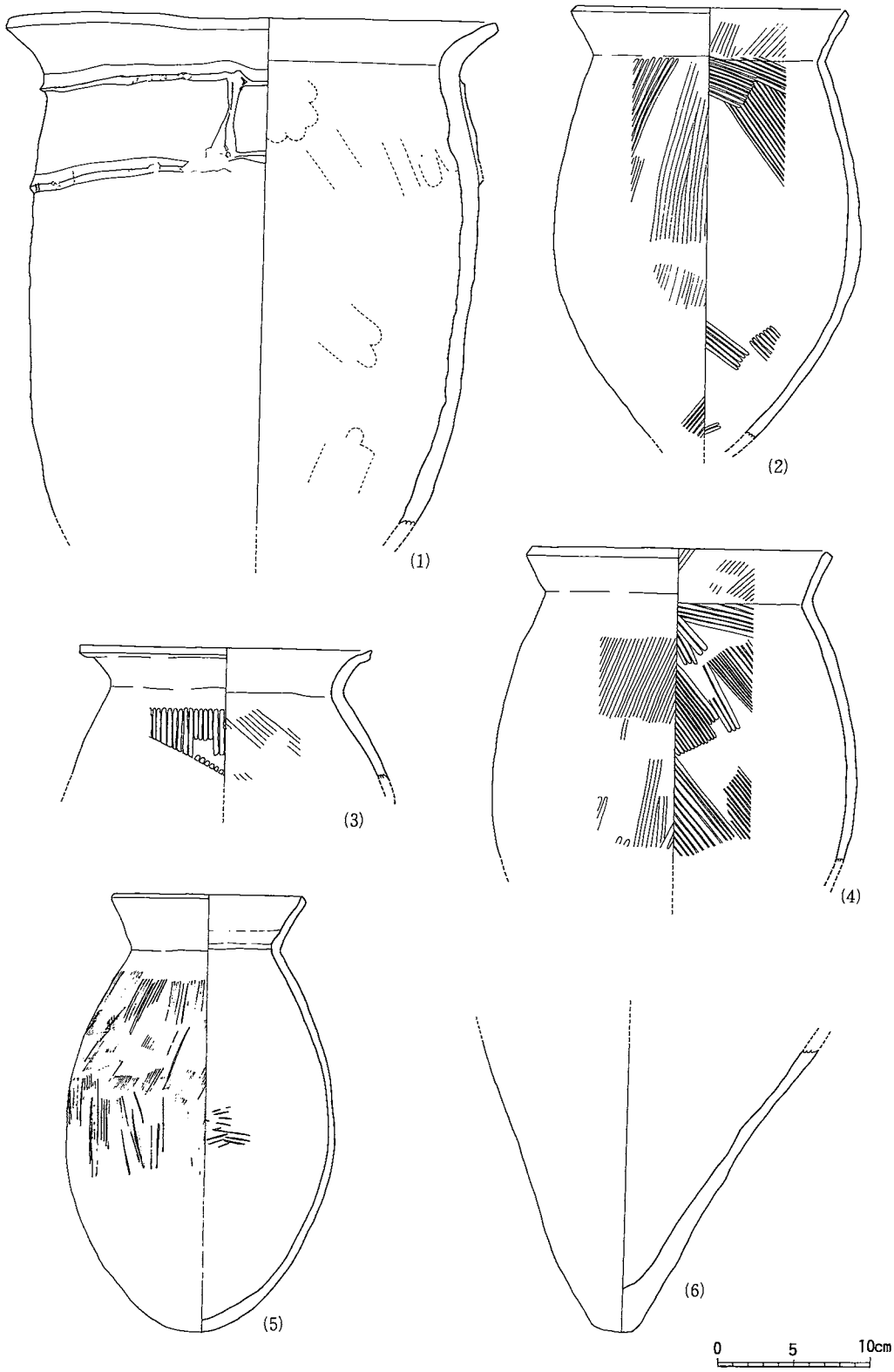


第12図　第５号住居跡実測図

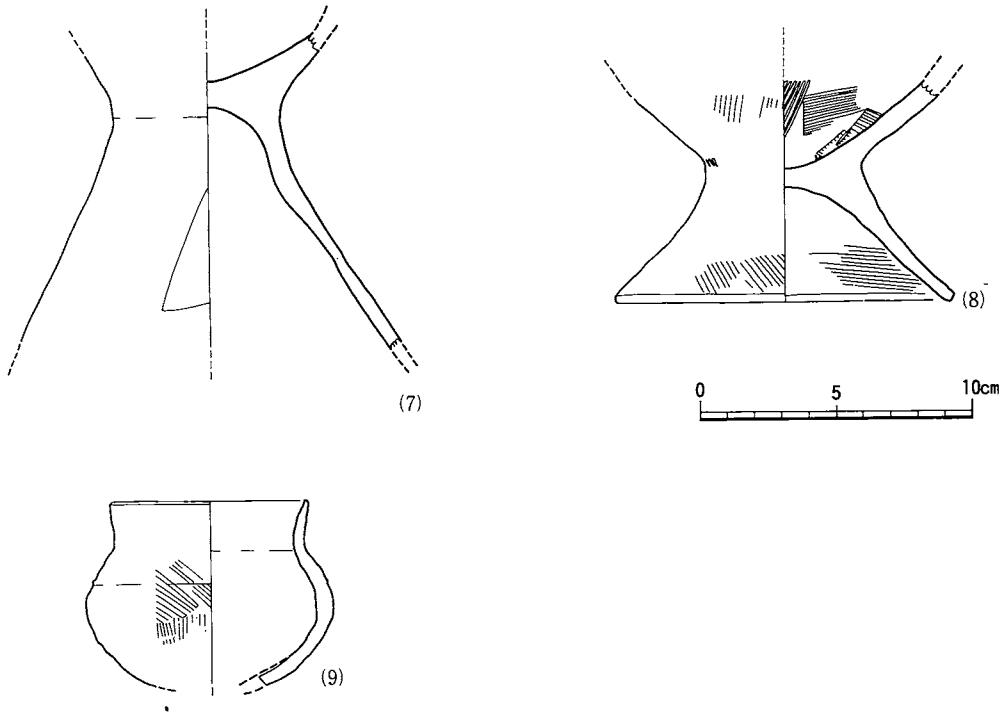
第６号住居跡（第15図）

第B-5グリッドで検出された。第５号住居跡に近接する。4.79m×4.36mの規模で最大壁高は0.56mを測り遺存状態は良好である。隅丸方形の形状である。焼土や炭化物が大量に出土しており焼失家屋である。柱穴は５個確認でき４本柱の住居跡であろう。床には硬化面が残り焼土や炭化物が確認できた。中央部には炉跡がある。遺物の出土が多い。なお，東側壁面近くに1.18m×0.87m規模の土壙があり，ほぼ完形を呈する壺・脚台付甕形土器・長頸壺（免田式土器）の３点の土器がセット状態で出土している。３点の土器はやや傾いた状態で東方向に向けられている。これらの土器は焼失家屋でありながら全く加熱を受けておらず，整然とした状況を示しており家屋の焼失後に埋納されたものと判断される。

出土遺物（第16・17図）

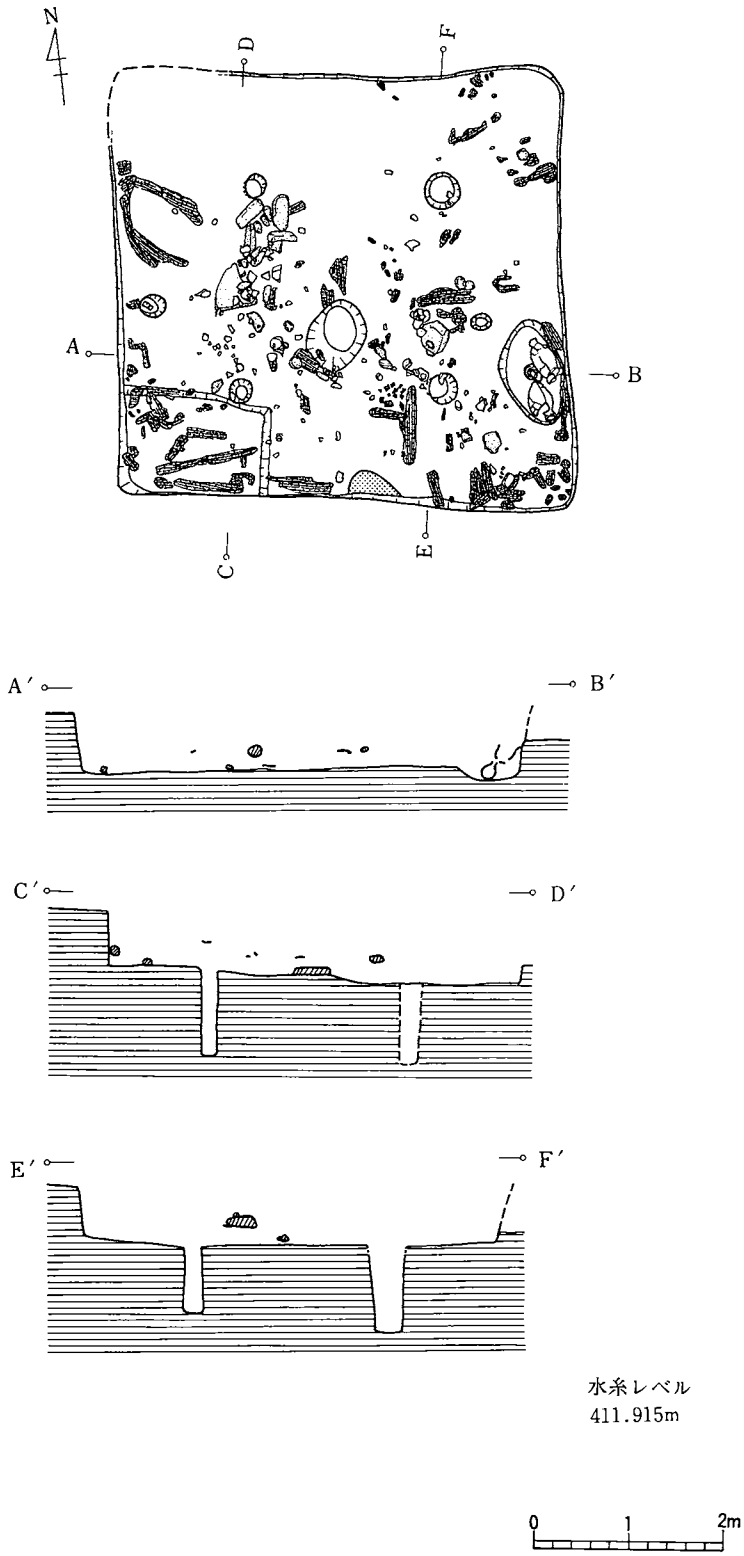


第13図　第５号住居跡出土遺物実測図（１～６）

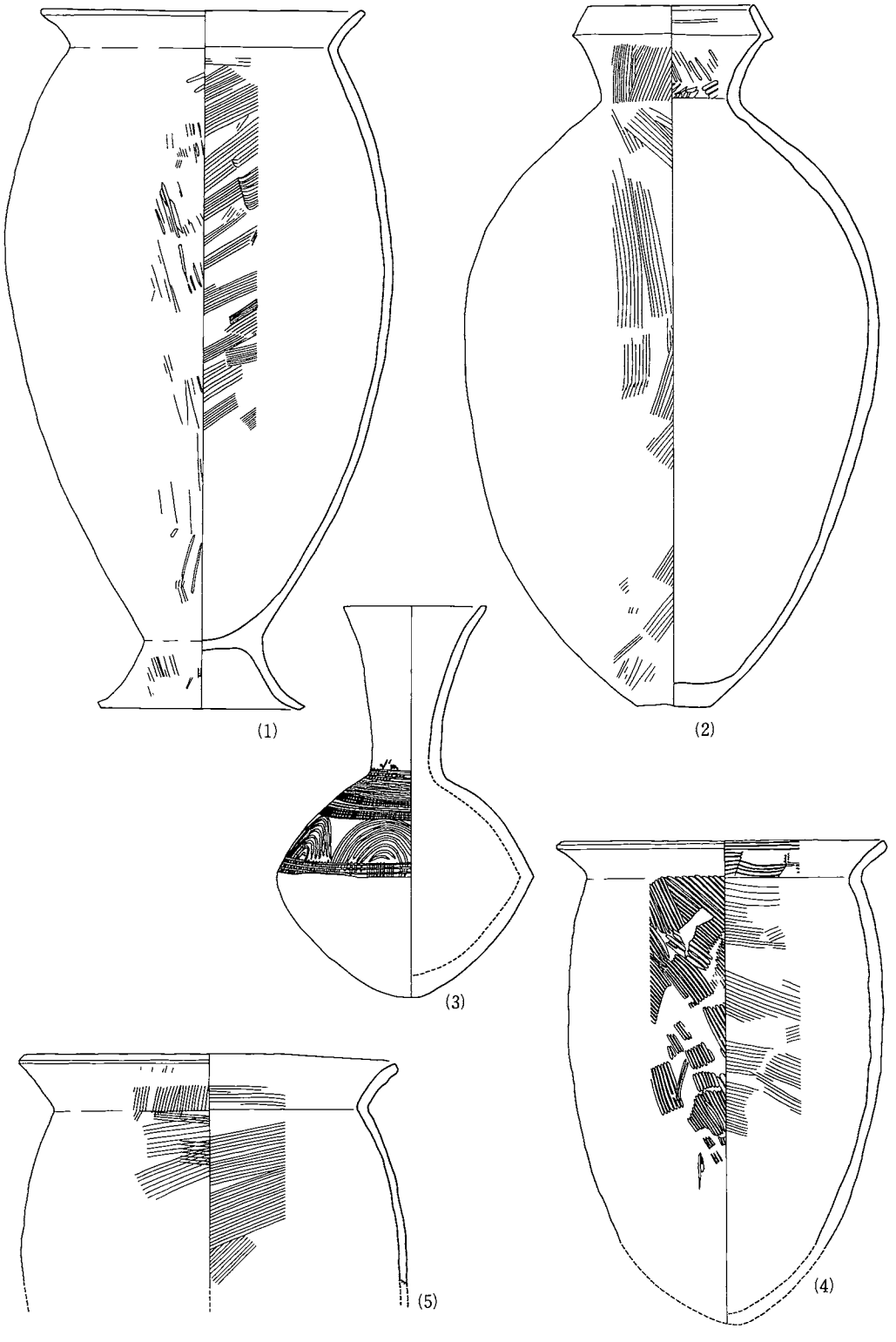


第14図　第５号住居跡出土遺物実測図（７～９）

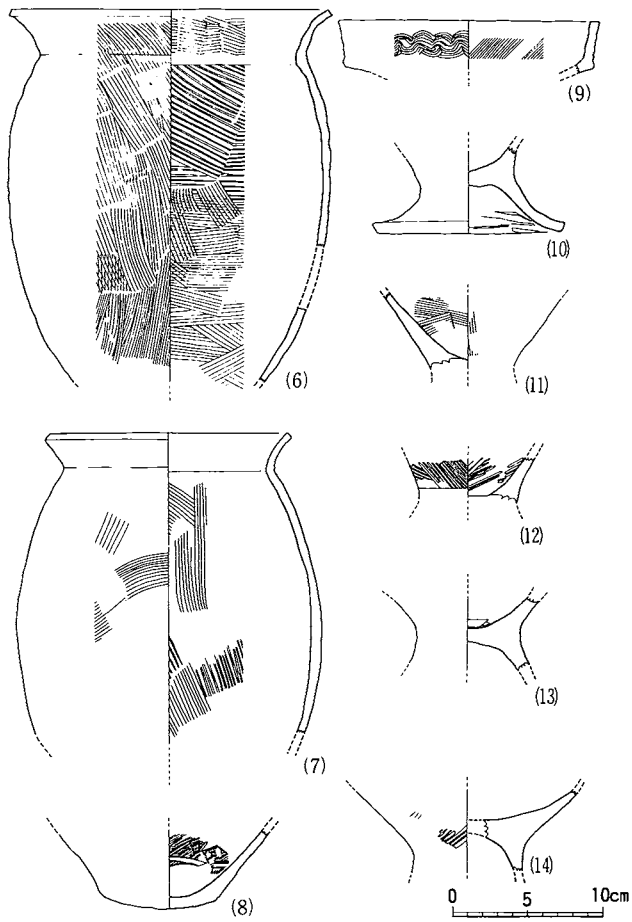
(1)は口径21.5cm，器高45.3cmを測る脚台付の甕形土器で，端正なプロポーションを見せる。口縁部は「く」の字に外反し，口唇部は若干の丸みをもっている。脚台は低めで内面の砂粒痕跡は認められない。器面に刷毛目の調整痕が見られるが基礎的なタタキジメの痕跡が見られる。明褐色の色調で石英などの砂粒を多く含んおり焼成は充分である。(2)は口径11.0cm，器高45.3cmを測る壺形土器で，端正なプロポーションを見せる。口縁部は逆「く」の字を呈し，口唇部は若干の丸みをもっている。底部は若干上げ底ぎみの底部である。内外面は刷毛目による丁寧な調整が重ねられ，粗・密，数種類の刷毛目が見られる。明褐色の色調で石英などの砂粒を多く含んおり焼成は充分である。(3)は口径9.6cm，器高25.4cmを測る長頸壺である。頸部から口縁部にかけてラッパ状に開き，胴部は算盤の玉型を呈している。若干尖り気味の底部である。胴部上半に施文があり，所謂重孤文を区画するように上下に横線を走らせている。横線にはさらに縦線を重ね格子目状になっている。色調は赤褐色で胎土には石英などの砂粒を含んでいる。焼成も充分で堅緻である。(4～7) は脚台を失しているがいずれも脚台付の甕形土器であろう。(9)は口縁部に文様をもつ壺で，文様は櫛状の施文具で四半弧を連続させて波状文としている。このほか脚台片の出土があった。



第15図　第６号住居跡実測図



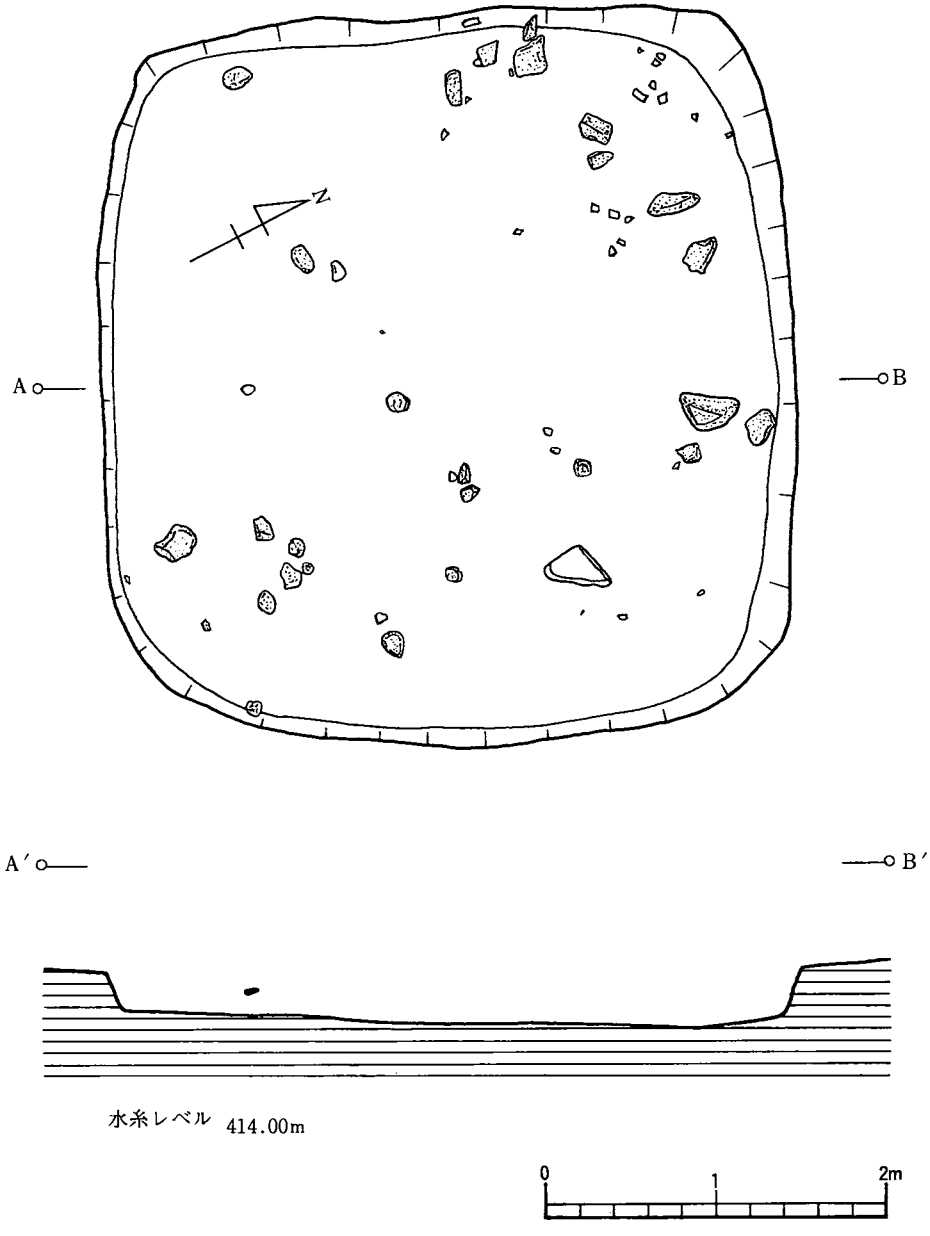
第16図　第６号住居跡出土遺物実測図（１～５）



第17図　第６号住居跡出土遺物実測図（６～14）

第７号住居跡（第18図）

第D-11グリッドで検出された。調査区のほぼ中央部に位置し単独の出土状態を示している。削平されてしまっているが東側に同一グループの住居跡が所在していたものであろう。4.24m×4.08mの規模でやや小型の住居跡である。最大壁高は0.23mを測り遺存状態は良好である。隅丸方形の形状である。床には硬化面が残り焼土や炭化物が確認できた。中央部には炉跡がある。遺物の出土は少量である。



第18図　第７号住居跡実測図

出土遺物

土器片は実測を行うまでにいたっていない。甕形土器片などが確認できる。

第８号住居跡（第19図）

第Ｊ-15グリッドで検出された。第９・10・14・19号住居跡に近接して出土し，５軒の住居跡で小グループを形成するかのようである。6.27m×5.89mの規模でやや大型の住居跡である。最大壁高は0.64mを測り遺存状態は良好である。隅丸でほぼ正方形の形状である。柱穴は７個確認でき，内１本の角度がややずれるが４本柱の住居跡であろう。床には強い硬化面が残り焼土や炭化物が確認できた。中央部には炉跡がある。

出土遺物（第20図）(1)

(1)は復原での口径16.4cm測る甕形土器である。口縁部は「く」の字に外反し，口唇部は若干の丸みをもっている。器面に刷毛目の調整痕が見られるが内面は箆削り調整である。色調は明褐色石英などの砂粒を含み焼成は充分である。周溝墓からの混入遺物のであろう。

第９号住居跡（第21図）

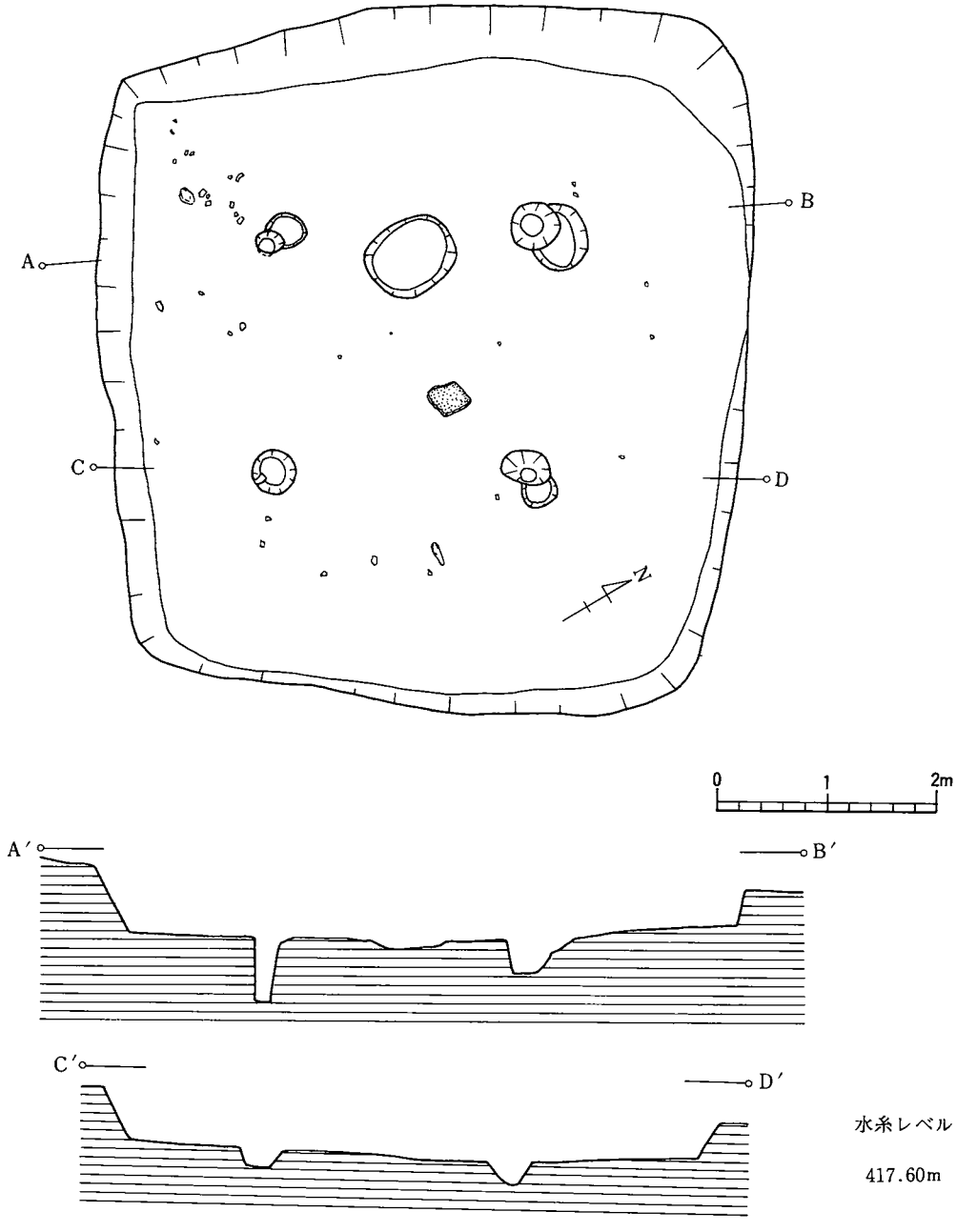
第Ｉ-17グリッドで検出された。第９・10・14・19号住居跡に近接して出土している。4.18m×3.54mの規模でやや小型の住居跡である。最大壁高は0.73mを測り遺存状態は良好である。隅丸方形の形状である。柱穴は５個確認でき，２本柱住居跡の可能性がある。床には硬化面が残り焼土や炭化物も少量確認できた。中央部には炉跡がある。遺物の出土は少ない。

第10号住居跡（第22図）

第Ｋ-17グリッドで検出された。北側を第11号方形周溝墓に切られており，第９・10・14・19号住居跡に近接して出土している。3.04m×2.54mの規模でやや小型の住居跡である。最大壁高は0.60mを測り遺存状態は良好である。隅丸方形の形状である。柱穴は２個確認でき，２本柱住居跡の可能性がある。床には硬化面が残り焼土や炭化物も少量確認できた。中央部には炉跡がある。遺物の出土は少ない。

第11号住居跡（第23図）

第Ｋ-18グリッドで検出された。北側を円墳に切られており，第10・19号住居跡に近接して出土している。6.49m×5.96mの規模でやや大型の住居跡である。最大壁高は0.50mを測り遺存状態は良好である。隅丸でほぼ正方形の形状である。柱穴は４個確認でき，４本柱住居跡のであろう。床には硬化面が残り焼土や炭化物も多く出土している。中央部には炉跡がある。遺物も多く出土している。



第19図　第８号住居跡実測図

出土遺物（第20図）（２～５）

⑵は壺形土器の口縁部片である。逆「く」の字となり，口唇は平たくなる。内外面に櫛目調整が施されている。⑶は口縁部の一部及び底部を欠失している。複合口縁部となり頸部がしまり卵形の胴部である。内外面は丁寧な刷毛目の調整痕が見られる。色調は明褐色を呈し，胎土は石英などの砂粒を多く含む。焼成は充分である。⑷は口径20.6cm，器高40.8cmを測る脚台付の甕形土器で，端正なプロポーションを見せる。口縁部はやや短く，「く」の字に外反し，口唇部は若干の丸みをもっている。脚台は低めで内面の砂粒痕跡が著しい。内外面は刷毛目の調整痕が見られる。色調は明褐色で石英などの砂粒を多く含んでおり焼成は充分である。⑸は口径14.1cm，器高15.4cmを測る小型の壺形土器である。底部の器厚が厚くなる。内外面は刷毛目の調整痕が見られる。色調は明褐色で石英・雲母などの砂粒を多く含んおり焼成は充分である。

第12号住居跡（第24図）

第Ⅰ.Ｊ-20グリッドで検出された。第13号住居跡に近接して出土している。5.70m×4.31mの規模で中型の住居跡である。最大壁高は0.21mを測り遺存状態は良好である。隅丸方形の形状である。柱穴は６個確認でき，４本柱の住居跡のであろう。床には硬化面が残り焼土や炭化物も多く出土している。中央部には炉跡がある。遺物も多く出土している。

出土遺物（第20図）⑹

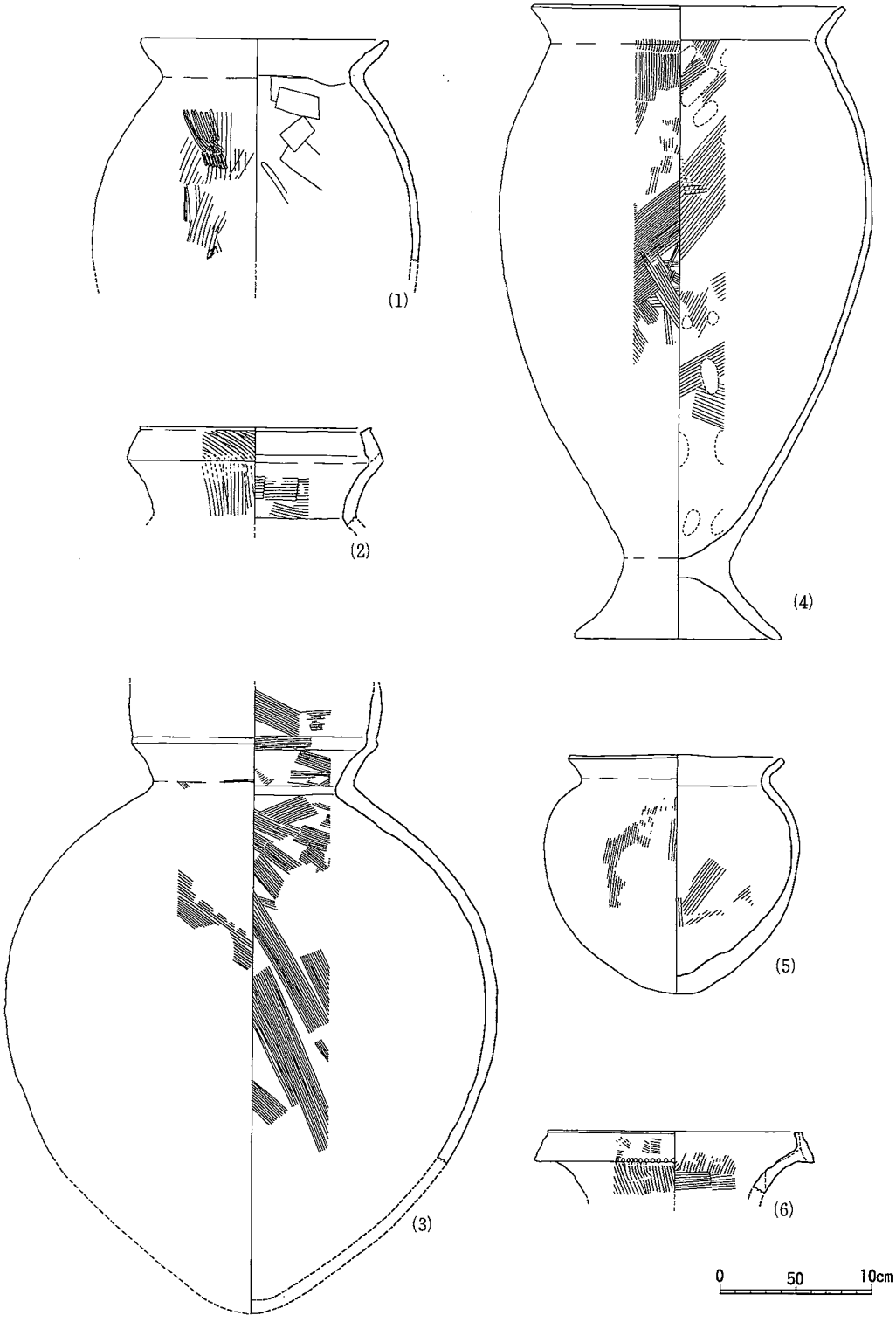
⑹は壺形土器の口縁部片である。逆「く」の字となり，口唇は平たくなる。内外面に櫛目調整が施されている。複合口縁部となり内外面は丁寧な刷毛目の調整痕が見られる。色調は明褐色で石英などの砂粒を含み焼成は充分である。堅緻である。

第13号住居跡（第25図）

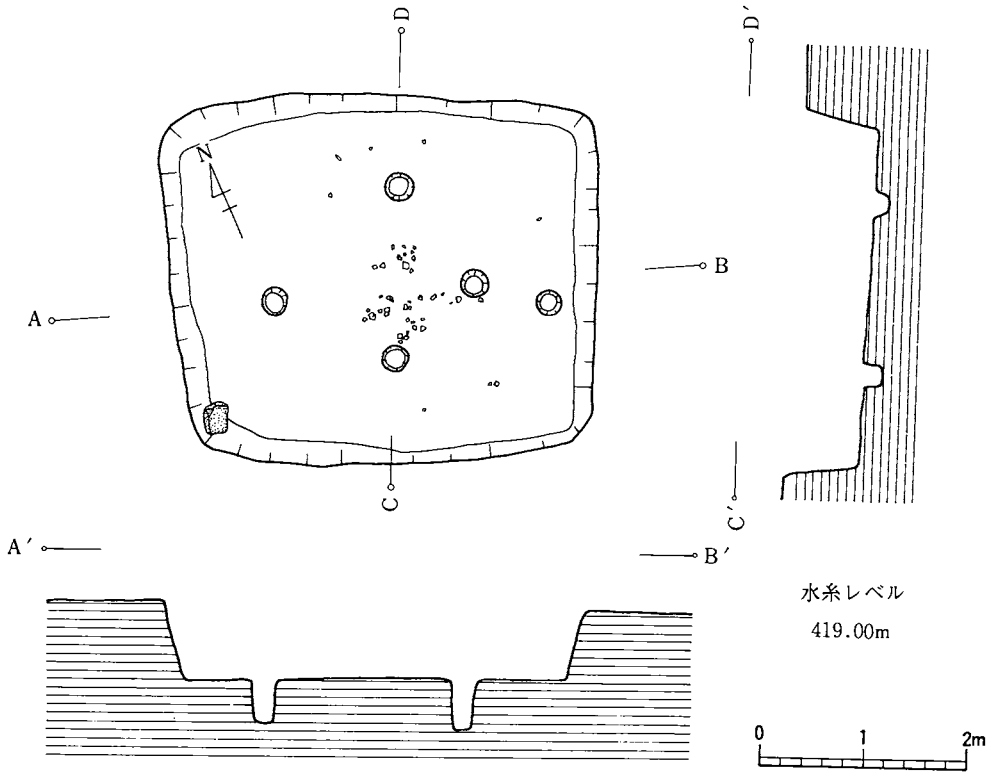
第Ｊ-20グリッドで検出された。第12号住居跡に近接して出土している。3.36m×3.20mの規模で小型の住居跡である。最大壁高は0.23mを測り遺存状態はあまり良くない。隅丸方形の形状である。柱穴は５個確認でき，４本柱の住居跡のであろう。床には硬化面が残り焼土や炭化物も見られた。中央部には炉跡がある。遺物は少ない。

出土遺物（第26図）

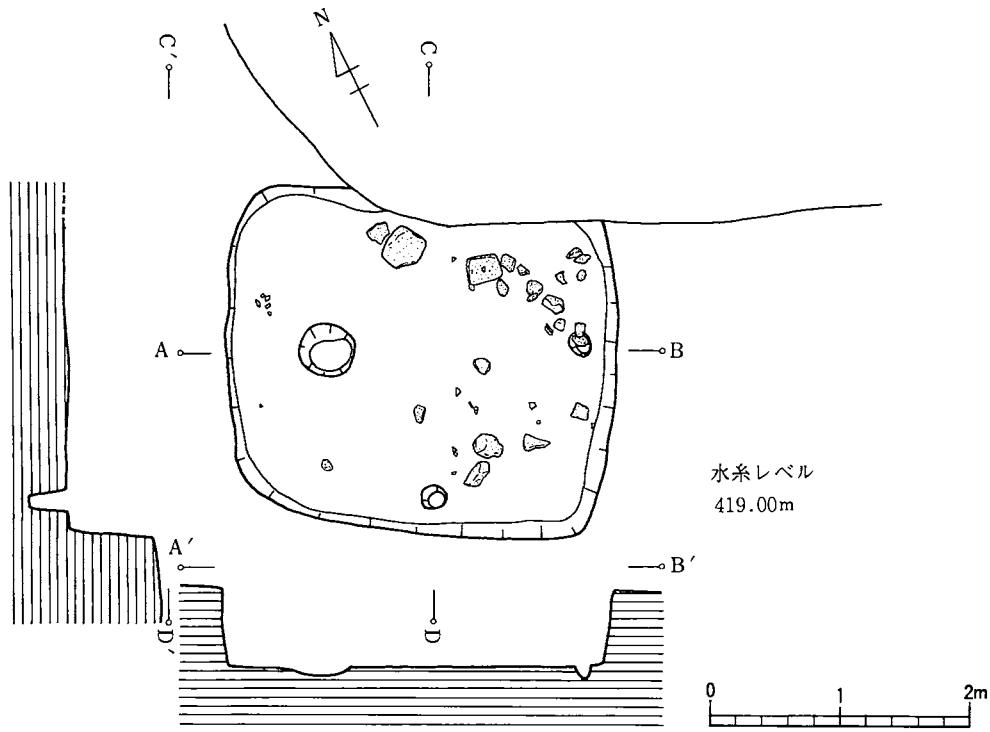
⑴は甕の口縁部片である。口唇は平たくなる。器面は櫛目調整が施されている。内面はへら削りの調整痕が見られる。色調は明褐色で石英などの砂粒を含み焼成は充分である。堅緻である。煤の付着が著しい。⑵は底部片である。内外面に櫛目の調整痕が認められる。⑶は高坏で脚部端を欠失している。やや坏部は小振りである。脚部の内面はヘラ削りである。色調は明褐色で胎土は白班を含み精良である。焼成は充分で，堅緻である。（1・3）は土師器と判断され⑵がこの住居跡の時期を示しているものであろう。



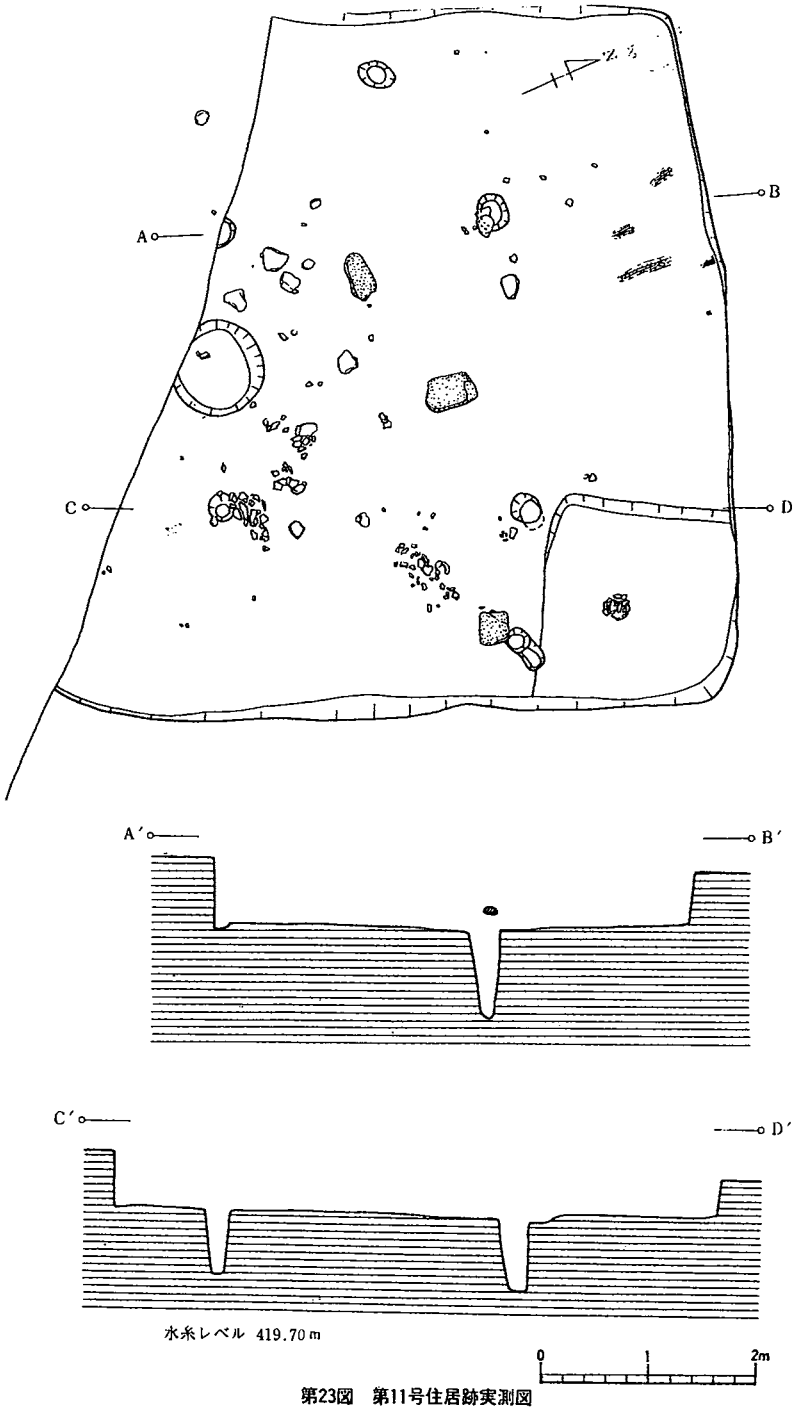
第20図　第８･11･12号住居跡出土遺物実測図（１～６）



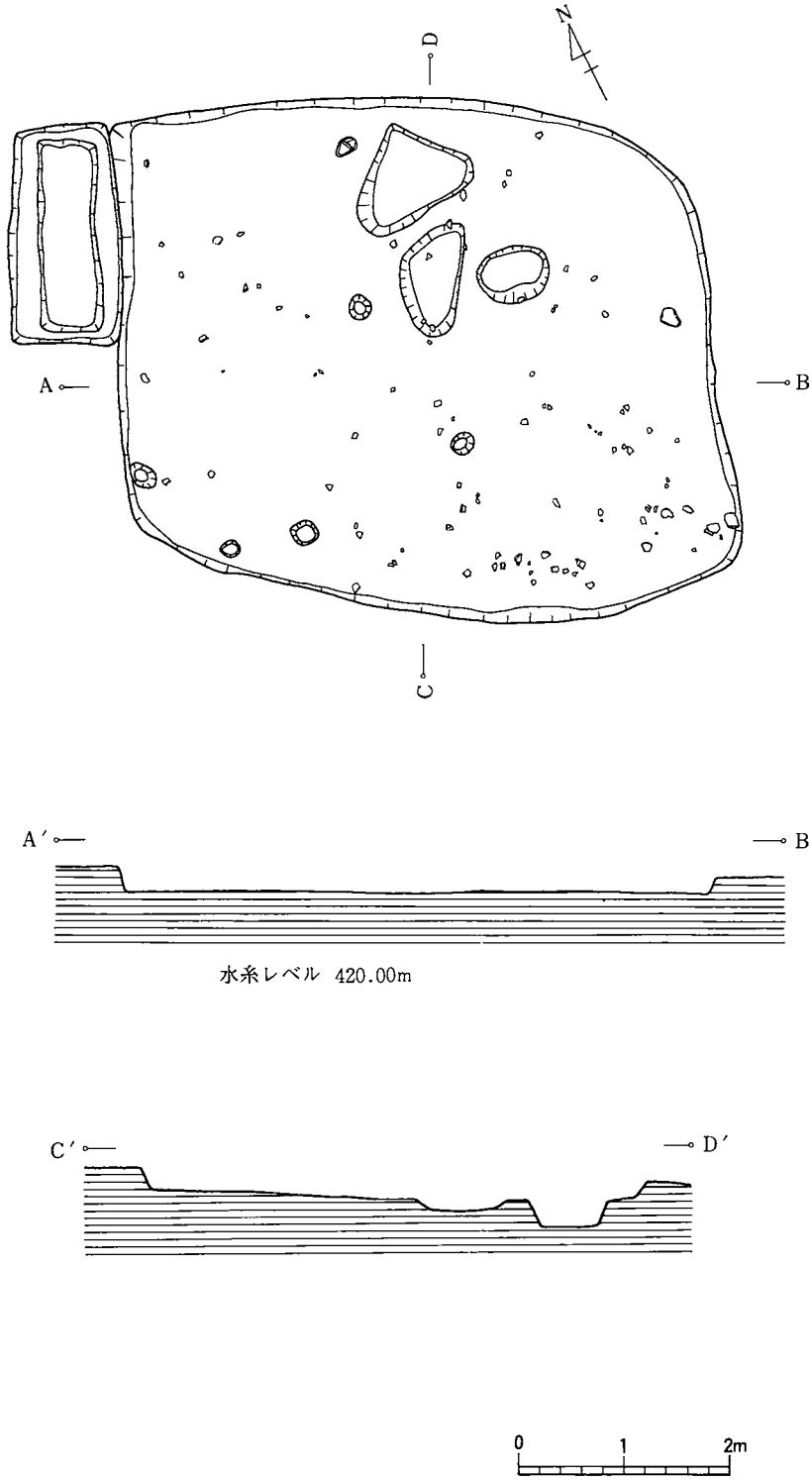
第21図　第９号住居跡実測図



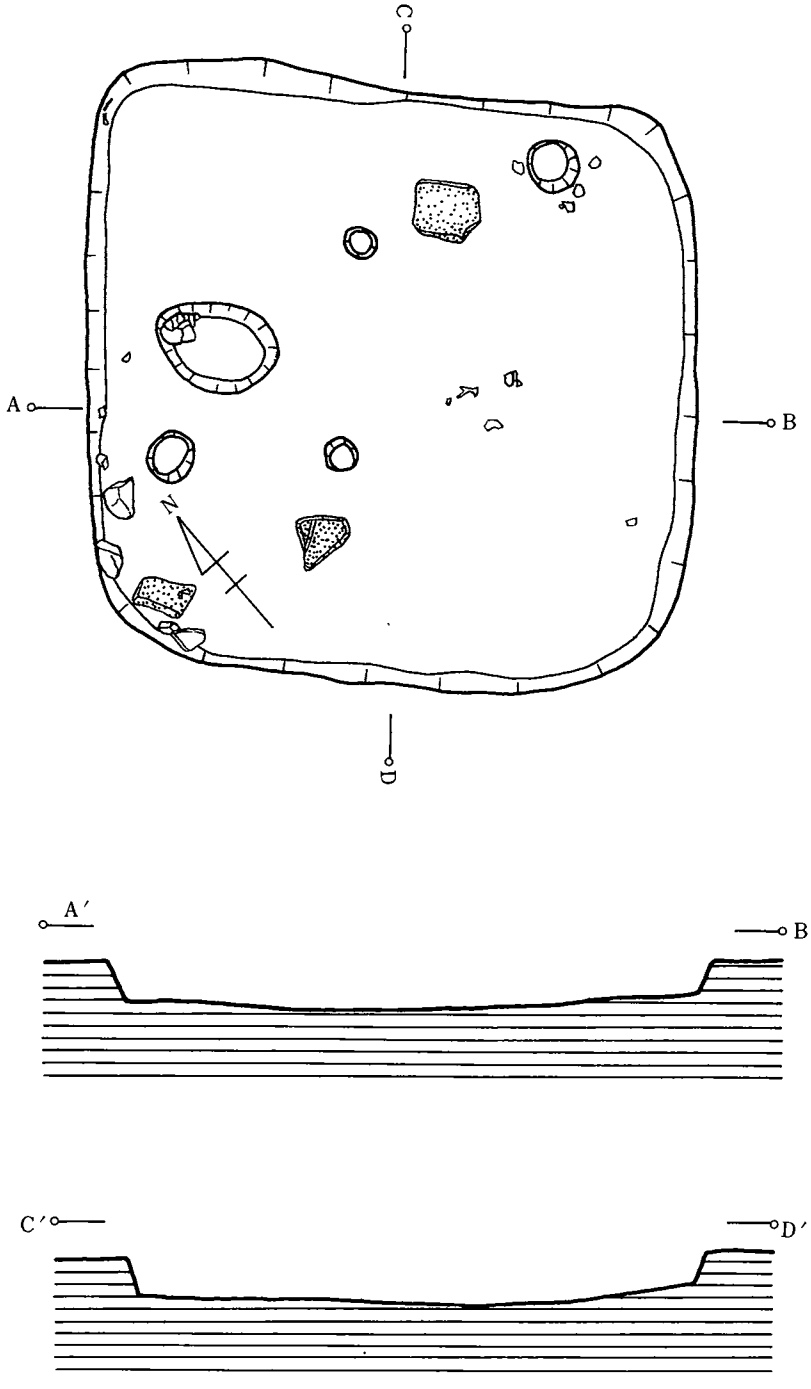
第22図　第10号住居跡実測図



第23図　第11号住居跡実測図



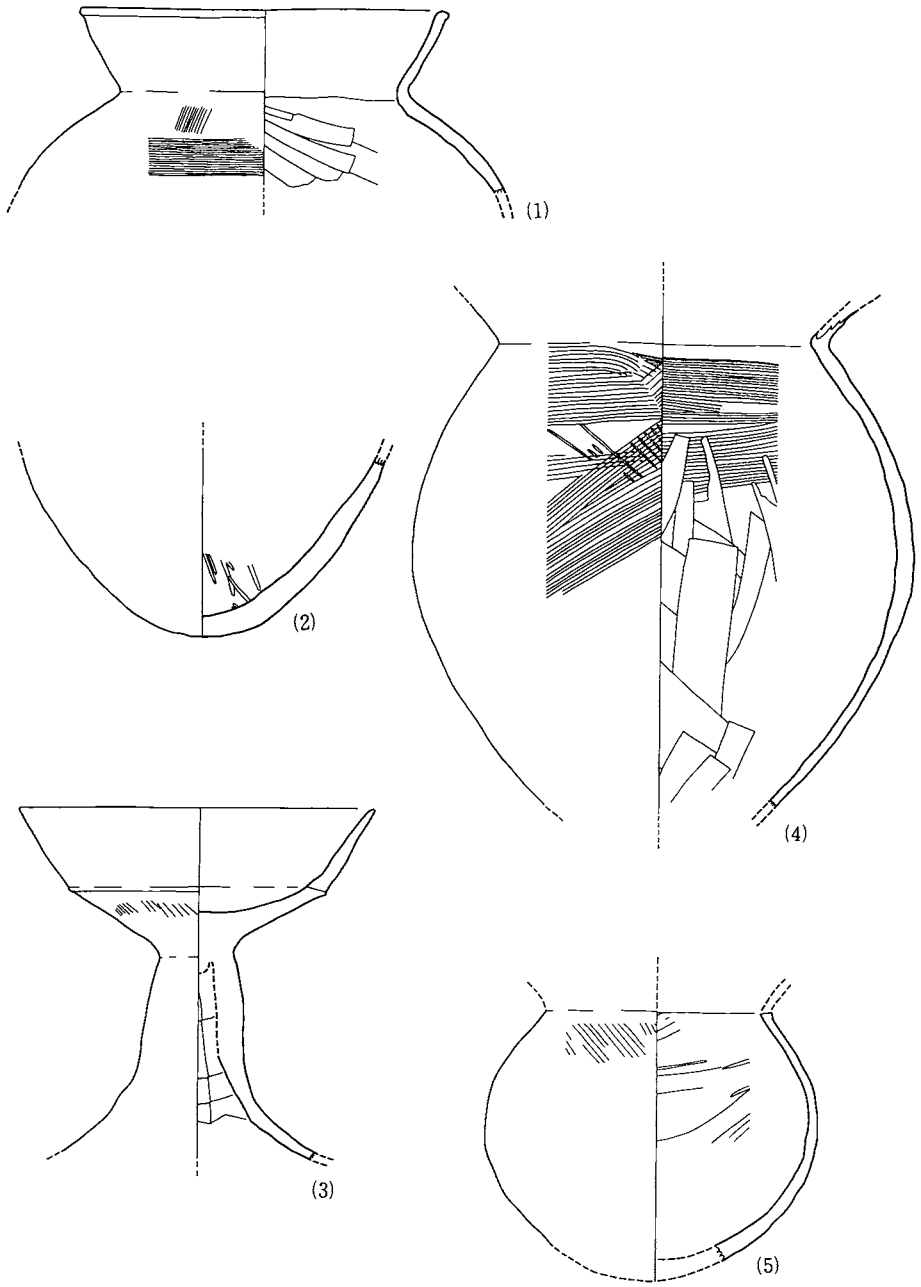
第24図　第12号住居跡実測図



水糸レベル 420.00m

0　1　2m

第25図　第13号住居跡実測図



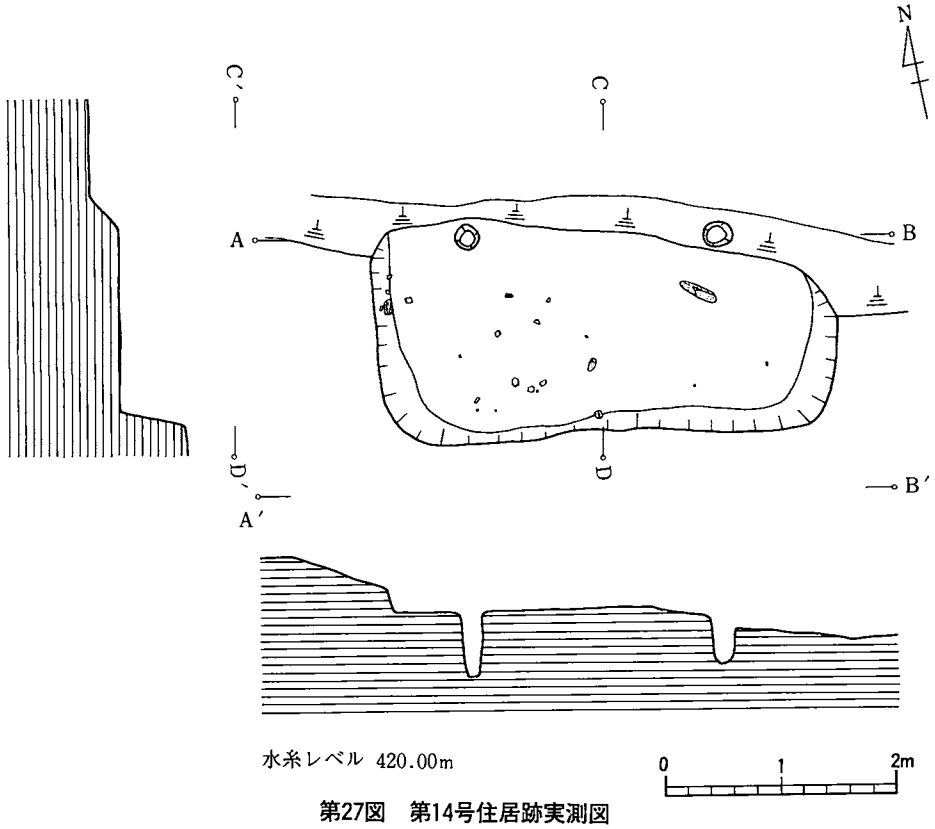
第26図　第13･18号住居跡出土遺物実測図（1～5）　0　5　10cm

第14号住居跡（第27図）

第Ｉ-16グリッドで検出されたが北側を大きく削平されている。第８・９・19号住居跡に近接して出土している。現存している部分で2.01m×0.82mを測り本来的にやや小型の住居跡である。最大壁高は0.21mを測り遺存状態はあまり良くない。隅丸方形の形状である。柱穴は２個確認でき，４本柱の住居跡のであろうか。床には硬化面が残り焼土や炭化物も見られた。中央部には炉跡がある。遺物は少ないが未製品の勾玉が埋土から出土している。

出土遺物

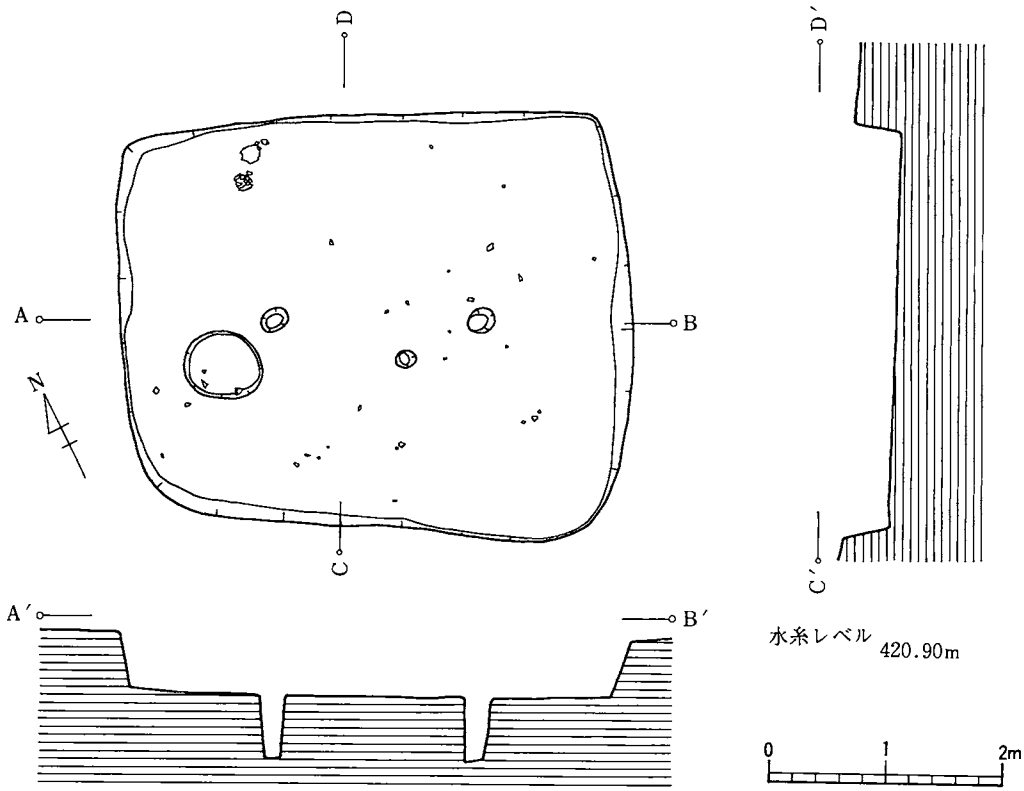
土器片は実測を行うまでにいたっていない。甕形土器片などが確認できる。



第27図　第14号住居跡実測図

第18号住居跡（第28図）

第Ｊ.Ｋ-21グリッドで検出され，住居跡の中で最も南側に位置し，円墳の東側から検出された住居跡である。第12・13号住居跡に近して出土している。現存している部分で4.46m×3.48mを測り本来的にやや小型の住居跡である。最大壁高は0.28mを測り遺存状態はよくない。隅丸方形の形状である。柱穴は３個確認でき，２本柱で建つ住居跡の可能性が強い。床には硬化面が残り焼土や炭化物も見られた。中央部には炉跡がある。遺物は少ないが勾玉が３点出土し注



第28図　第18号住居跡実測図

目される。

出土遺物（第26図）（４・５）

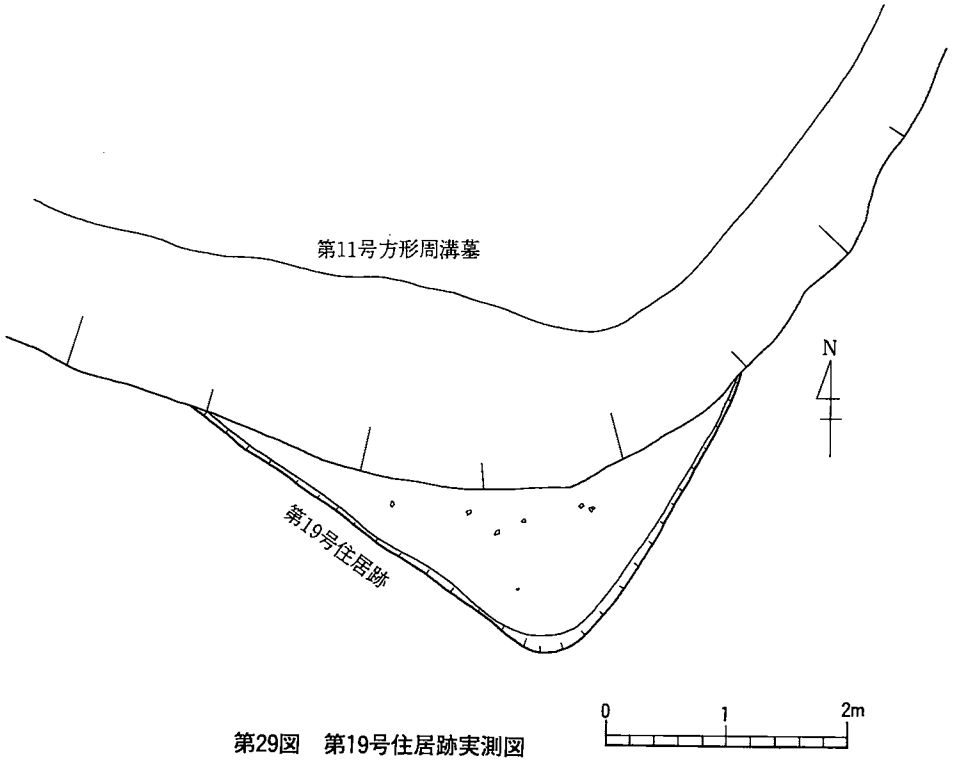
(4)は甕形土器である。口縁部を欠失している。器面はクシ目調整が施されている。内面は下半部は底部からヘラで削り上げ，上部は綿密なクシ目調整である。色調は明褐色で石英などの砂粒を含み焼成は充分である。煤の付着が著しい。(5)は小型の壺形土器である。口縁部を欠失している。色調は黒褐色で石英などの砂粒を含み焼成は充分である。器面は研磨を施している。

第19号住居跡（第29図）

第Ｊ-17グリッドで検出されたが，第11号方形周溝墓で殆ど壊されている。第９・10・14号住居跡に近接して出土している。本来的にはやや小型で隅丸方形の形状の住居跡であろうが、遺存状態は不良である。床の硬化面がわずかに残されている。焼土や炭化物も少量検出された。

出土遺物

土器片は実測を行うまでにいたっていない。甕形土器片などが確認でき，重孤文土器の細片が１点出土している。

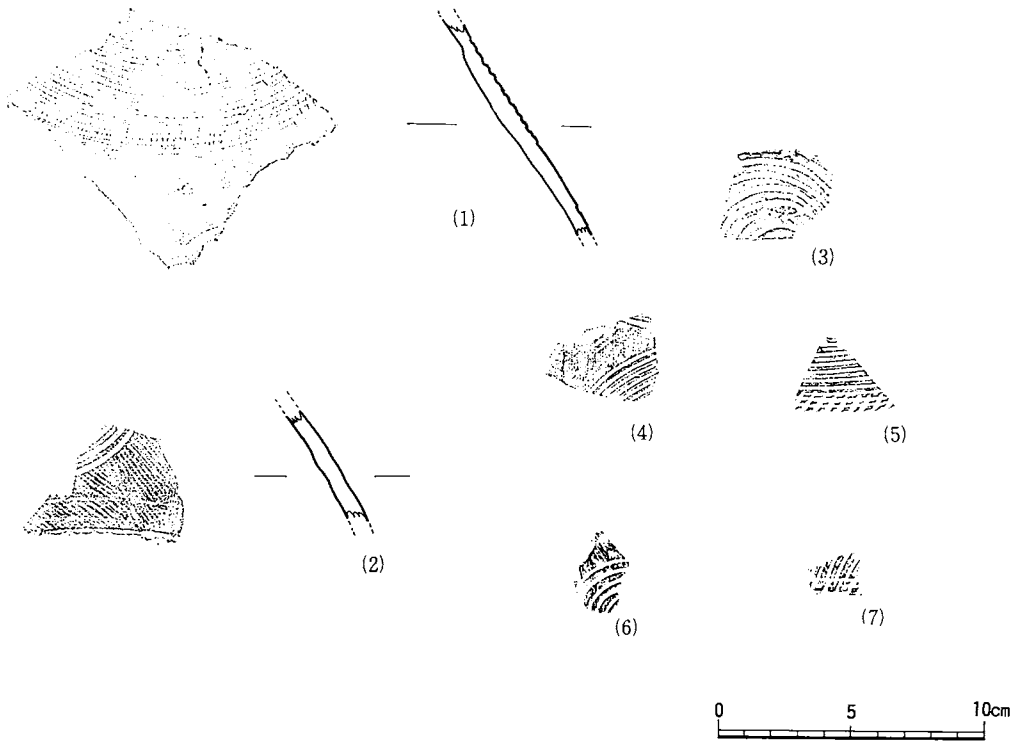


第29図　第19号住居跡実測図

(3)　長頸壺・　勾玉・玉類（第30・31図）

長頸壺（第30図）

第６号住居跡から完形の長頸壺１点が壺形土器・甕形土器とセットで出土したことを述べてきたが，このほか表土や周溝の埋土などから７点の長頸壺が出土している。いずれも細片であるが円文などを確認できる。(1)では肩部で横走文に一部縦走が重なり，下部に円弧が微かに見られる。(5)を除き円弧文様が確認される。

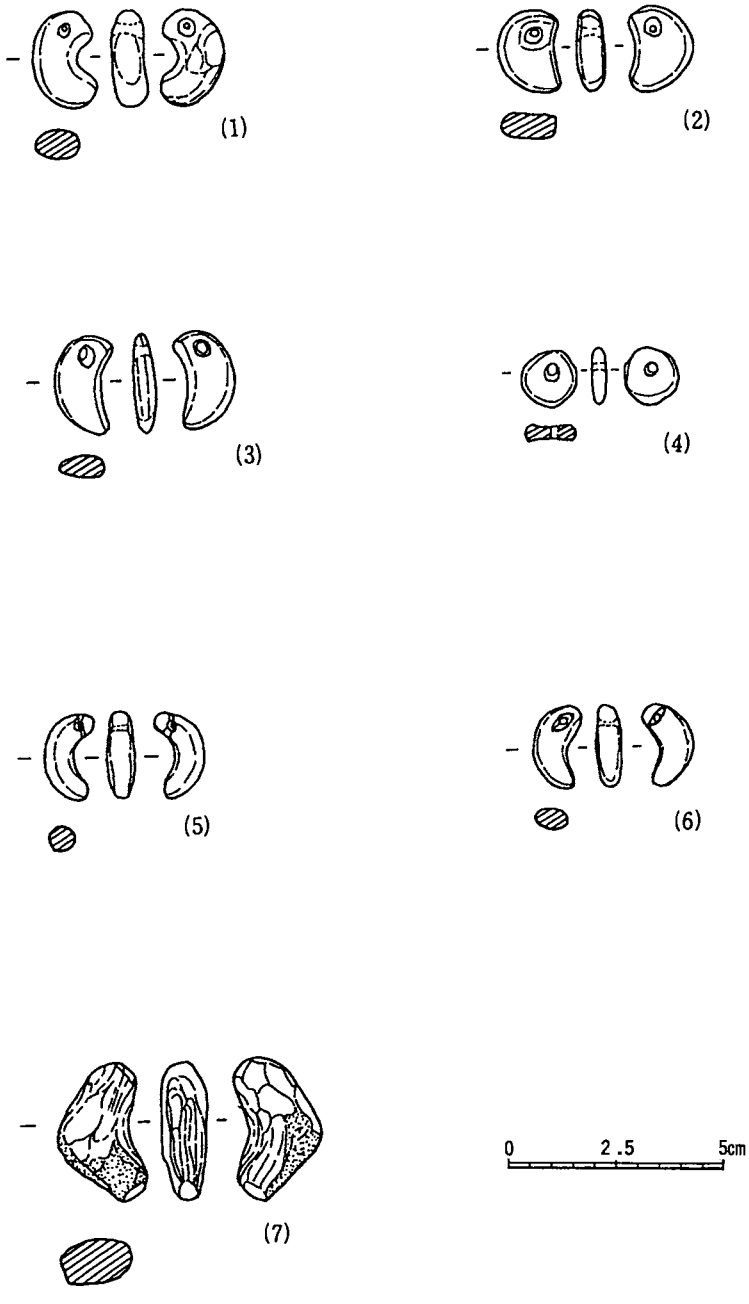


第30図　重弧文長頸壺実測図（１～７）

勾玉・玉類（第31図）

弥生時代から古墳時代のものと思われる勾玉６点と玉類１点が出土している。勾玉６点としたうち１点は未製品である。(1)～(4)は第18号住居跡，(5)・(6)はこの住居跡に近接した状態にある円墳の周溝埋土から出土している。(7)だけが北側に少し離れた第14号住居跡から出土している。

石材は滑石と判断される。勾玉はいずれも小形である。(1)曲線的な形状で断面は長楕円となり滑らかな仕上げである。両側からの穿孔である。(2・3) は断面が偏平で板状になっている。両側からの穿孔であるが大きめである。(5・6) はほぼ同様の形状で非常に小形で細い。(6)の断



第31図　勾玉、玉類実測図（１～７）

面は長楕円に近い。(5)は孔を巡る溝が掘られている。孔は両側からの穿孔である。(7)は全体的な形が整えられた状態である。鋭利なもので削り取りながら形が作られていっている。穿孔作業までにはいたっていない。(4)は中が幾分窪んだ玉であるが不十分な仕上げで歪な形状に終わっている。両側からの穿孔である。

第１表　勾玉・玉類出土状況一覧表

図版番号	出　土　遺　構	長さ×幅×厚さ	石　質	色　調	備　　考
第31図(1)	第18号住居跡　埋土中	2.2 ×1.05×0.75cm	滑　石	白　色	自然面あり。両側から穿孔。
第31図(2)	第18号住居跡　埋土中	2.1 ×1.1 ×0.55cm	滑　石	淡緑色	両側から穿孔。
第31図(3)	第18号住居跡　埋土中	1.68×1.15×0.56cm	滑　石	淡緑色	両側から穿孔。
第31図(4)	第18号住居跡　埋土中	1.12×0.45×0.23cm	滑　石	褐　色	両側から穿孔。
第31図(5)	第３号円形周溝墓　埋土中	1.78×0.62×0.48cm	滑　石	灰褐色	両側から穿孔。
第31図(6)	第１号古墳　周溝埋土中	1.71×0.68×0.52cm	滑　石	濃茶色	粗い穿孔。両側から穿孔。
第31図(7)	第14号住居跡　埋土中	3.1 ×1.6 ×1.0 cm	滑　石	緑白色	未製品。削り痕あり。

第２表　住居跡一覧表

挿図番号	出土位置	住居跡番号	規模 長軸×短軸×最大深さ m m m	主軸方位	形　状	住穴	時　期	備　　考
第７図	D-1	第１号住居跡	3.14× － ×0.18	N-69° -W	隅丸方形	－	弥生後期	北側消失
第８図	E．F-5	第２号住居跡	5.46×5.06×0.12	N-22° -E	隅丸方形	－	〃	台石
第９図	E-4	第３号住居跡	6.55×5.51×0.08	N-23° -E	隅丸方形	－	〃	台石
第10図	E-3	第４号住居跡	6.05× － ×0.15	N-63° -W	隅丸方形	－	〃	北側消失
第12図	C.D-6	第５号住居跡	5.78×5.72×0.64	N-74° -W	隅丸方形	５本	〃	炉跡　台石
第15図	B-4.5	第６号住居跡	4.79×4.36×0.56	N-82° -W	隅丸方形	５本	〃	焼失家屋　台石
第18図	C.D-11	第７号住居跡	4.24×4.08× －	N-65° -W	隅丸方形	－	〃	台石　川原石
第19図	J-15	第８号住居跡	6.27×5.89×0.64	N-57° -W	隅丸方形	４本	〃	台石　皿状凹地
第21図	I-17	第９号住居跡	4.18×3.54×0.73	N-65° -W	隅丸方形	５本	〃	台石
第22図	K-17	第10号住居跡	3.04×2.54×0.58	N-63° -W	隅丸方形	４本	〃	皿状凹地
第23図	K-18	第11号住居跡	6.49×5.96×0.58	N-12° -E	隅丸方形	５本	〃	
第24図	I.J-20	第12号住居跡	5.70×4.31×0.24	N-62° -W	隅丸方形	－	〃	
第25図	J-20	第13号住居跡	3.36×3.20×0.20	N-69° -W	隅丸方形	３本	〃	台石　皿状凹地
第27図	I-16	第14号住居跡	2.01× － ×0.21	N-41° -E	隅丸方形	２本	〃	
第５図	H-13	第15号住居跡	－ × － × －		隅丸方形	－	縄文晩期	北側消失
第５図	H.I-13	第16号住居跡	3.42× － × －		隅丸方形	－	〃	北側消失
第６図	I-13	第17号住居跡	3.53× － × －		隅丸方形	－	〃	北側消失
第28図	J.K-21	第18号住居跡	4.46×3.48×0.48	N-63° -W	隅丸方形	３本	弥生後期	皿状凹地
第29図	J-17	第19号住居跡	－ × － × －		隅丸方形	－	〃	
第３図	L-19	第20号住居跡	－ × － × －	N-14° -E	長楕円形	－	縄文晩期	
第３図	L-19	第21号住居跡	－ × － × －	N-64° -W	長楕円形	－	〃	

第４節　古墳時代の調査

(1)　古墳群の配置状況

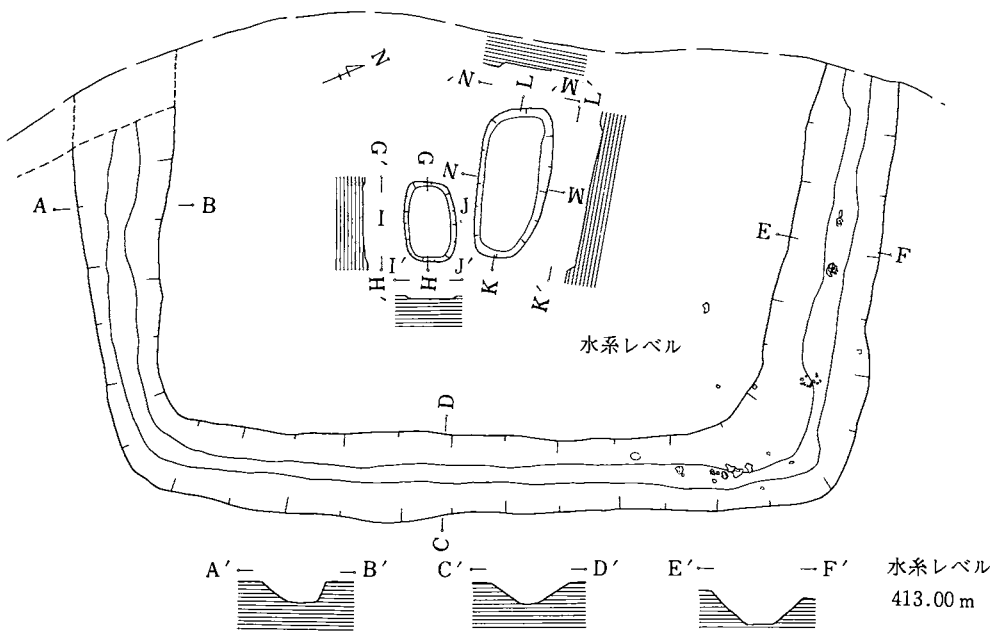
古墳時代に関する遺構としては方形周溝墓12基，円形周溝墓９基，円墳１基が検出された。方形周溝墓は比較的小型の９基が北側に集中し，最も大型の第10号方形周溝墓がほぼ単独の状態で中央部に配置されている。方形周溝墓は南側にも延びており第11・12号方形周溝墓は円墳に近接した位置に作られている。円形周溝墓は最も大きい第３号円形周溝墓を中心にしてこれを取り囲むかのように８基の円形周溝墓が配置されている。最大径の円墳は地形的に最も高い位置にあたる南側に配置されている。陸橋部は西側に持つ統一性が見られる。

(2)　方形周溝墓の調査

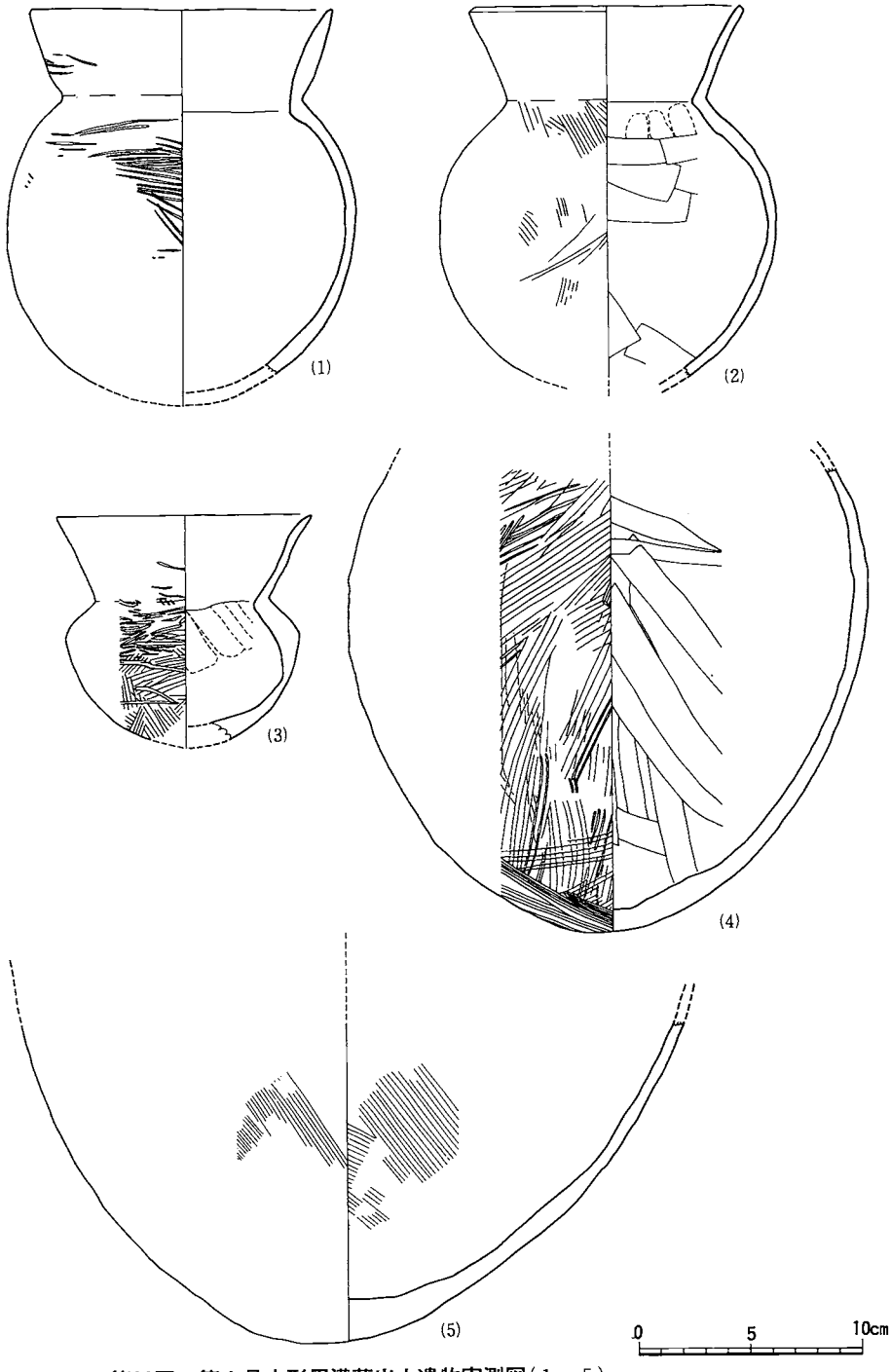
出土した12基の方形周溝墓の調査結果を番号に従い報告していくことにしたい。

第１号方形周溝墓（第32図）

Ｉ．Ｊ-5.6グリッドで検出された。第２・３号方形周溝墓に接する。西側約半分が削平を受けている。現況で13.50m×8.60mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は西側に設けられていたものと思われる。２基の主体部が確認できる。1.32m×0.68m，0.72m×



第32図　第１号方形周溝墓実測図　0　1　2m



第33図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図（１～５）

0.91mとそれぞれに測るが，わずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。第１～９号方形周溝墓をとおして安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。

主体部内には朱の痕跡が残っている。

周溝内の遺物は北側周溝から多く出土している。

出土遺物（第33図）（１～５）

（1・2）は小形の壺形土器である。外反する口縁部で胴部は球状になる。(1)の器面は粗いクシ目調整で丹塗りを行っている。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成も良好である。(2)の器面は丁寧なクシ目調整が見られる。内面はヘラ削りである。煤の付着が著しい。色調は明褐色で胎土には長石などの砂粒が多い。焼成は良好である。(3)は小形丸底壺で口縁部が大きく広がっている。器面は丁寧なクシ目調整が見られる。内面は手ナデ痕が著しい。色調は赤褐色で胎土には長石・白班など砂粒が多い。焼成も良好で堅緻である。(4・5）は甕であるが上半部を大きく欠失している。(4)は器面がハケ目で内面がヘラ削りであり古式土師器の特色を有している。(5)の内面には底部近くにクシ目調整痕がみられ古い伝統的技法を残しているものであろう。

第２号方形周溝墓（第34図）

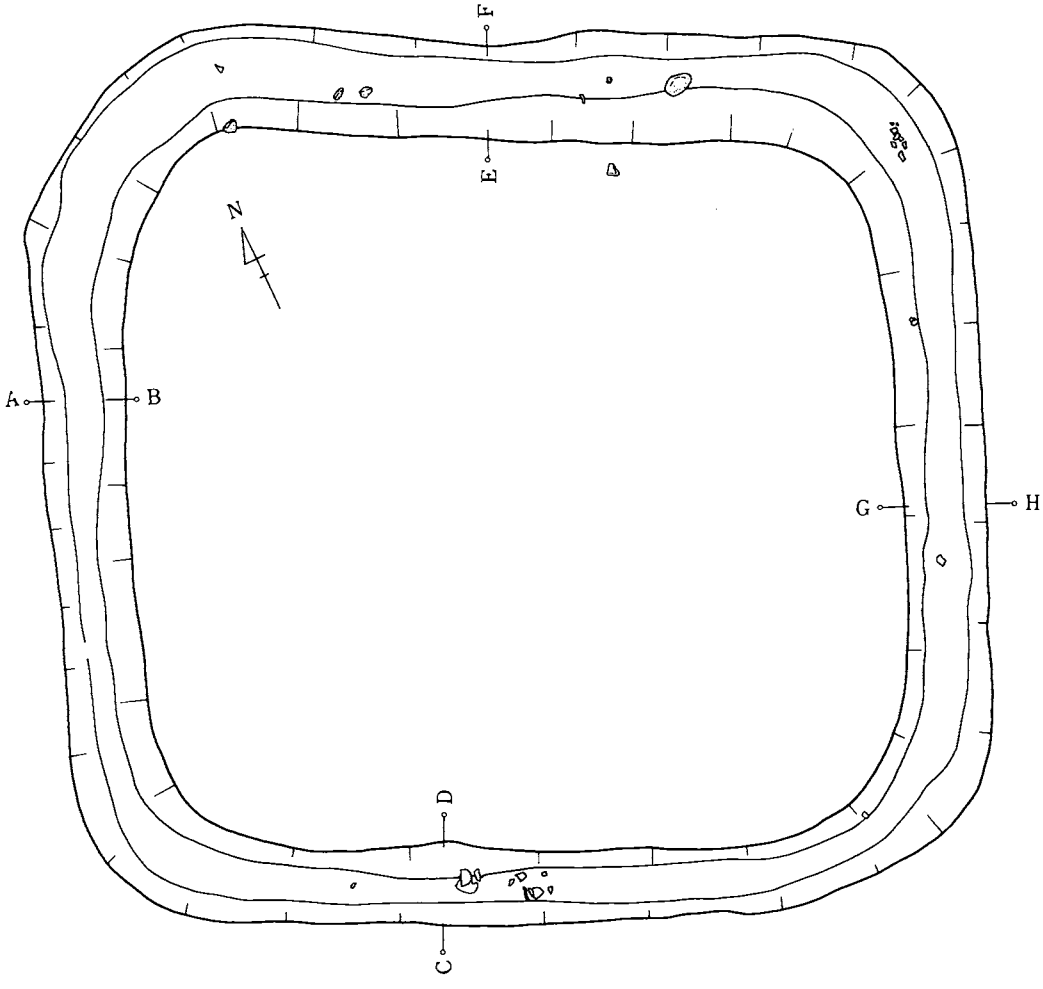
Ｈ．Ｉ-5.6グリッドで検出された。第１・３・５号方形周溝墓に接する。上部が大きく削平を受けている。現況で7.88m×8.50mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部を明確にせず設けられていなかった可能性が強い。主体部は確認できない。遺物は北側及び西側周溝からわずかに出土している。

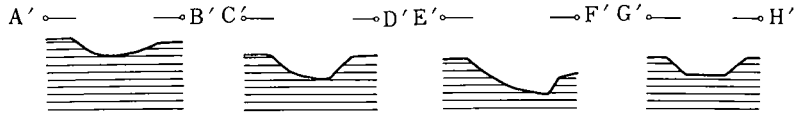
出土遺物（第35図）

(1)は壺形土器である。口縁部は外反するが途中に屈曲をもち複合口縁の形状を示している。器面が剥落して荒れているがクシ目調整が確認でき，内面もクシ目調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成が不十分なのであろう器面が剥落しひどく荒れている。(2)は小形丸底壺で口縁部はやや内湾している。内外面は手ナデ調整を主としており，幾分いびつな形状を示している。色調は赤褐色で胎土には長石・白班など砂粒が多い。焼成は良好でである。(3)は甕であるが上半部を大きく欠失している。器面がハケ目で内面がヘラ削りである。色調は赤褐色で胎土には長石・白班など砂粒が多い。焼成は良好でである。

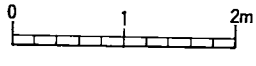
第３号方形周溝墓（第36図）

Ｈ．Ｉ-4.5グリッドで検出された。第１・２・４・５号方形周溝墓に接する。西側が多く削平を受けている。現況で12.45m×9.50mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。

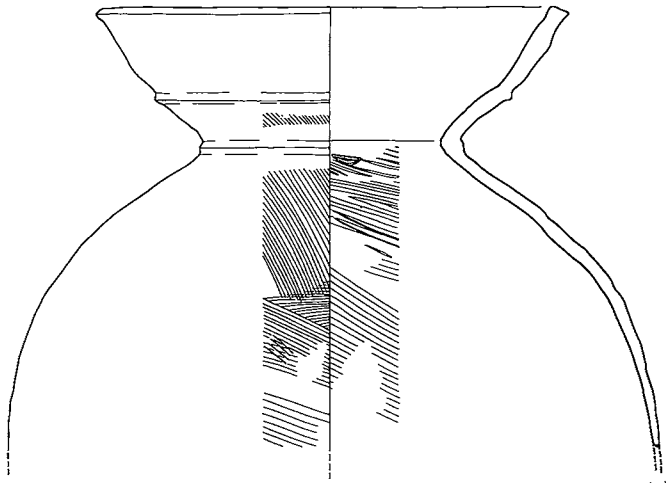


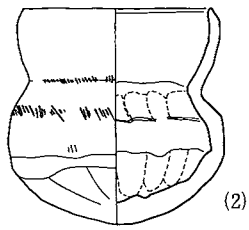


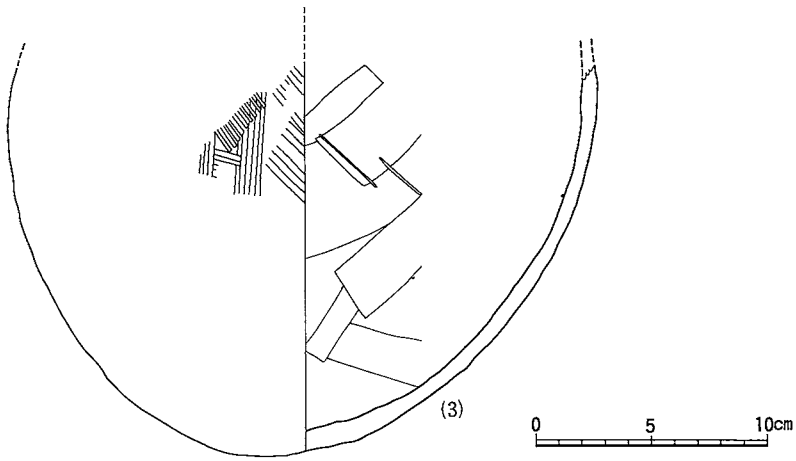
水糸レベル 413.00m



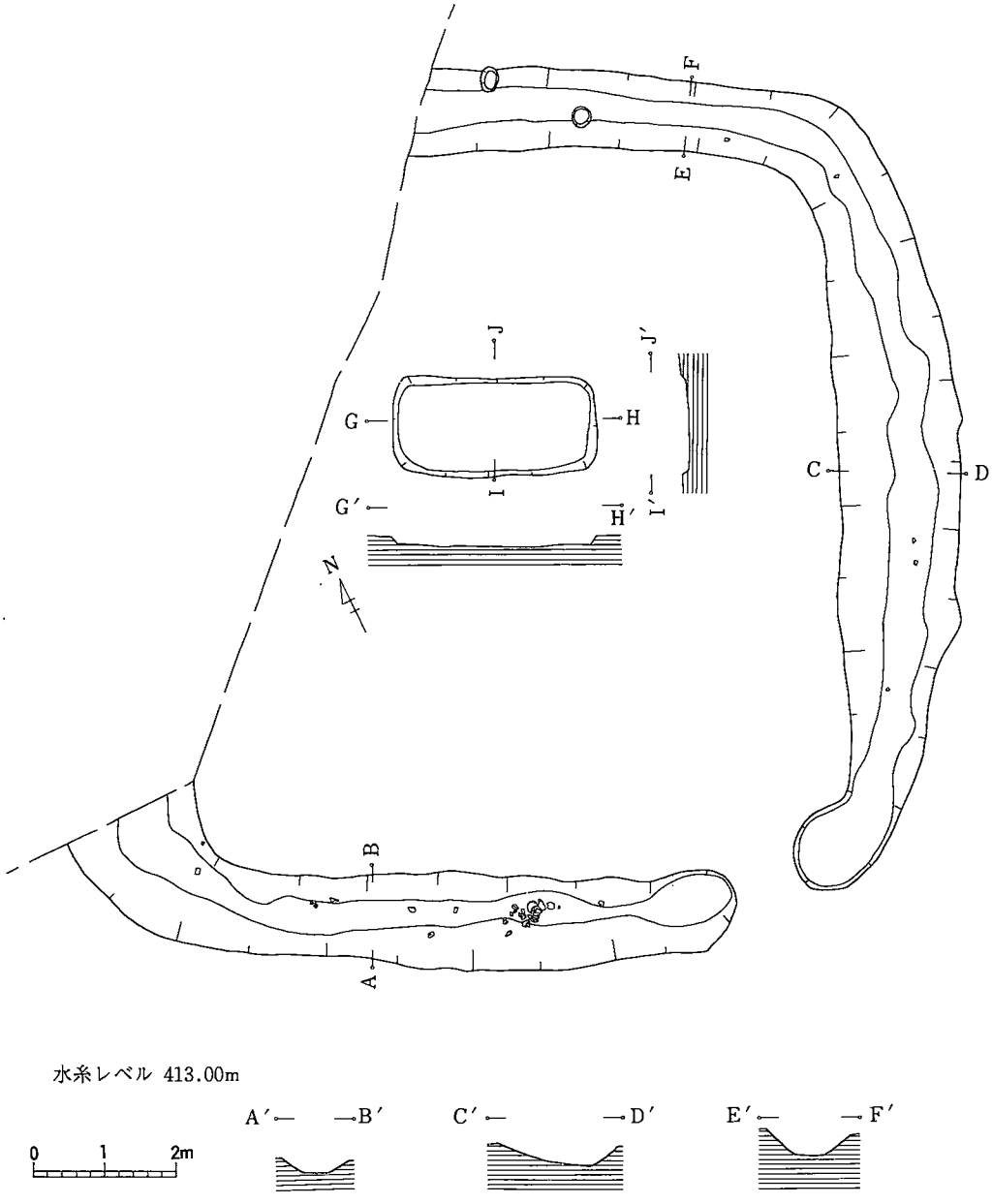
第34図　第２号方形周溝墓実測図



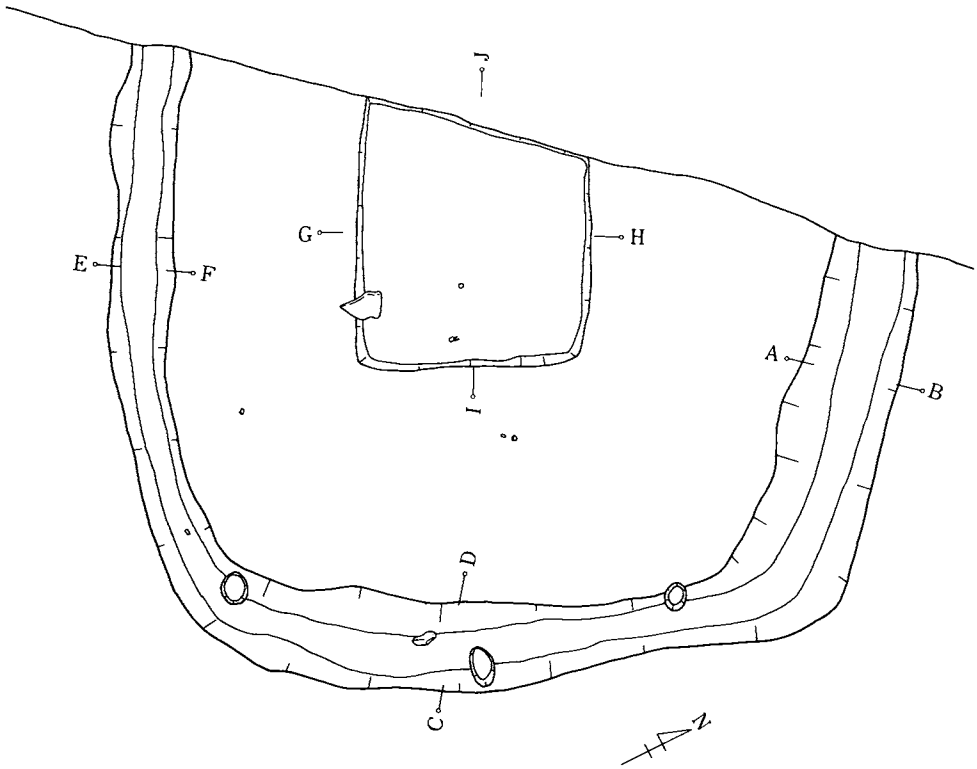


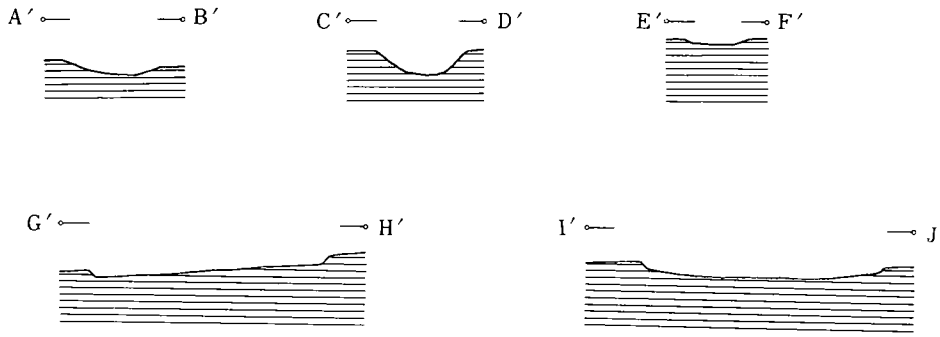


第35図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図（１～３）



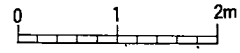
第36図　第３号方形周溝墓実測図





水糸レベル 413.00m

第37図　第４号方形周溝墓実測図



陸橋部は西側に設けられていたものと思われる。１基の主体部が確認できる。1.48m×0.43mを測る，主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。

周溝内の遺物は南側及び東側周溝から細片が出土している。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片などであることが確認される。

第４号方形周溝墓（第37図）

H-4グリッドで検出された。第３・５・６・７号方形周溝墓に接する。西側が多く削平を受けている。現況で8.80m×8.26mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は西側に設けられていたものと思われる。１基の主体部が確認できる。1.40m×1.21mを測る，主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。幅広い主体部のように見えるが２基の主体部が重なっている可能性も否定できない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝に散在した状態である。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片などであることが確認される。

第５号方形周溝墓（第38図）

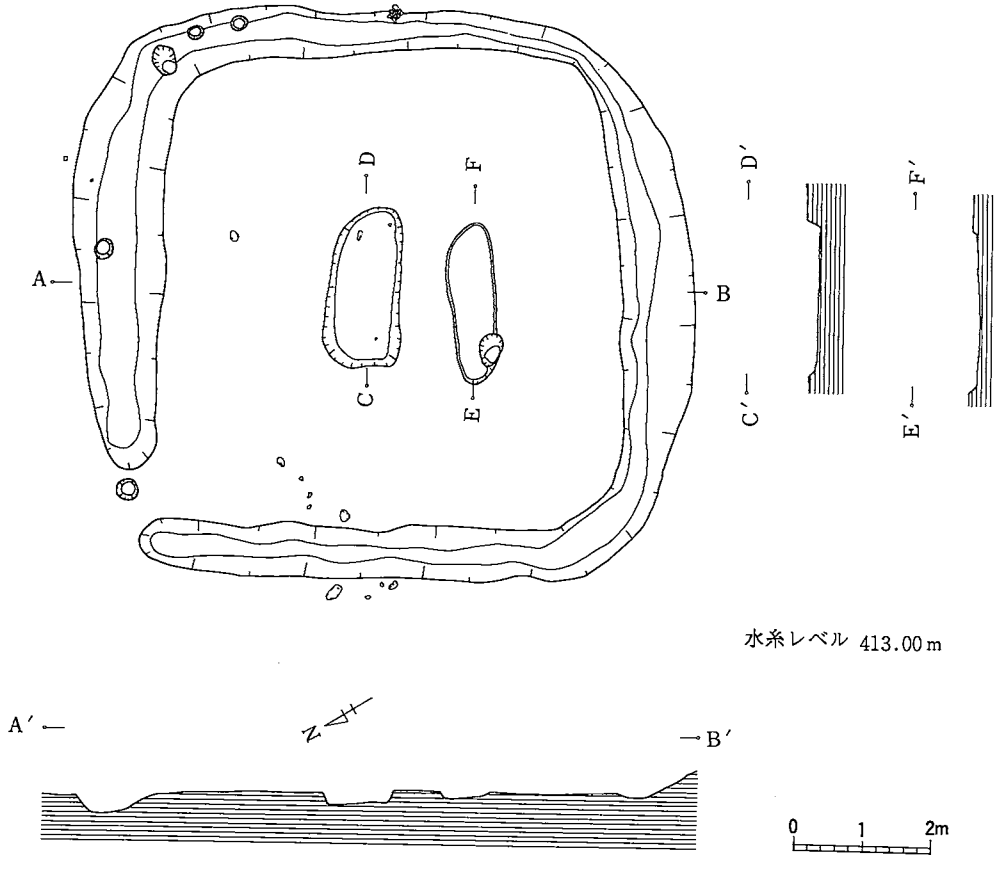
H-5グリッドで検出された。第２・３・６号方形周溝墓に接する。西側が多く削平を受けている。現況で7.75m×5.72mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は北西部隅に設けられている。２基の主体部が確認できる。1.28m×0.73m，1.19m×0.71mとそれぞれに測る。２基とも主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝に散在した状態である。

出土遺物

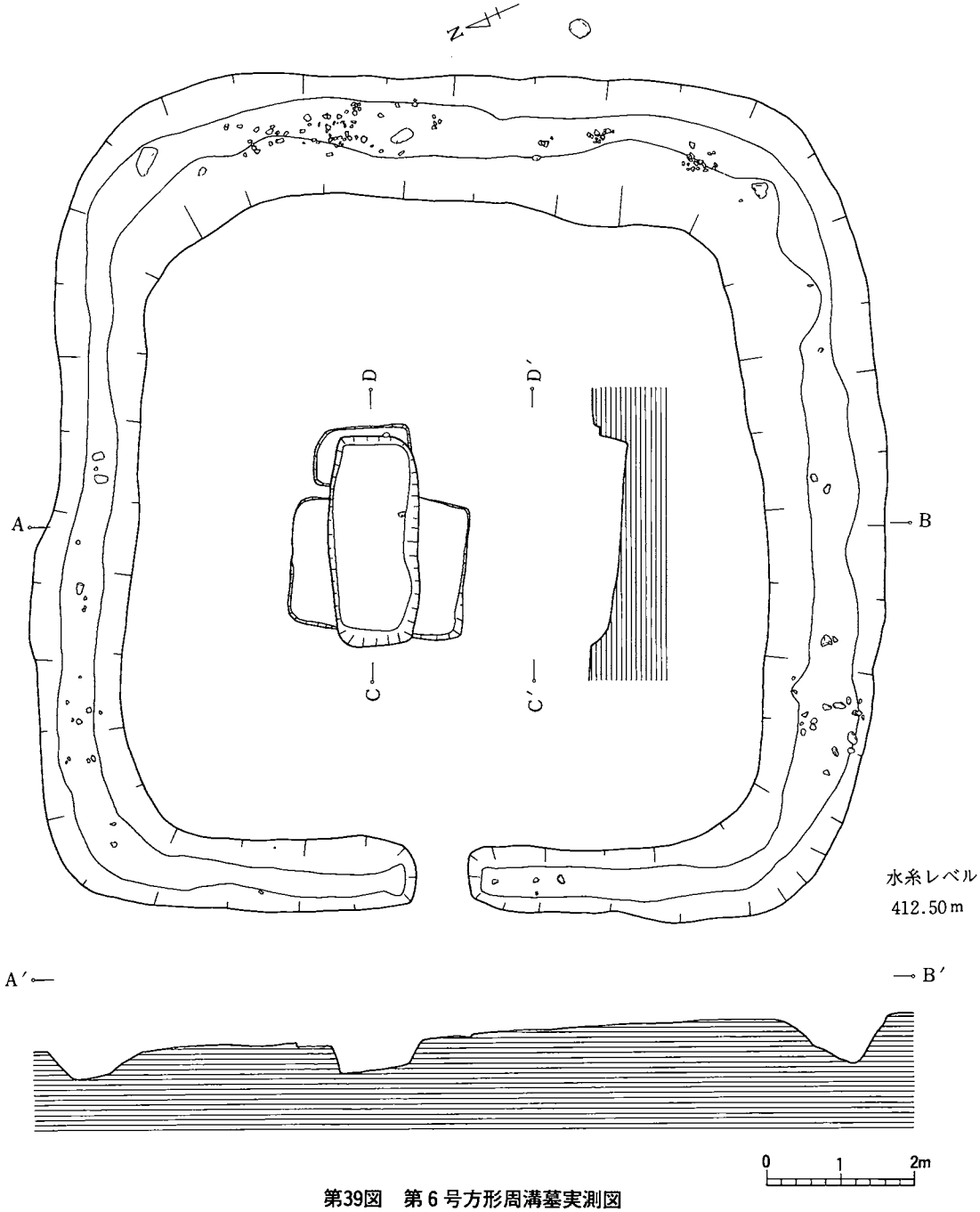
土器片は細片であり，土師器の甕片などであることが確認される。

第６号方形周溝墓（第39図）

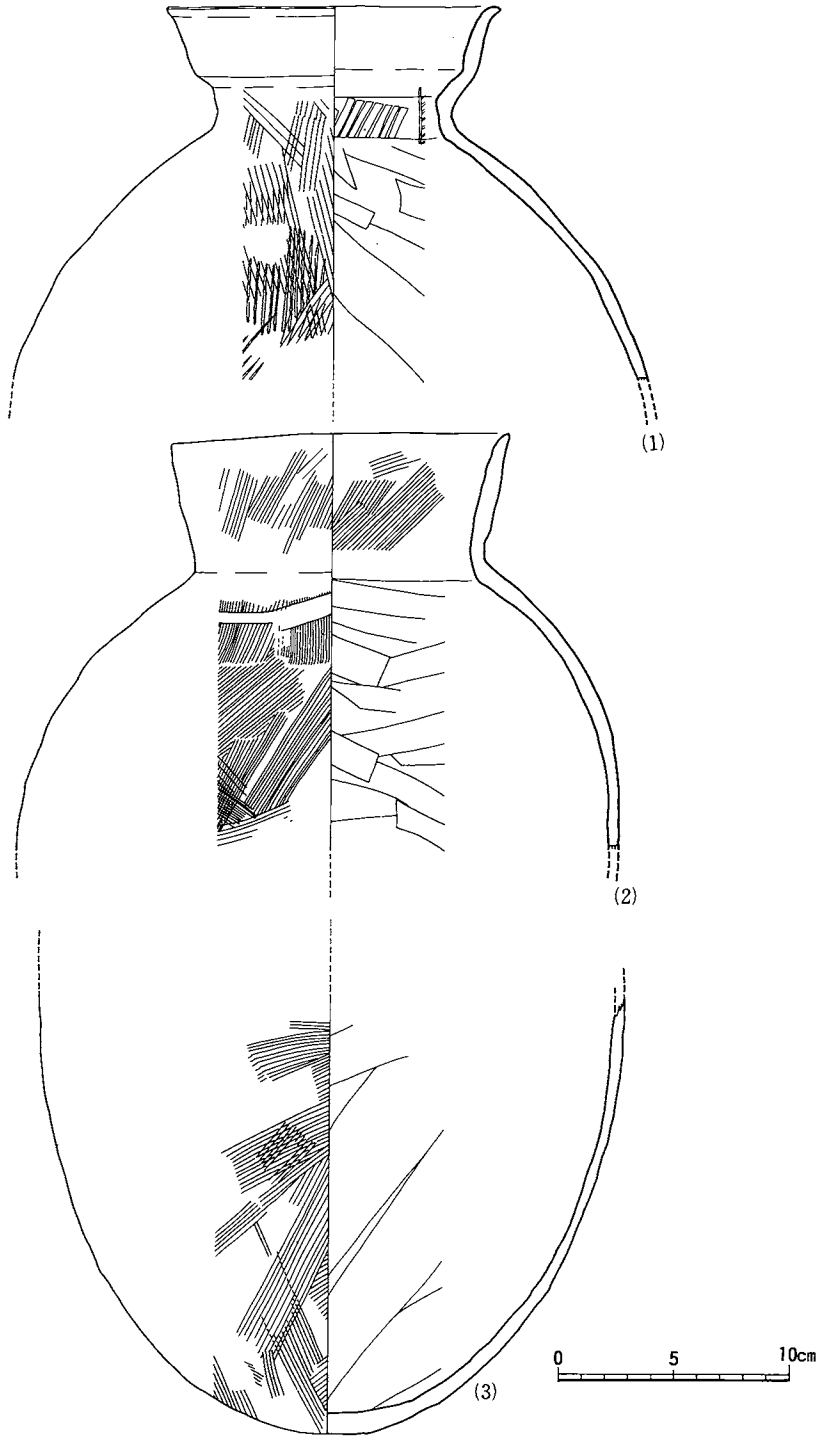
G-4グリッドで検出された。第３・４・５・７号方形周溝墓に接する。９基の方形周溝墓の中では最も残りが良い。現況で11.66m×11.11mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形を



第38図　第５号方形周溝墓実測図



第39図　第６号方形周溝墓実測図



第40図　第6号方形周溝墓出土遺物実測図(1～3)

とっている。陸橋部は西側に設けられている。３基の主体部が重複している。１号の主体部は1.43m×0.40mを測る，主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしないが。黄褐色の粘土が認められるので木棺の可能性が強い。主体部内には朱の痕跡が残っている。

周溝内の遺物は南側及び東側周溝から出土している。主体部内から鉄鏃を出土している。

出土遺物（第40図）（１～３）

(1)は壺形土器である。口縁部は外反するが途中に屈曲をもち複合口縁の形状を示している。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は淡黄褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。(2)は壺形土器である。口縁部は少し外反するが直線的である。器面及び口縁部内側はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。(3)は甕であるが上半部を大きく欠失している。器面がハケ目で内面がヘラ削りである。色調は明褐色で胎土には長石・白班など砂粒が多い。焼成は良好である。

第７号方形周溝墓（第41図）

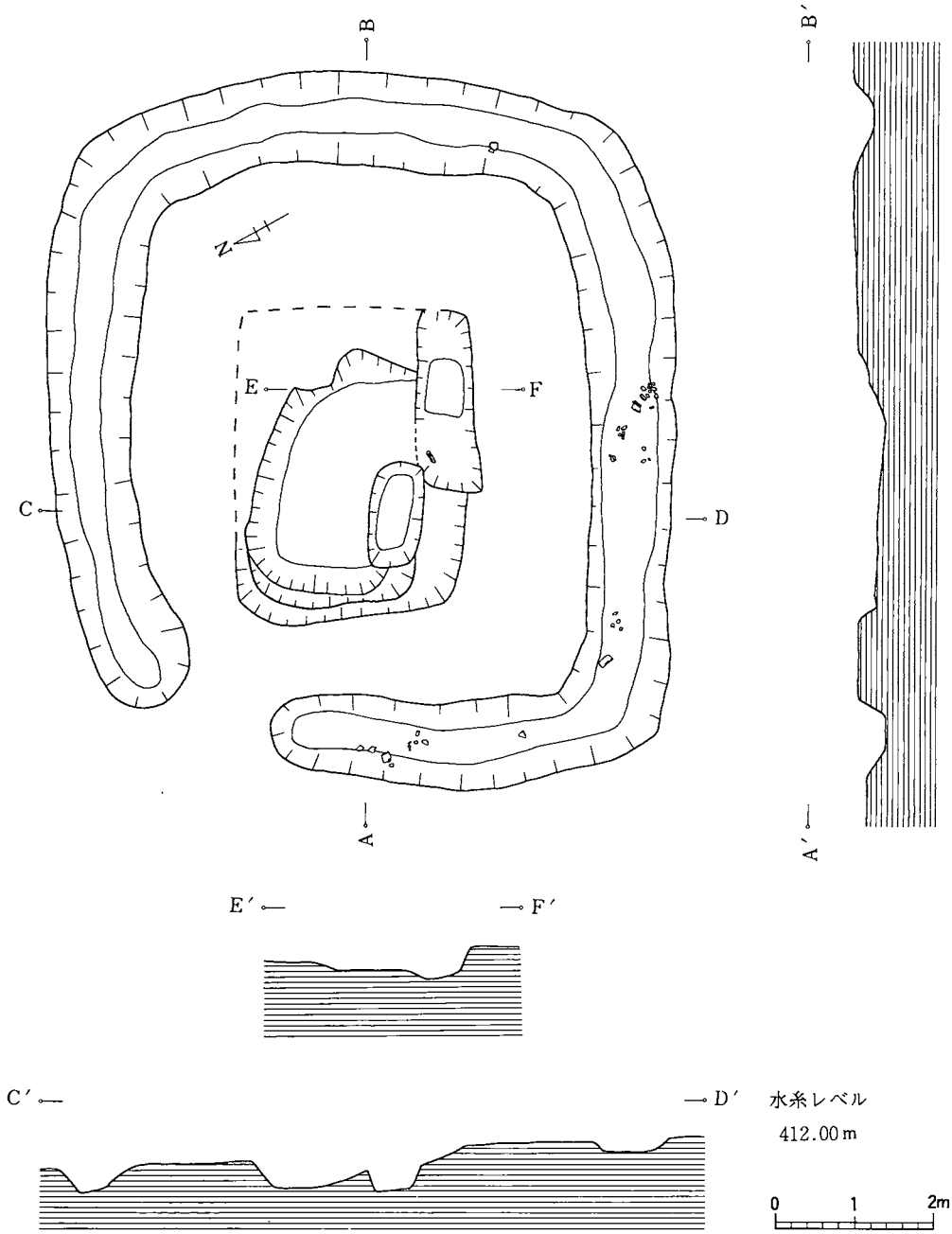
Ｆ.Ｇ-3.4グリッドで検出された。第４・６・８号方形周溝墓に接している。上部の多くを削平されている。現況で7.86m×9.00mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は北西部隅に設けられている。主体部は重複した状態で３基が確認できる。1.94m×1.45m，1.20m×0.43m，0.72m×0.38mとそれぞれに測る。２基とも主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝を中心に細片が出土している。

出土遺物（第42図）(1)

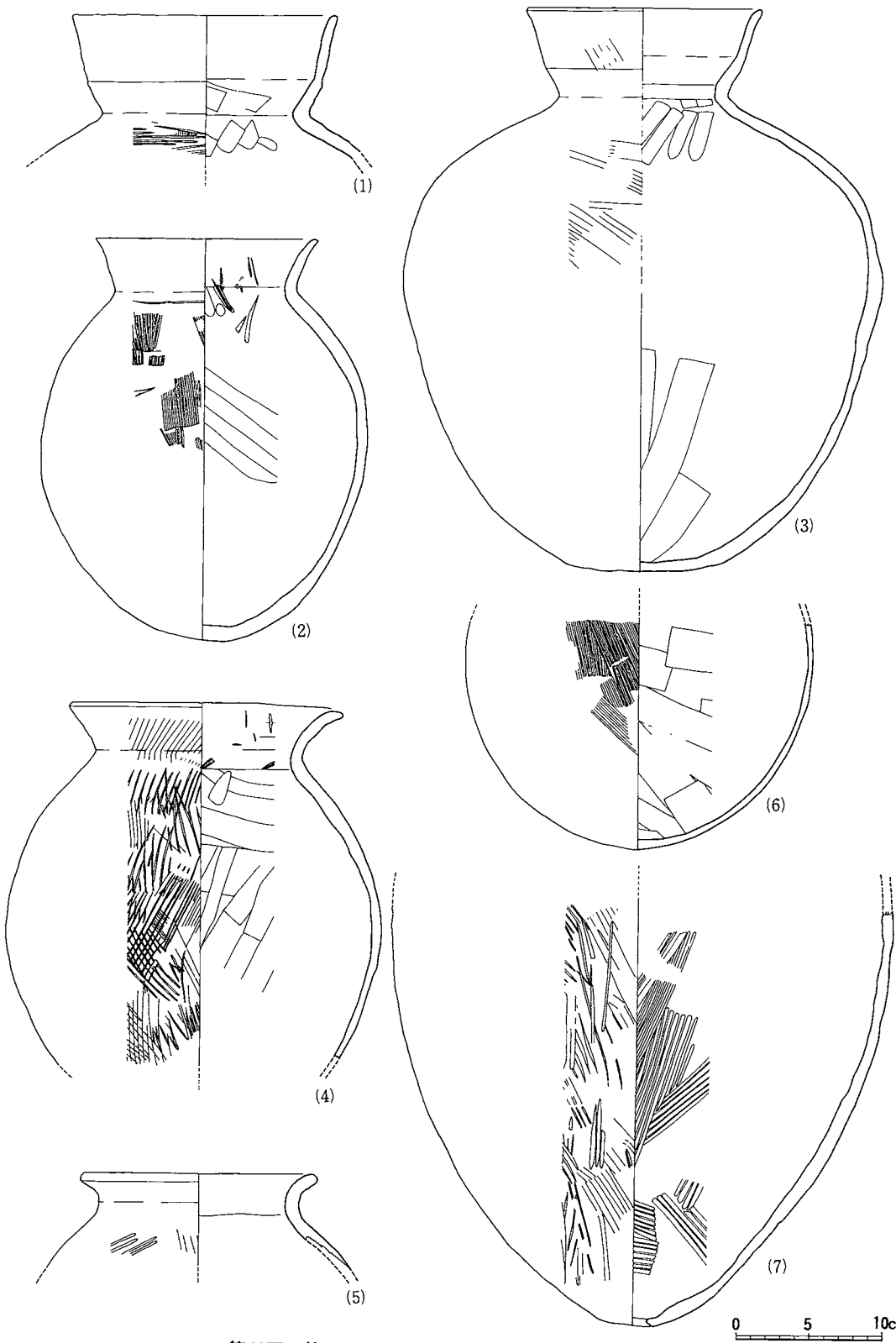
(1)は壺形土器である。口縁部は外反するが幾分内湾している。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。

第８号方形周溝墓（第43図）

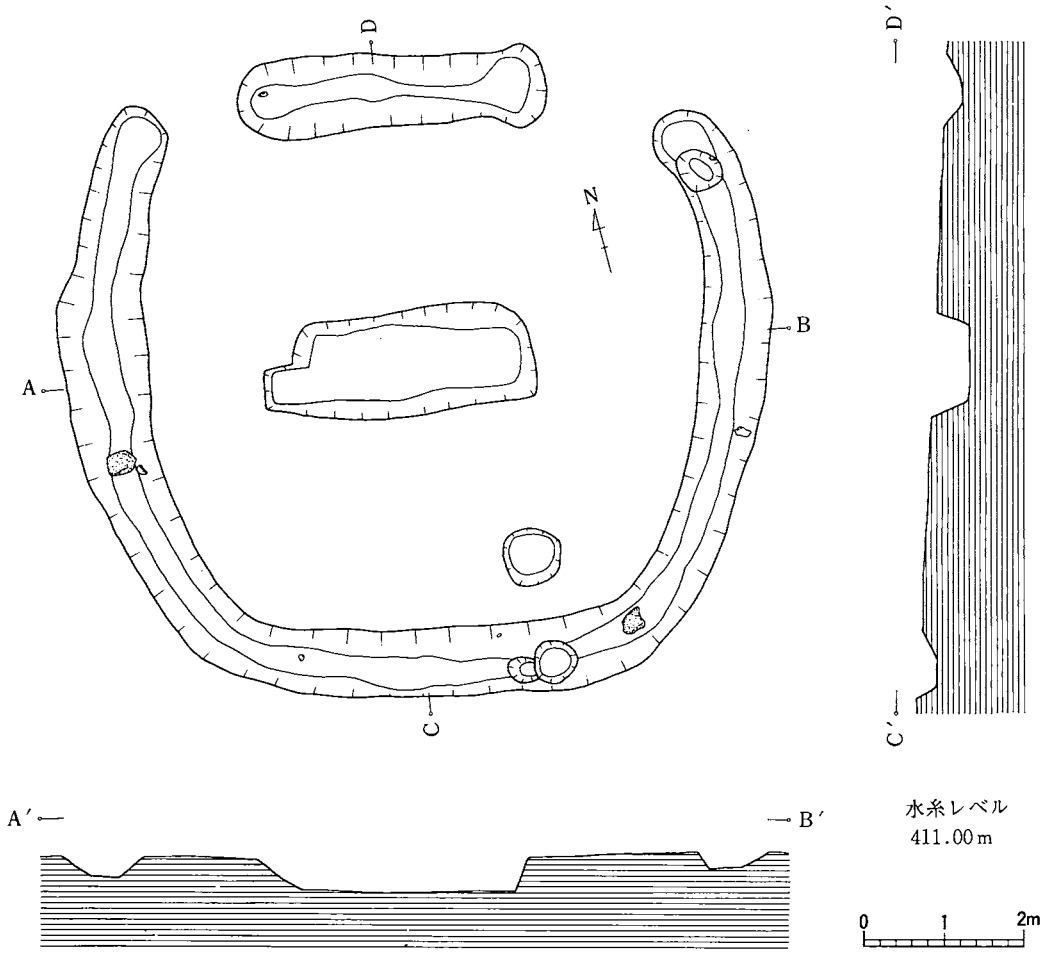
Ｅ.Ｆ-1.2グリッドで検出された。第１～７・９号方形周溝墓から北側にやや離れて所在している。上部の多くを削平されている。現況で6.80m×0.75mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は２ヵ所で北及び東隅に設けられている。主体部は１基が確認でき，1.78m×0.68mを測る。主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので，少なくとも箱式石棺の可能性



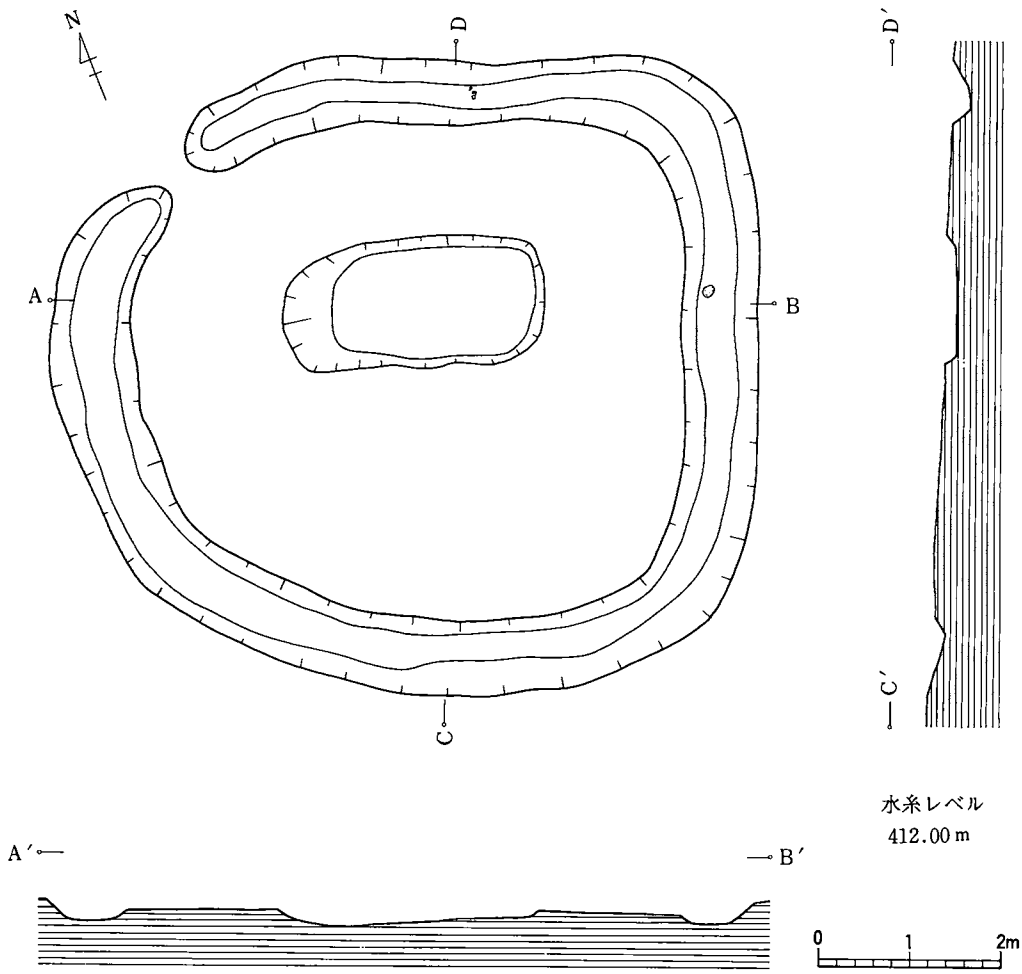
第41図　第７号方形周溝墓実測図



第42図　第７･10号方形周溝墓出土遺物実測図（１～７）



第43図　第8号方形周溝墓実測図



第44図　第９号方形周溝墓実測図

はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝を中心に細片が出土している。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片などであることが確認される。

第９号方形周溝墓（第44図）

Ｆ-4グリッドで検出された。第６・７号方形周溝墓の東側に作られている。上部の多くを削平されている。現況で7.95m×8.80mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は１ヵ所で北西隅に設けられている。主体部は１基が確認でき，1.50m×0.76mを測る。主体部底がわずかに残存していたにとどまり、柩などの状況を明らかにしない。安山岩の板石などの石材の散在した状況はないので,少なくとも箱式石棺の可能性はないものと判断される。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝を中心に細片が出土している。

出土遺物

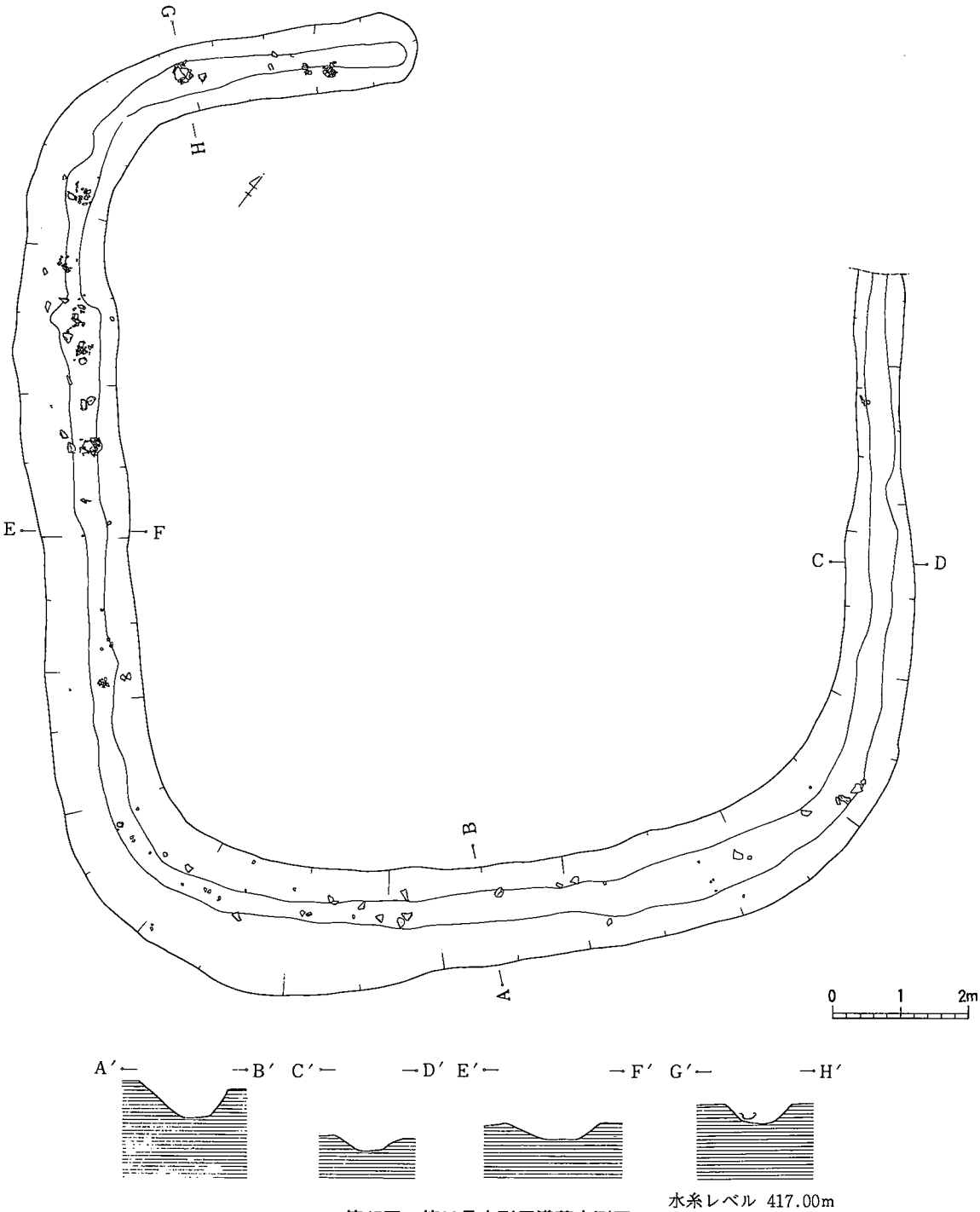
土器片は細片であり，土師器の甕片などであることが確認される。

第10号方形周溝墓（第45図）

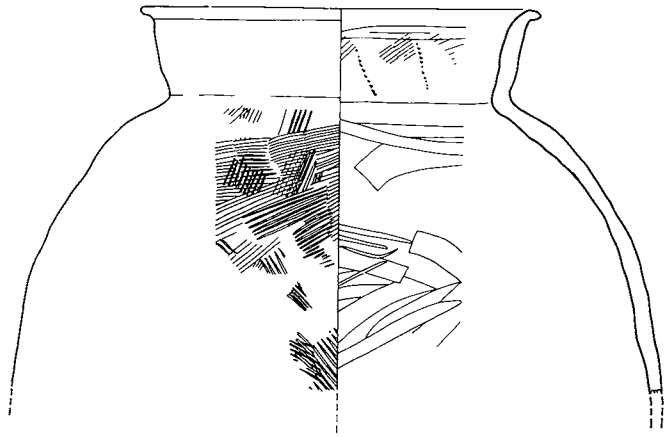
最も規模の大きい方形周溝墓で，Ｉ．Ｊ．Ｋ-10.11.12グリッドで検出された。第２・３・４・７号円形周溝墓の西側に作られている。上部の多くと北側を削平されている。現況で17.67m×16.30mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。北側を削平されているが陸橋部は西側に設けられていたものと思われる。主体部は確認できていない。周溝墓部には安山岩の板石の石材が若干散在しているが，円形周溝墓と近接しているため第10号方形周溝墓に伴うものであると断定するまでに至っていない。。主体部内には朱の痕跡が残っている。周溝内の遺物は東側周溝を中心に多く出土している。

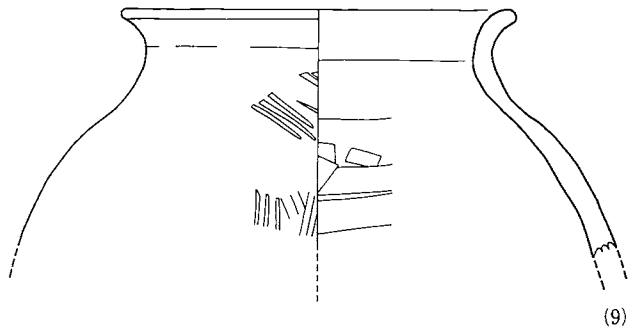
出土遺物（第45・56図）（２～10）

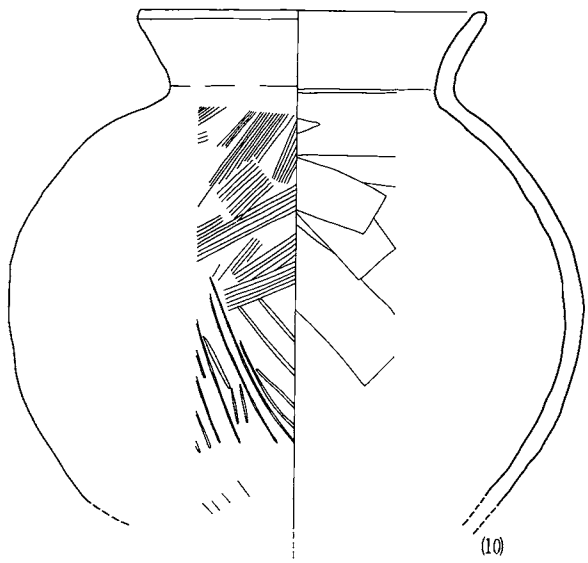
⑵は甕形土器である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。⑶は壺形土器である。頸部が窄まりやや肩が張っている。口縁部は外反するが幾分内湾している。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。(4・5) は甕形土器である。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。(6・7) は胴部から底部資料である。⑺は大型の卵形を呈している。内面は粗いクシ目調整が見られ底部穿孔を施している。(8～9) は甕形土器である。器面はクシ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。

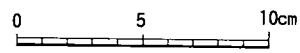


第45図　第10号方形周溝墓実測図









第46図　第10号方形周溝墓出土遺物実測図(8～10)

口縁部は個性を有している。(8)は直線的な口縁部で口唇部が外側に尖る。(9)は短い口縁部で外側へのくねりが著しい。(10)はやや小形の甕形土器で球状の胴部である。

第11号方形周溝墓（第47図）

第10号につづき規模の大きい方形周溝墓で，Ｉ．Ｊ．Ｋ-15.16.17グリッドで検出された。第12号方形周溝墓の西側に作られている。上部の多くと北側を削平されている。現況で15.68m×15.97mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。北側を削平されている。陸橋部は周溝が浅く判断しにくいが，他の事例からみて西側に設けられていたと考えるのが適当であろう。主体部は安山岩の板石を用いた箱式石棺である。1.20m×0.49mを測る。主体部内には朱の痕跡が残っている。

周溝内の遺物は東側周溝に細片が出土している。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕・高坏片などであることが確認される。

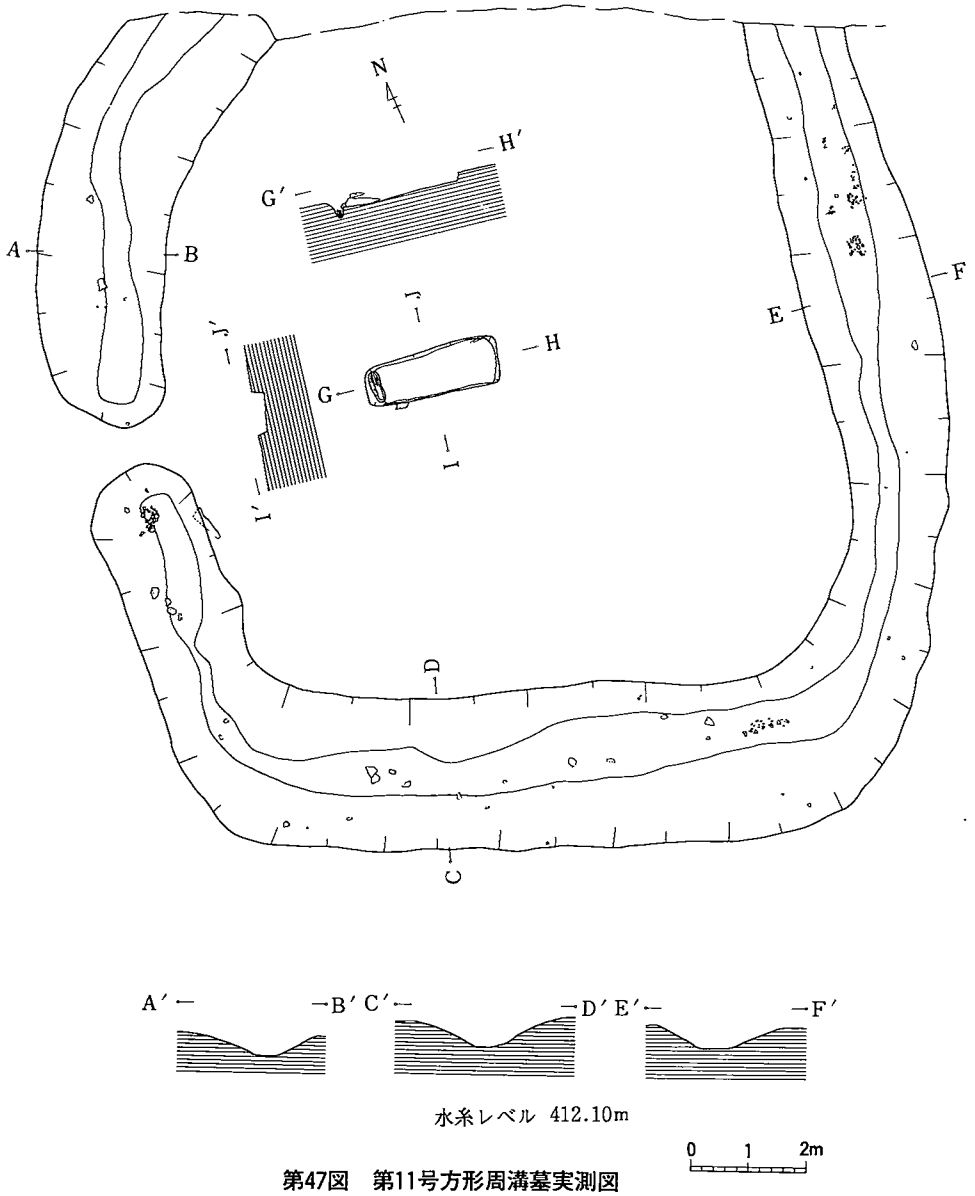
第12号方形周溝墓（第48図）

最も南側から検出された方形周溝墓で，第Ｉ．Ｊ．-18.19グリッドで検出された。第11号方形周溝墓の南側に作られている。上部の多くと北側を削平されている。現況で10.52m×12.73mを測る。方形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は西側に設けられている。主体部の確認はできていない。主体部内には朱の痕跡が残っている。

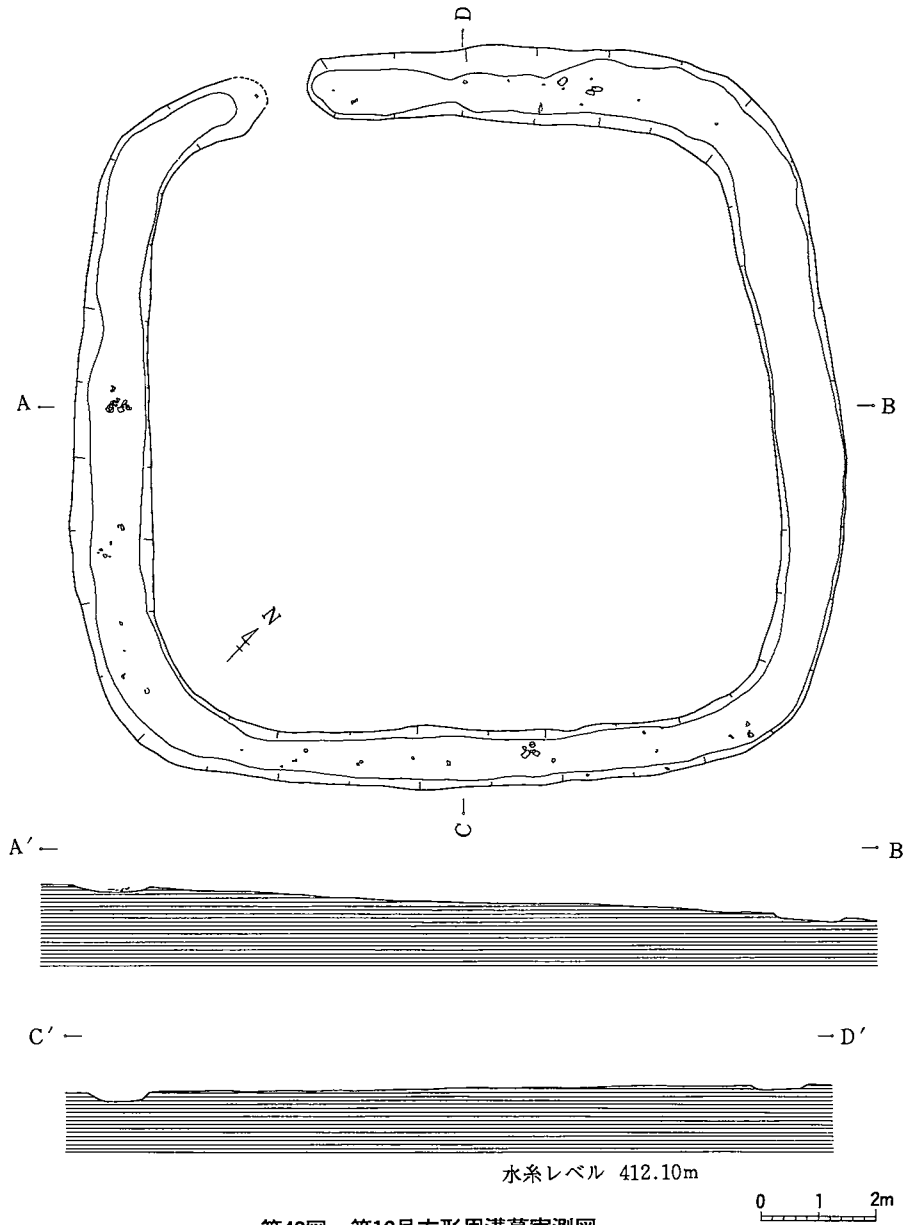
周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に多く出土している。

出土遺物（第49図）

５点の高坏の実測が可能であった。(1)は器高12.5cm，坏部径19.5cm，脚部径11.8cmを測る。口縁部は直線的に開き，やや波状を呈している。坏部の屈曲部は明確である。脚部は低い立ち上がりである。器面はハケ目調整を基礎にして手ナデにより仕上げている。脚部の内面も手ナデにより仕上げている。色調は赤褐色で化粧粘土であろう。胎土には長石など砂粒が多い。焼成はやや不良で器面が荒れている。(2)は器高13.3cm，坏部径16.2cm，脚部径12.3cmを測る。口縁部は曲線的に開き，やや波状を呈している。坏部の器面の屈曲部には低位の突帯が巡っている。脚部はやや低い立ち上がりである。器面はハケ目調整を基礎にして手ナデにより仕上げている。脚部の内面はヘラ削りにより仕上げている。色調は赤褐色を呈し，胎土には長石など砂粒が含まれ精良である。焼成は良好で脚の胴部など研磨を施したかにある。(4)はやや浅めの坏部で径19.5cmを測る。口縁部は直線的に開き，やや波状を呈している。坏部の器面の屈曲部は明確で段差が生じている。器面は回転させた手ナデにより丁寧な仕上げである。色調は明褐色で，胎土には細かい砂粒が混入されている。焼成はやや弱く器面が荒れている。(3・5）は同一

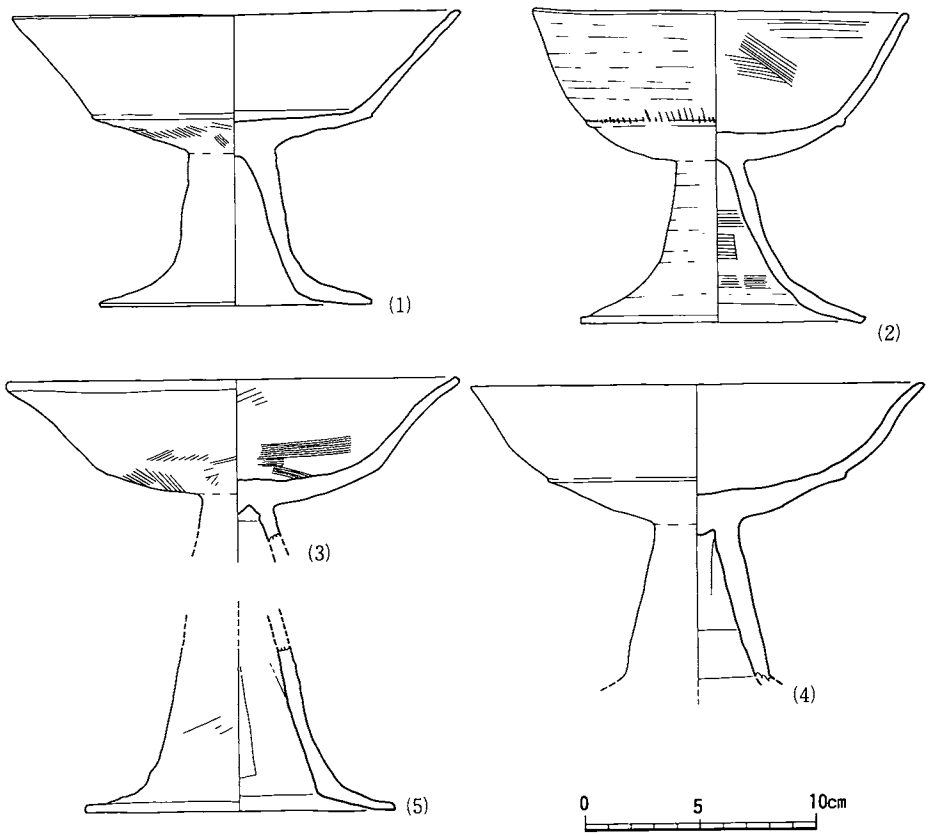


第47図　第11号方形周溝墓実測図



第48図　第12号方形周溝墓実測図

個体資料であろう。はやや浅めの坏部で径19.6cmを測る。口縁部はやや湾曲して開いている。坏部の屈曲は明確である。器面は回転させた手ナデで丁寧な仕上げである。色調は淡黄褐色で砂粒が多く混じり，焼成はやや弱く器面が荒れている。



第49図　第12号方形周溝墓出土遺物実測図（１～５）

(3)　円形周溝墓の調査

出土した９基の方形周溝墓の調査結果を番号に従い報告していきたい。

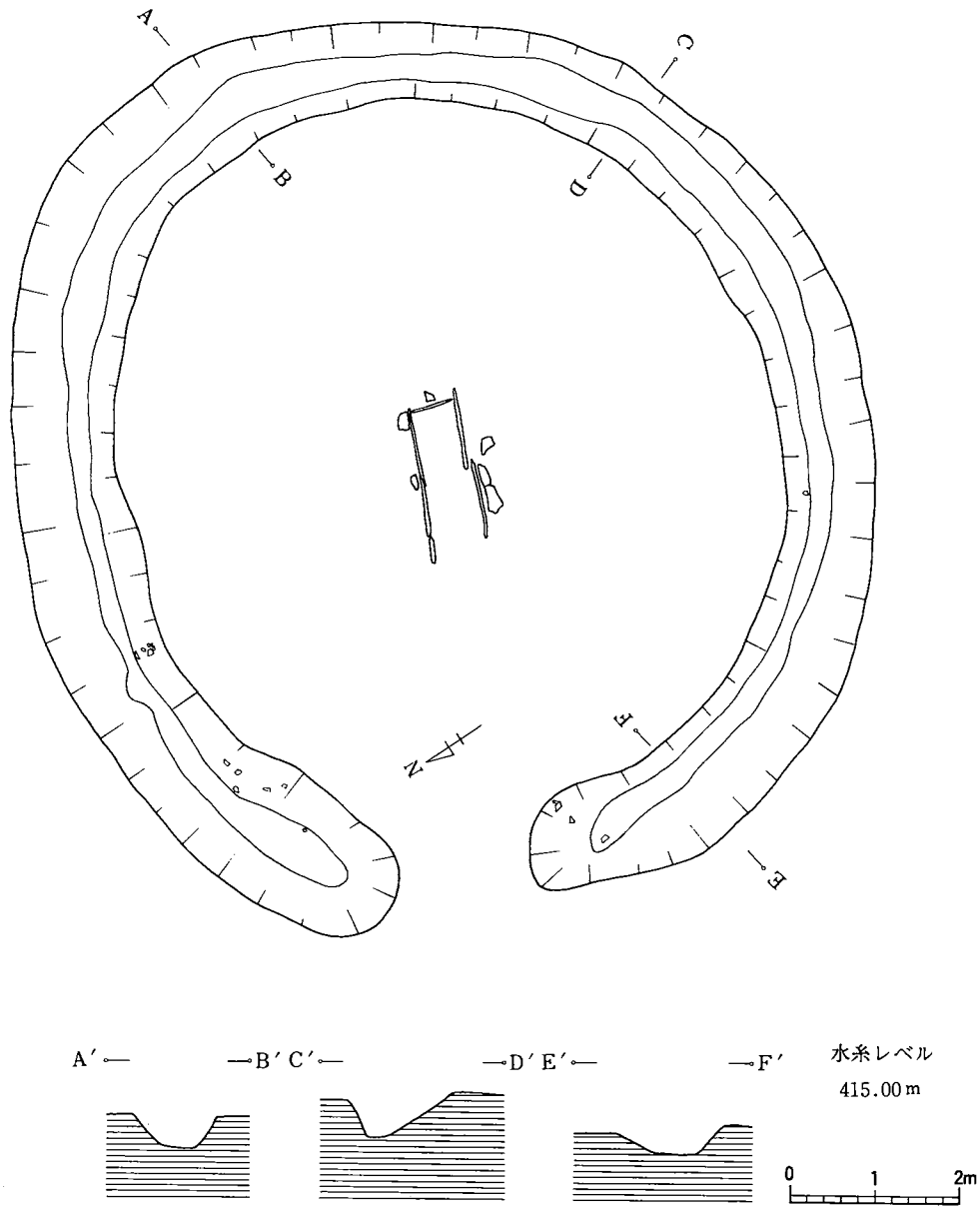
第１号円形周溝墓（第50図）

Ｆ.Ｇ.-10.11グリッドで検出された。円形周溝墓の中では最も北側に作られている。上部を多く削平されている。現況で10.80m×10.30mを測る。円形に巡る周溝は浅く「レ」字形をとっている。陸橋部は西側に設けられている。主体部は１基で安山岩の板石を組み合わせた箱式石棺である。棺身は1.90m×0.40mを測る。天井石は取り除かれ側石など相当に破壊されている。石棺には厚手の板石が敷かれ石枕の用をなしている。主体部内には朱の痕跡が残っている。

遺物は西側周溝の陸橋部付近に細片が出土している。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片・須恵器片などが確認される。



第50図　第１号円形周溝墓実測図

第２号円形周溝墓（第51図）

H-10.11グリッドで検出された。円形周溝墓の中では第１号円形周溝墓と並び最も北側に作られている。削平が著しく陸橋部とその周辺の周溝がわずかに残されているだけである。周溝内から少量の遺物が出土している。

出土遺物（第52図）

(1)は口径17.2cm，器高23.6cm，胴部径22.3cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整であり，内面は粗いヘラ削り調整である。色調は黒褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。(2)は椀形土器である。頸部が窄まりやや肩が張っている。器面はヘラ削りを基にして棒状のものでナデて仕上げている。表面が滑らかであり研磨した状況を示している。色調は赤褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は良好である。

第３号円形周溝墓（第53図）

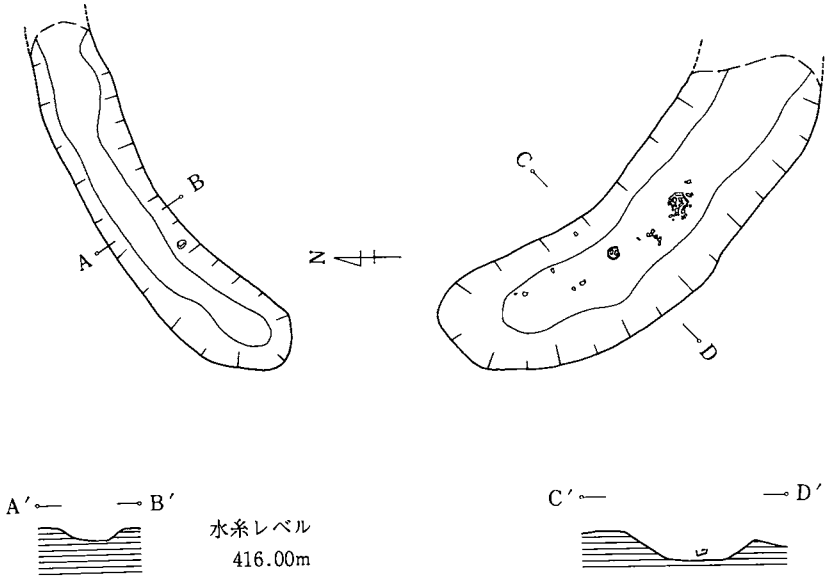
H．I-11.12.13グリッドで検出された。円形周溝墓の中で最も規模が大きく中心に位置している。周溝はかなり良好に残されているが主体部の確認できない。現況で15.51m×15.10mを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に多く出土している。

出土遺物（第55図）（１・２）

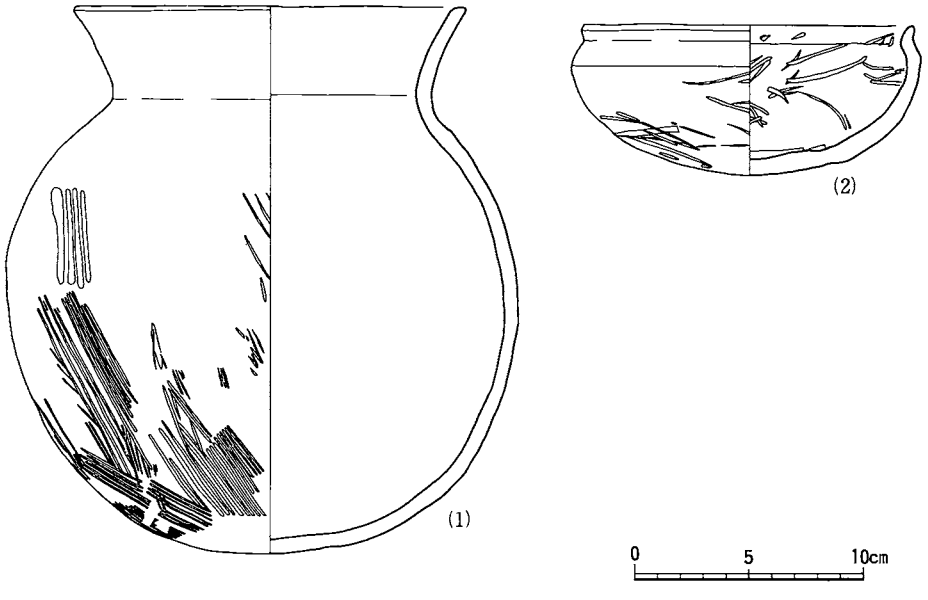
(1)は口径18.4cm，器高48.5cm，胴部径39.4cmを測る大型の壺である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成がやや不充分で器面の荒れが著しい。
口縁部や頸部の変化が多い。(2)の口縁部は湾曲して外反し，口唇部は平坦で横を向いている。器面はハケ目調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分である。煤の付着が著しい。

第４号円形周溝墓（第54図）

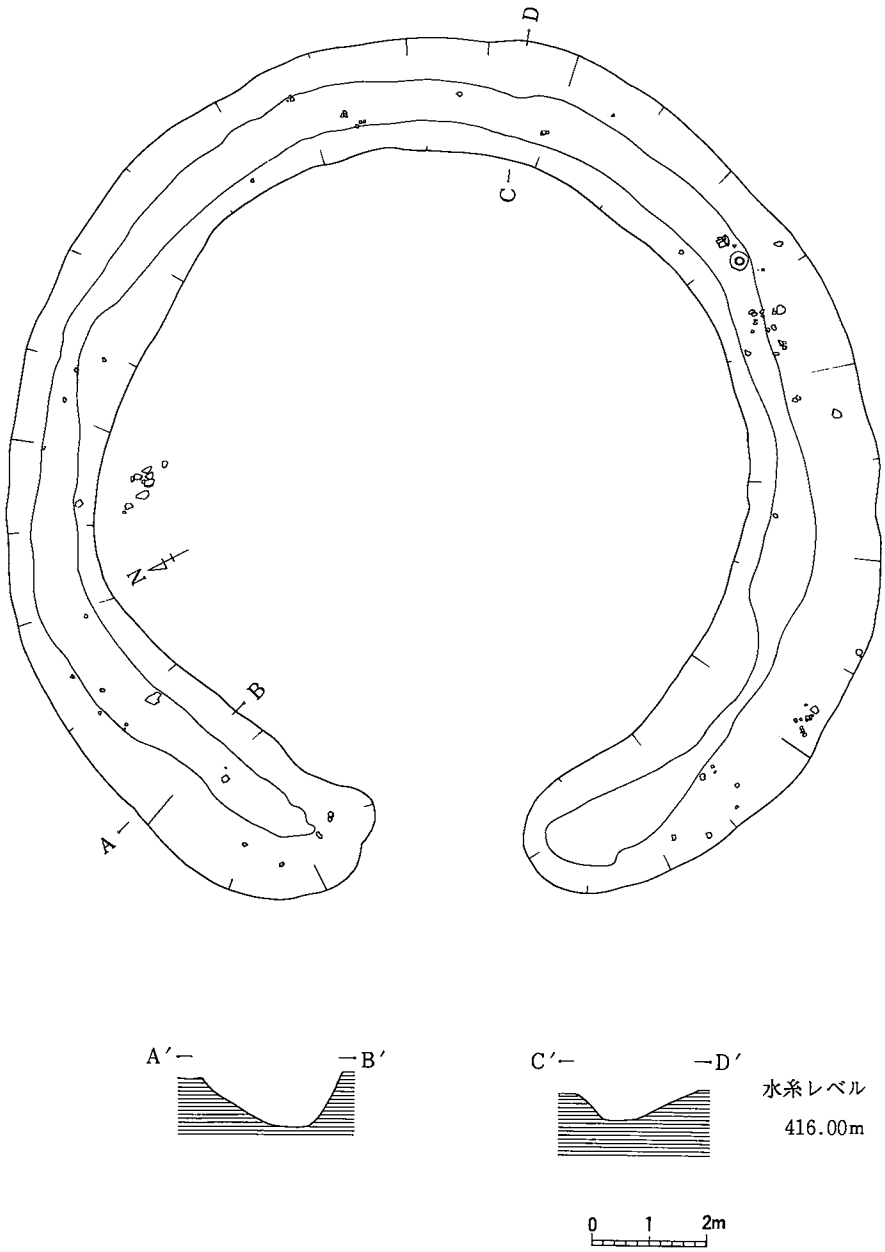
J．-12.13グリッドで検出された。第７・10号方形周溝墓や第３・６号円形周溝墓に囲まれた状態に配置されている。周溝底部分がわずかに残されたものであるが現況で10.50m×10.30mを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。主体部は棺身の掘り込み面がわずかに確認できる程度である。箱式石棺の側石の破片が若干残存している。主体部掘り込み土壙は現況で2.28m×0.44mを測る。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に出土している。



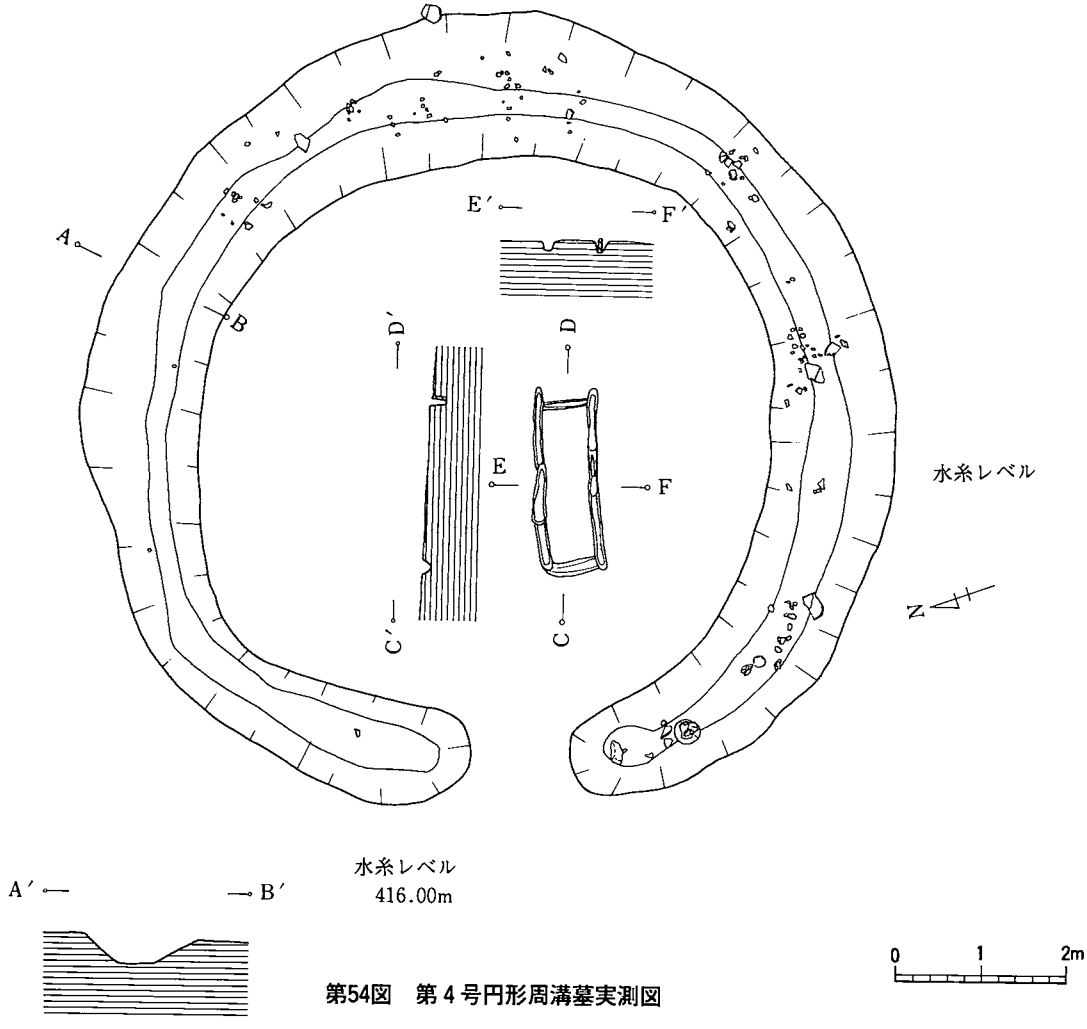
第51図　第２号円形周溝墓実測図　0　50　100cm



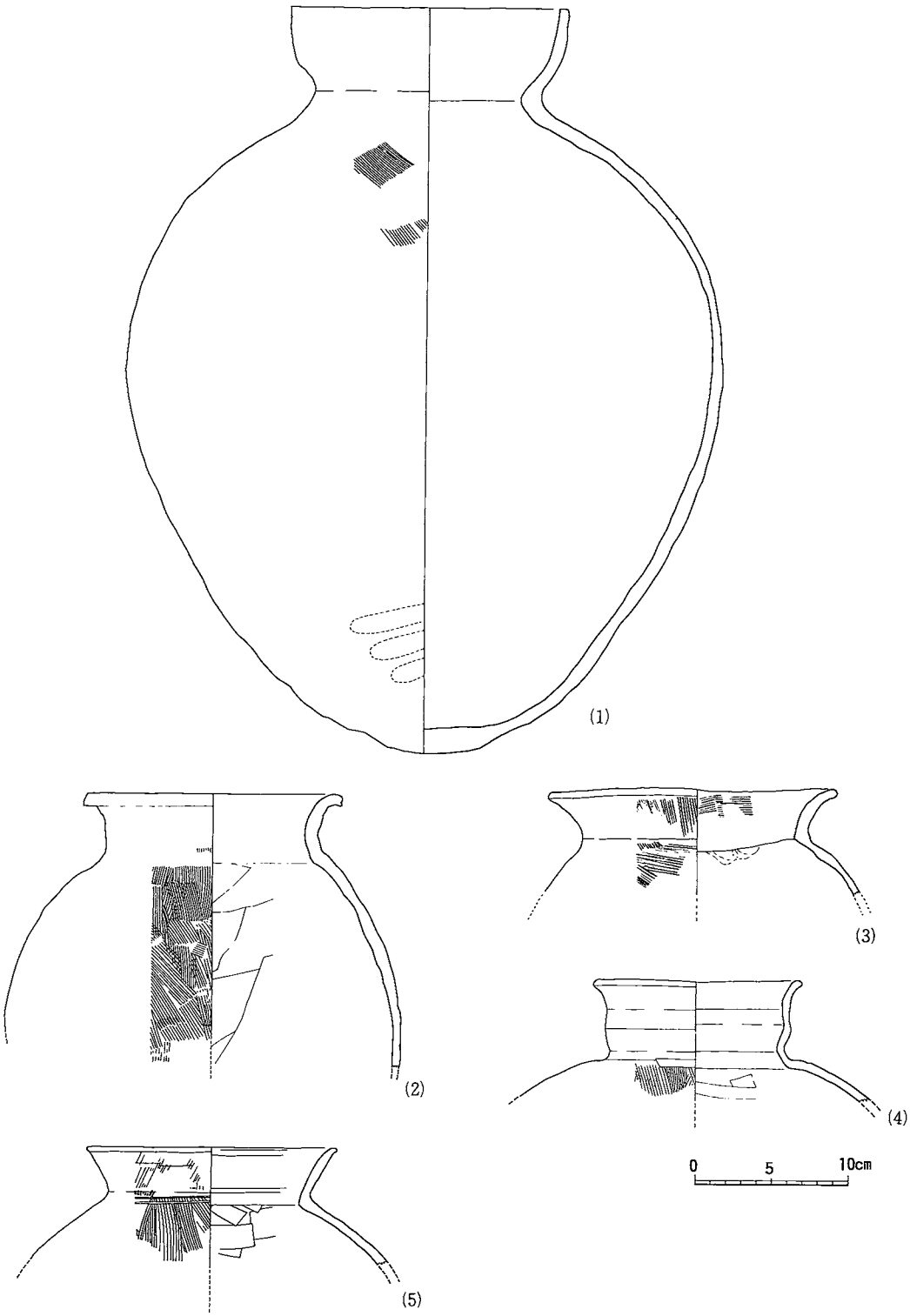
第52図　第２号円形周溝墓出土遺物実測図（１・２）



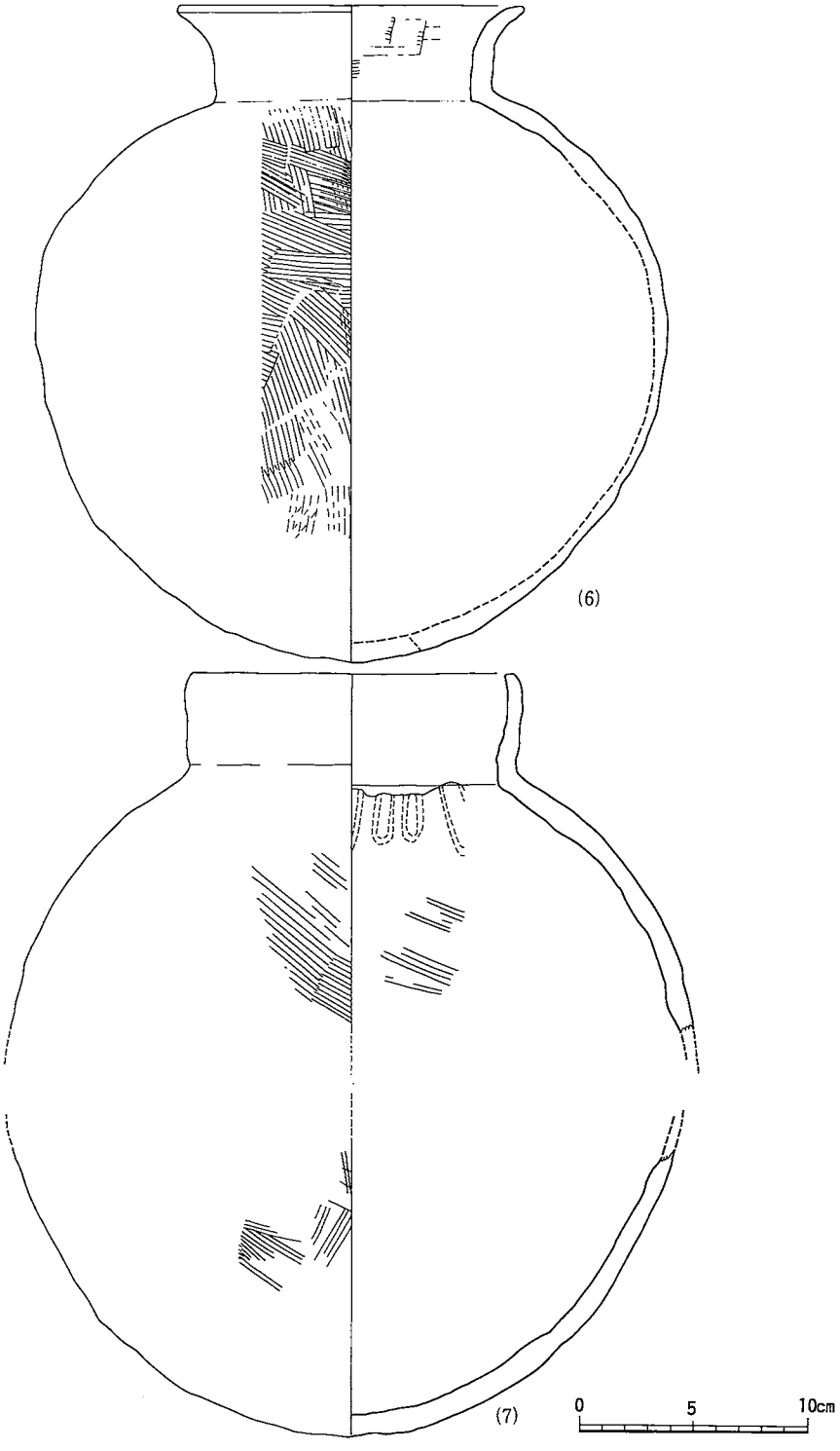
第53図　第３号円形周溝墓実測図



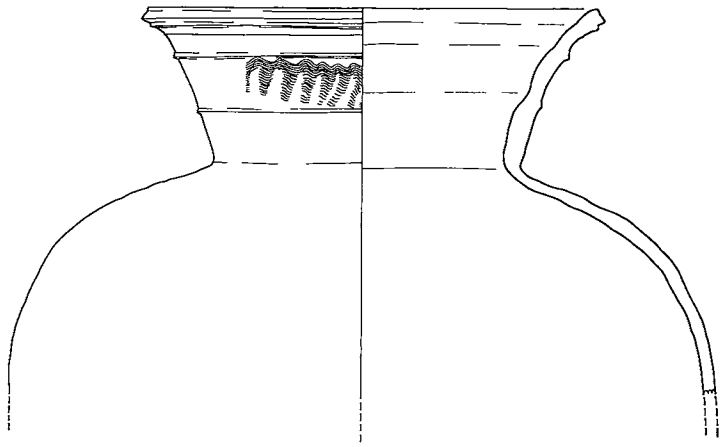
第54図　第４号円形周溝墓実測図



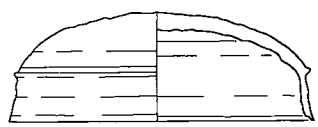
第55図　第3・4号円形周溝墓出土遺物実測図（1～5）



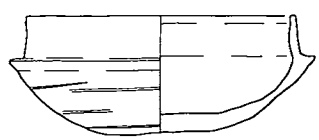
第56図　第４号円形周溝墓出土遺物実測図（６～７）



(8)



(9)



(10)

0　5　10cm

第57図　第４号円形周溝墓出土遺物実測図（８～10）

出土遺物（第55・56・57図）（３～10）

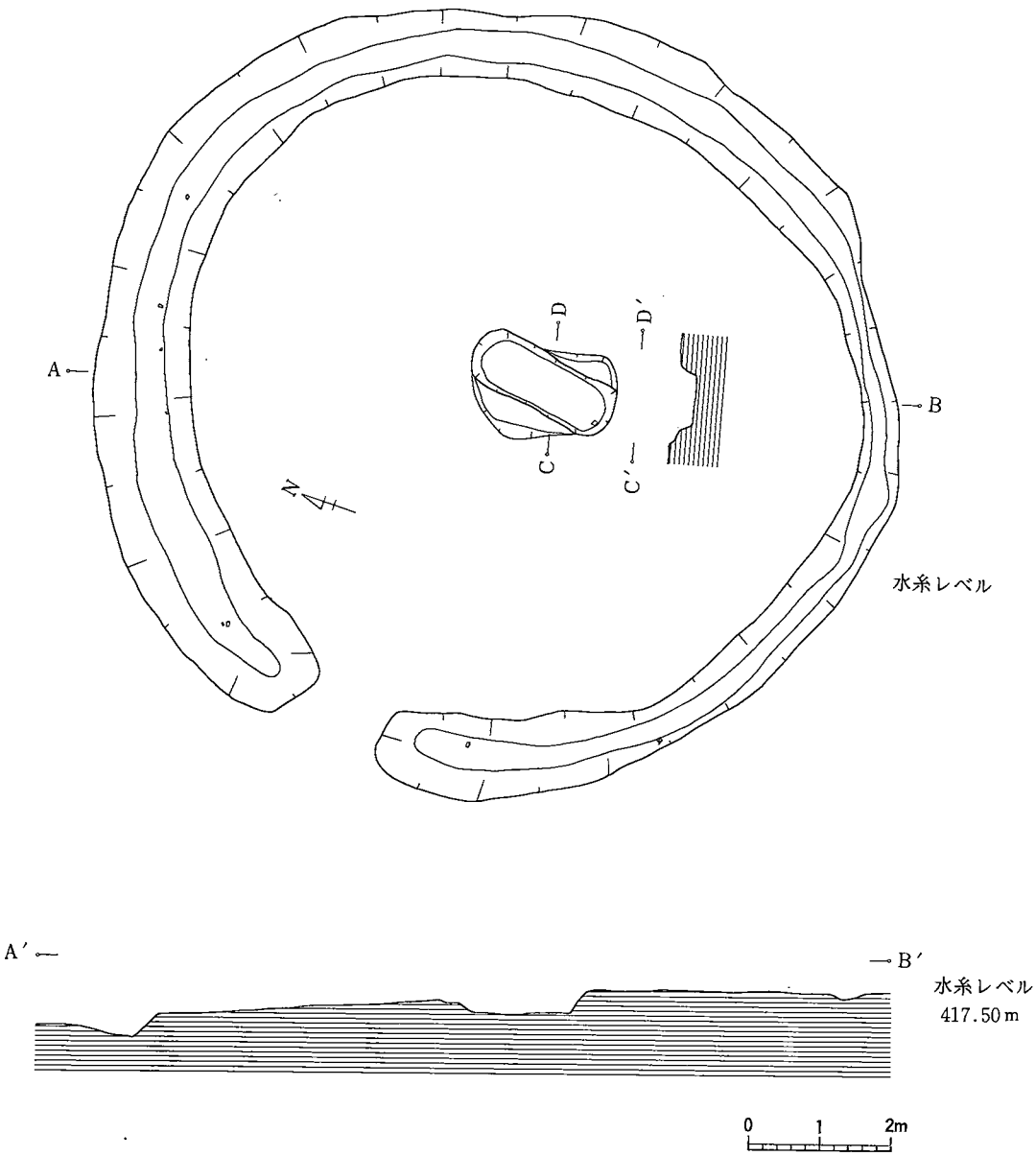
(3)は口縁部がやや湾曲して外反している。口唇部が外を向いている。器面はハケ目調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分である。煤の付着が著しい。(4)は壺であろう。口縁部は屈曲し，頸部が窄まりやや肩が張っている。器面はハケ目調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分である。(5)は「く」の字を呈する口縁部である。器面はハケ目調整で内面はヘラ削り調整である。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分である。(6)は口径15.2cm，器高28.2cm，胴部径27.8cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りの後ナデられている。色調は褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着が著しい。(7)は口径14.2cm，胴部径30.4cmを測る甕である。口縁部はほぼ直口している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りの後ナデられている。色調は淡黄褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成はやや不充分で器面が荒れている。(8)は口径19.3cm，胴部径30.0cmを測る須恵器の甕である。口縁部は高く外反するが，２条の帯びを巡らせ櫛書き文様を施している。器面は細かな格子目，内面には青海波文が見られる。色調は灰褐色で胎土は精良である。焼成は充分で器厚は薄く仕上げられている。（9・10）は須恵器の坏と蓋である。蓋された状態で検出されている。(9)は口径13.1cm，器高4.6cm，胴部径12.7cmを測る。口唇部先端がやや尖り屈曲部には突帯が巡っている。器面にはヘラ削り痕跡が残り内面にはロクロでのナデにより仕上げられている。(10)は口径11.5cm，器高5.0cm，胴部径13.1cmを測る。急角度の立ち上がを示す坏である。器面にはヘラ削り痕跡が残り内面にはロクロでのナデにより仕上げられている。双方とも色調は灰褐色で胎土は精良である。焼成は充分で器厚は薄く仕上げられている。

第５号円形周溝墓（第58図）

Ｈ．Ｉ．-14.15グリッドで検出された。第３・６号円形周溝墓の南側にあたる。周溝底部分がわずかに残されたものであるが現況で10.51ｍ×11.58ｍを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。主体部は棺身の掘り込み面がわずかに確認できる程度である。箱式石棺の側石の破片が若干残存している。主体部掘り込み土壙は現況で2.10ｍ×0.40ｍを測る。主体部の方向が陸橋部に直交しており異質である。複数の主体部である可能性が強い。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に出土している。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片が確認される。



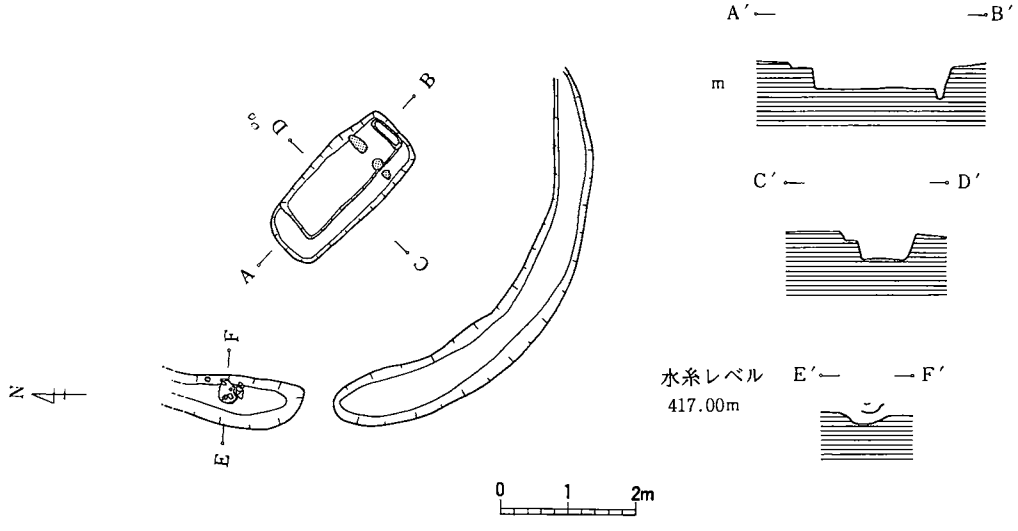
第58図　第５号円形周溝墓実測図

第６号円形周溝墓（第59図）

H-13グリッドで検出された。最も小型の作りで第３・４・５号円形周溝墓に囲まれた状態に配置されている。削平が著しく南側の周溝底がわずかに残されているだけである。主体部の土壙が確認でき現況で2.32m×0.61mを測る。周溝内から少量の遺物が出土している。

出土遺物（第61図）

(1)は口径16.0cm，器高26.3cm，胴部径26.8cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りの後ナデられている。色調は褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着が著しい。(2)は高坏片である。復原で脚部径11.7cmを測る。脚部はやや低い立ち上がりである。器面はハケ目調整を基礎にして手ナデにより仕上げている。脚部の内面はヘラ削りにより仕上げている。色調は赤褐色を呈し，胎土には長石など砂粒が含まれ精良である。焼成は良好で脚の胴部など研磨を施したようである。



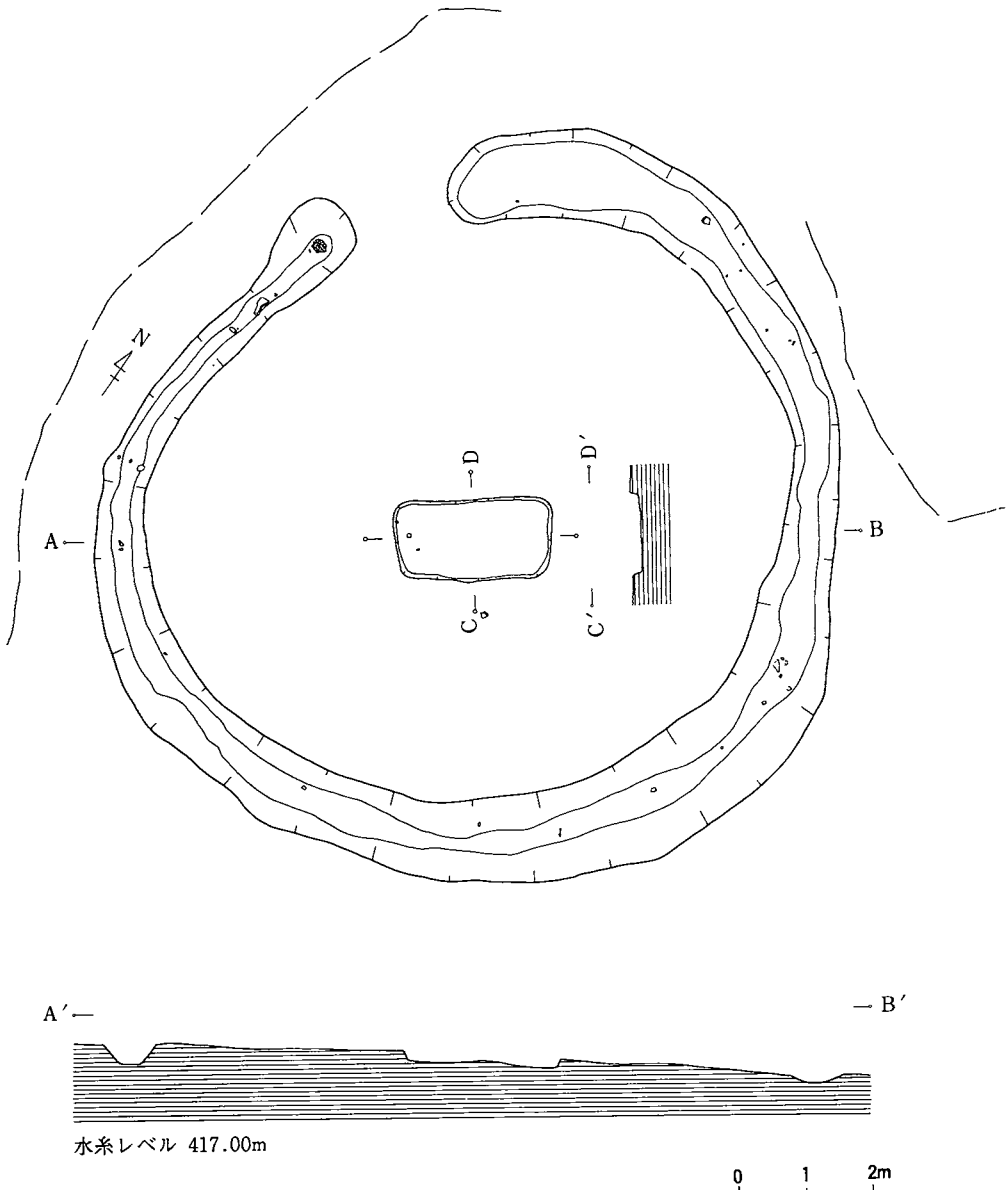
第59図　第６号円形周溝墓実測図

第７号円形周溝墓（第60図）

K-13グリッドで検出された。第４号円形周溝墓の西側にあたる。周溝底部分がわずかに残されたものであるが現況で10.50m×9.80mを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。主体部は棺身の掘り込み面がわずかに確認できる程度である。箱式石棺の側石の破片が若干残存している。主体部掘り込み土壙は現況で2.37m×1.20mを測る。主体部の方向が陸橋部に直交しており異質である。複数の主体部である可能性があろう。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に出土している。

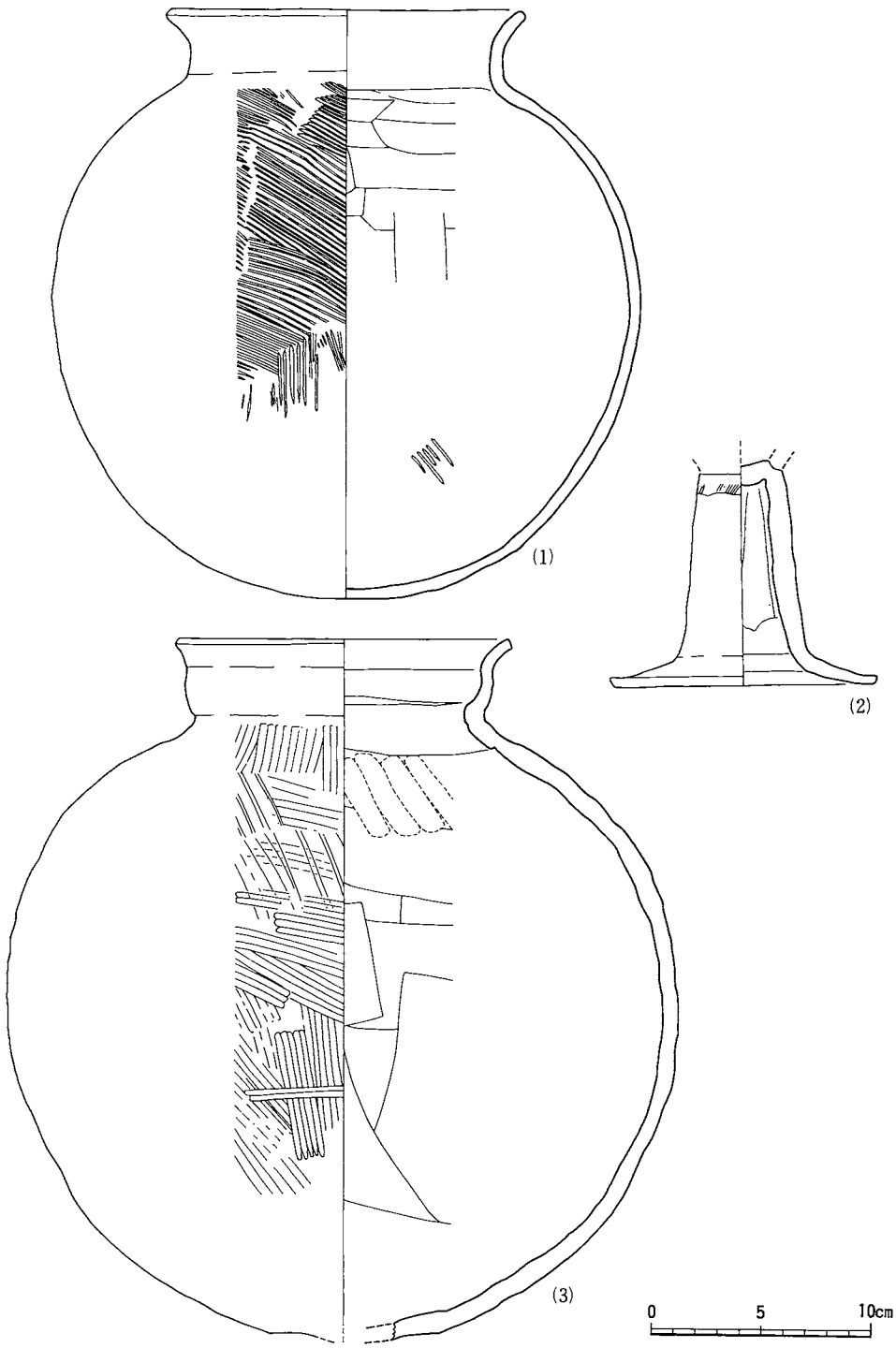
出土遺物（第61図）

(3)は口径15.1cm，器高31.9cm，胴部径30.5cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲



第60図　第７号円形周溝墓実測図

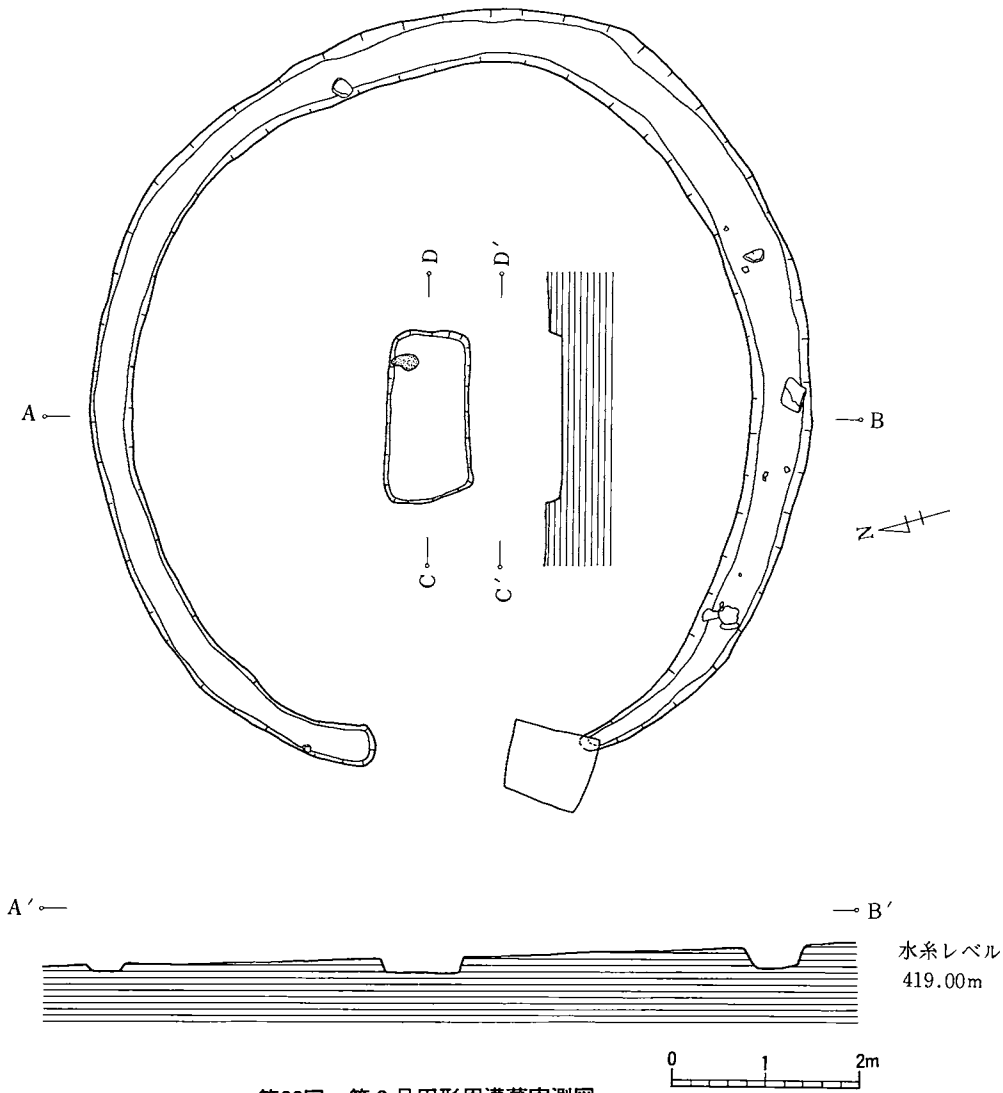
している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りの後ナデられている。色調は褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着がある。



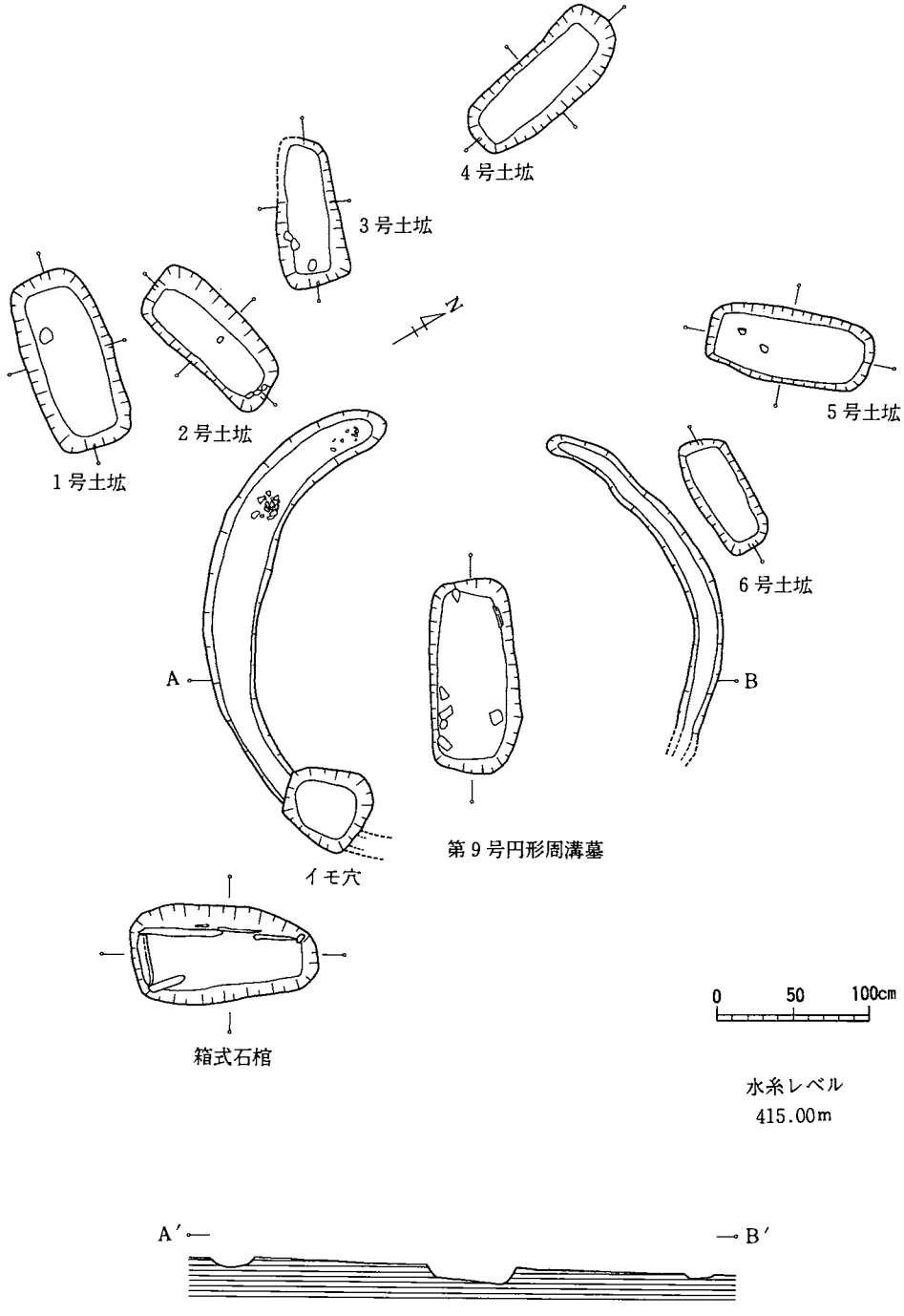
第61図　第６・７号円形周溝墓出土遺物実測図（１～３）

第８号円形周溝墓（第62図）

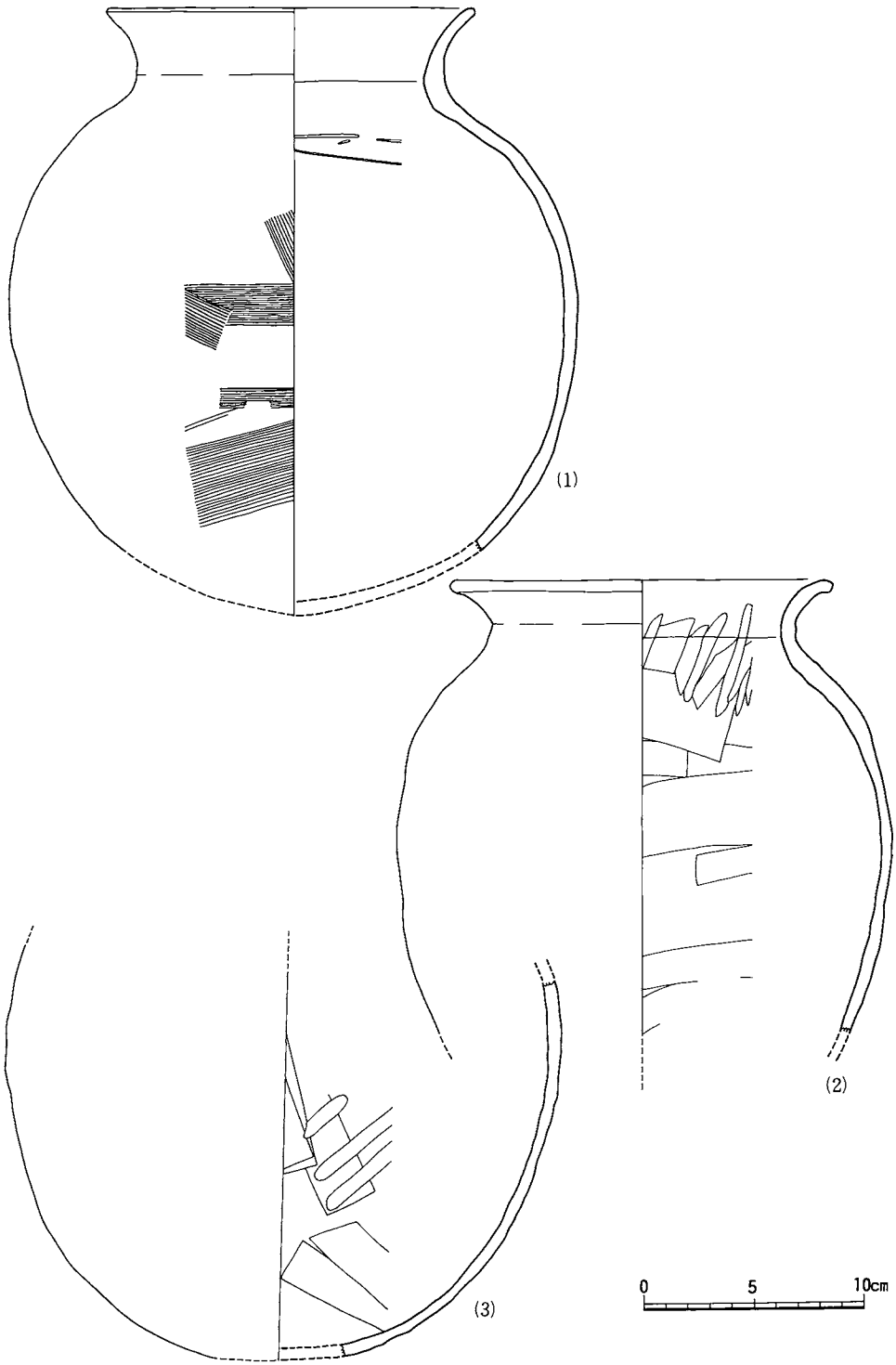
Ｈ．Ｉ-14.15グリッドで検出された。円形周溝墓の中では最も南側に位置している。第11・12号方形周溝墓の東側にあたる。周溝底部分がわずかに残されたもので現況で7.80m×8.80mを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。主体部は棺身の掘り込み面がわずかに確認できる程度である。箱式石棺の側石の破片が若干残存している。主体部掘り込み土壙は現況で



第62図　第８号円形周溝墓実測図



第63図　第９号円形周溝墓･第1～6号土坑実測図



第64図　第9号円形周溝墓出土遺物実測図(1～3)

1.89m×0.50mを測る。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に出土している。

出土遺物（第64図）(1)

(1)は口径16.8cm，胴部径26.0cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は球形を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りの後ナデられている。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着がある

第９号円形周溝墓（第63図）

Ｄ.Ｅ-12.13グリッドで検出された。円形周溝墓の中では最も東側に位置している。東側の削平された地区にもう一つの円形周溝墓のグループがあった可能性が強い。土壙群の東側にあたる。南東部には単独の箱式石棺が配置されている。上部や東側半分を削平されているが，現況で9.50m×9.40mを測る。円形に巡る周溝は「レ」字形をとっている。主体部は棺身の掘り込み面がわずかに確認できる程度である。主体部掘り込み土壙は現況で2.08m×1.16mを測る。陸橋部は西側に設けられている。周溝内の遺物は西側周溝の陸橋部付近を中心に出土している。

出土遺物（第64図）（２・３）

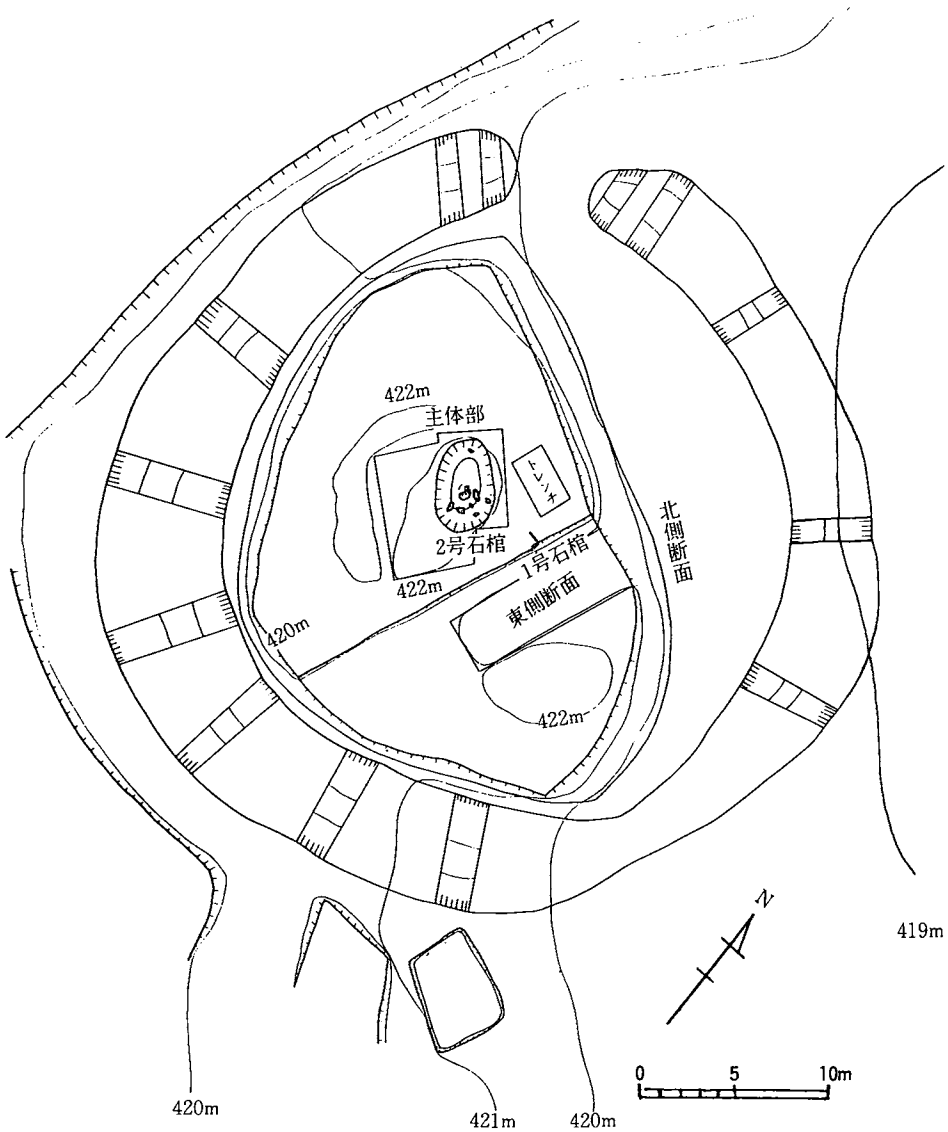
(2)は口径17.0cm，胴部径22.5cmを測る甕である。口縁部は外反するが幾分湾曲している。胴部は胴長を呈している。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りである。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着がある。(3)底部片である。器面はハケ目調整である。内面はヘラ削りである。色調は明褐色で胎土には長石など砂粒が多い。焼成は充分で煤の付着がある

(4)　円墳の調査（第65・66図）

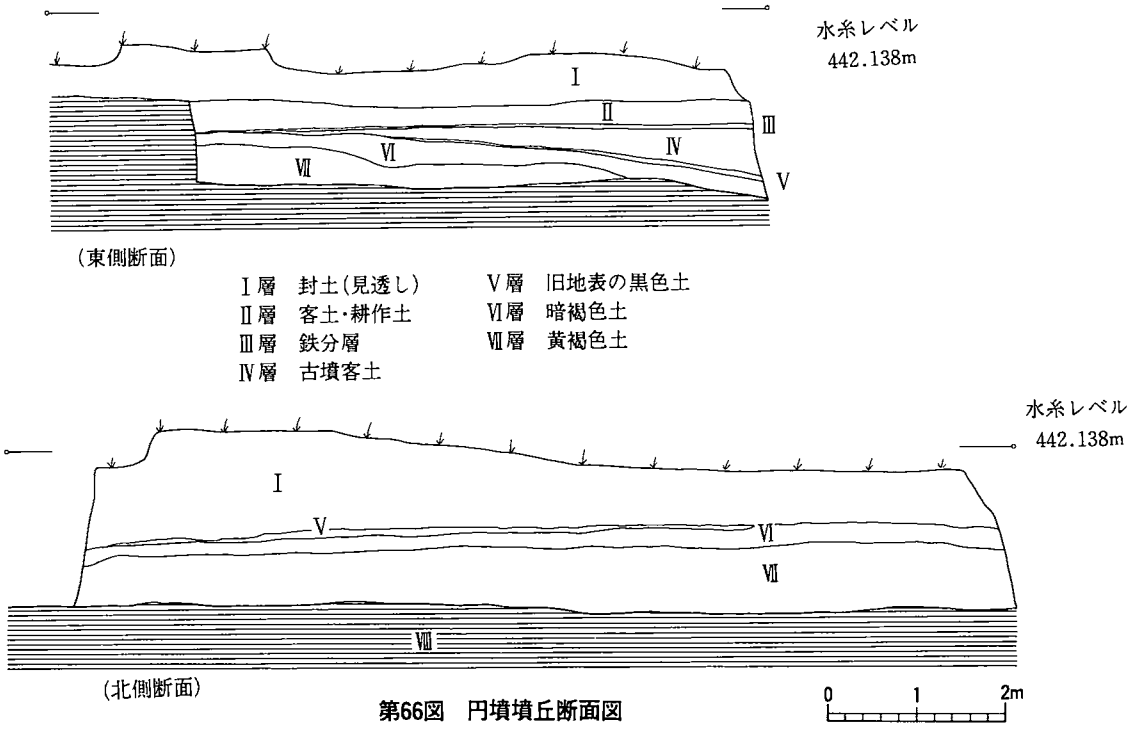
円墳は今回の調査区の最も南側，そして最も高い位置に設けられている。周溝の確認を行っている。墳丘や周溝の多くをなくしており変形した形状を示している。現況での外径34.4m×内径25.5mを測る。周溝には合計12本の小トレンチを設けているが周溝断面は「レ」字の形状を示している。周溝の最大幅は5.53mを測り，現況での最深部は1.63mである。ほとんどの墳丘を失しているので主体部を明確にしないが，わずかに残された１基の箱式石棺を確認できる。そしてほぼ中央部に安山岩の板石片が散在し，浅く掘り込められた土壙と判断できる遺構があり，複数の箱式石棺が埋納されていたものと考えられる。北側及び中央のカット面において旧地表に積み上げられた盛土が観察でき北側の最も厚いところで1.42mを測る。著しい版築や固めた痕跡は観察されない。陸橋部は西側に明確に残されている。周溝内の遺物は少量である。

出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片が確認されるが、須恵器らしき土器は出土していない。



第65図　円墳平板測量図



第66図　円墳墳丘断面図

(5)　箱式石棺・土壙の調査（第67図）

D-13グリッドで検出された。第９号円形周溝墓の直ぐ東側に位置している。箱式石棺が検出されたもので周溝は検出されず単独の箱式石棺と判断される。

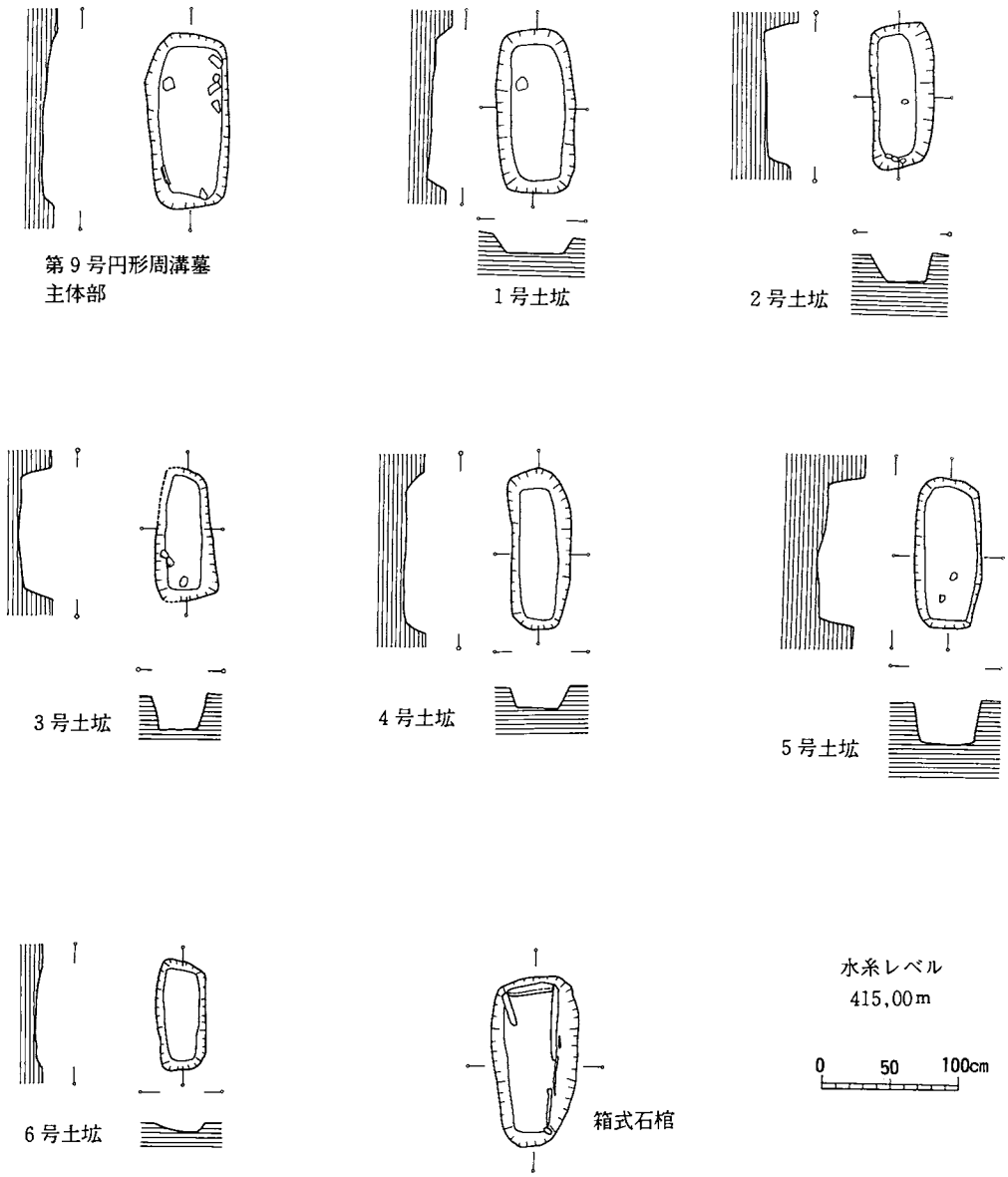
天井石は取り除かれており，側石の破壊も著しい。棺身の掘り込み面はわずかに確認できる程度である。現況での棺身は2.04m×0.52mを測る。

棺身から刀子の破片が数片出土している。

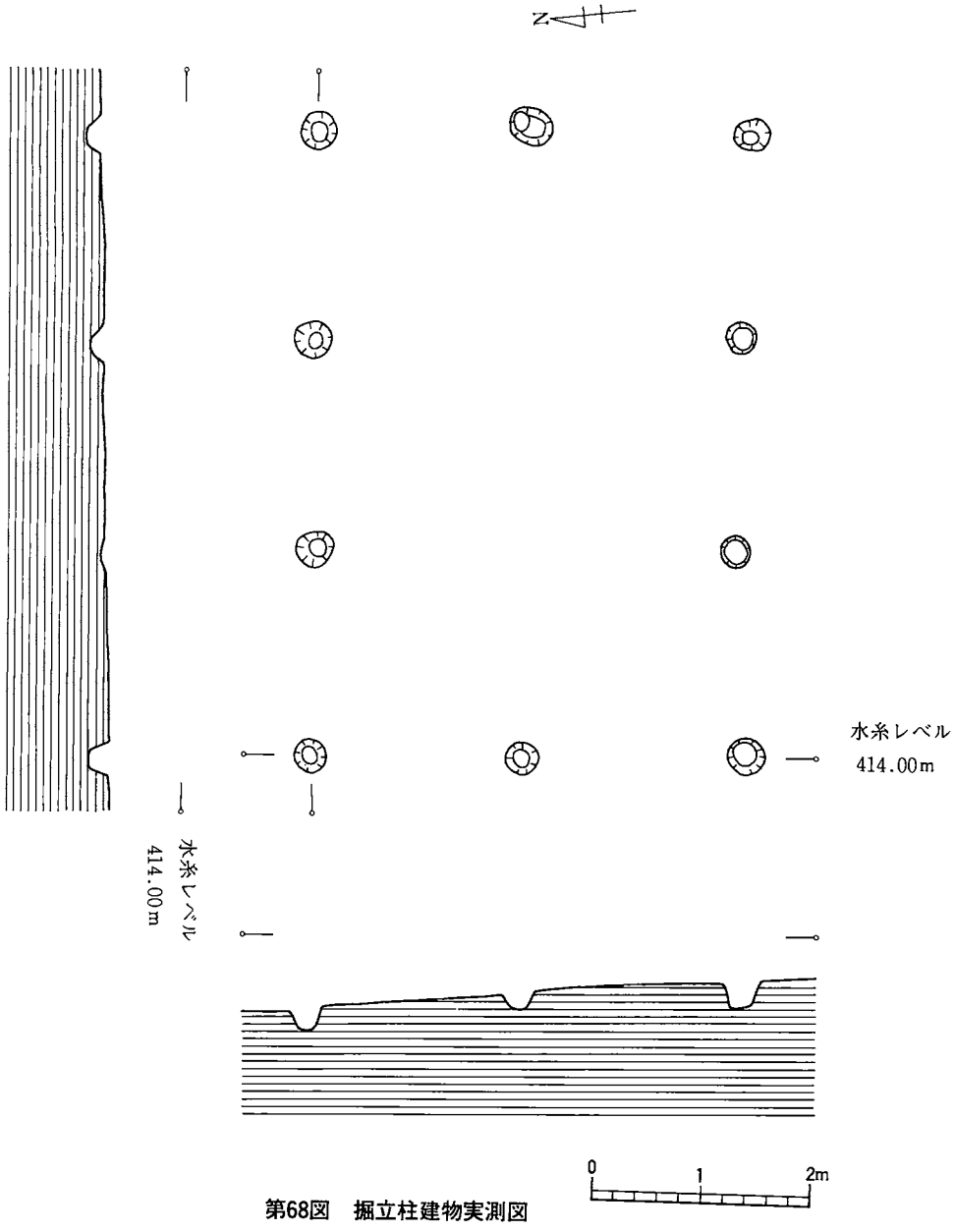
出土遺物

土器片は細片であり，土師器の甕片が確認される。

土壙は６基確認できた。いづれも方形を呈するが，その形状や主軸方向には幾らかの不規則性がある。上部を大きく削平されているため30～40cmの深さにとどまっている。遺物は内部に自然石が数個認められる程度であり，東側に位置する箱式石棺と共に、作られた時期を明確にすることができない。しかし，これらの土壙群は第９号円形周溝墓には切られた状況にあり，少なくとも円形周溝墓群より以前に構成されたことを述べることはできよう。弥生時代のものとすれば住居群に対応することになるのであるが定かにしない。



第67図　第９号円形周溝墓 第1～6号土坑、箱式石棺実測図

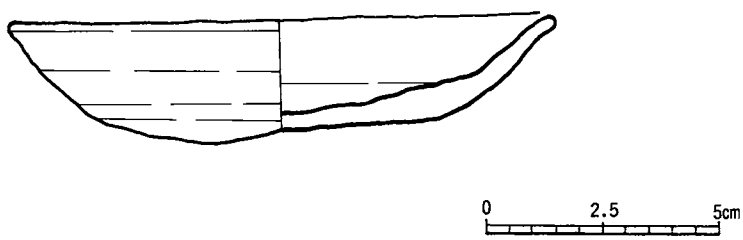


第68図　掘立柱建物実測図

第５節　柱穴遺構及びその他の遺構・遺物

Ｆ－８・９グリッドから２間×３間の掘立柱建物が１軒検出されている。柱間は約1.8～1.9mを測っている。柱穴は約20～30cmの深さで残存している。今回の調査区のほぼ中央部にあたり，弥生時代の住居遺構や古墳時代の古墳遺構が空白地域になっているところに作られている。出土遺物がなく時期を明確にできないが，次図は付近から出土した土師皿でロクロを用いて作られている。この土器をはじめ，付近から若干の古代～中世の遺物が出土しており，掘立柱建物はこれらに遺物に相当する時期のものと述べておきたい。なお，この掘立柱建物のすぐ北側に溝遺構が東西に走っている。不規則ではあるがおよそ幅２m程度で浅い溝を呈している。硬化面も見られるところから乾燥時期には道路遺構されたものと思われる。磁器片が含まっていることからこの溝遺構は近世のものと判断される。

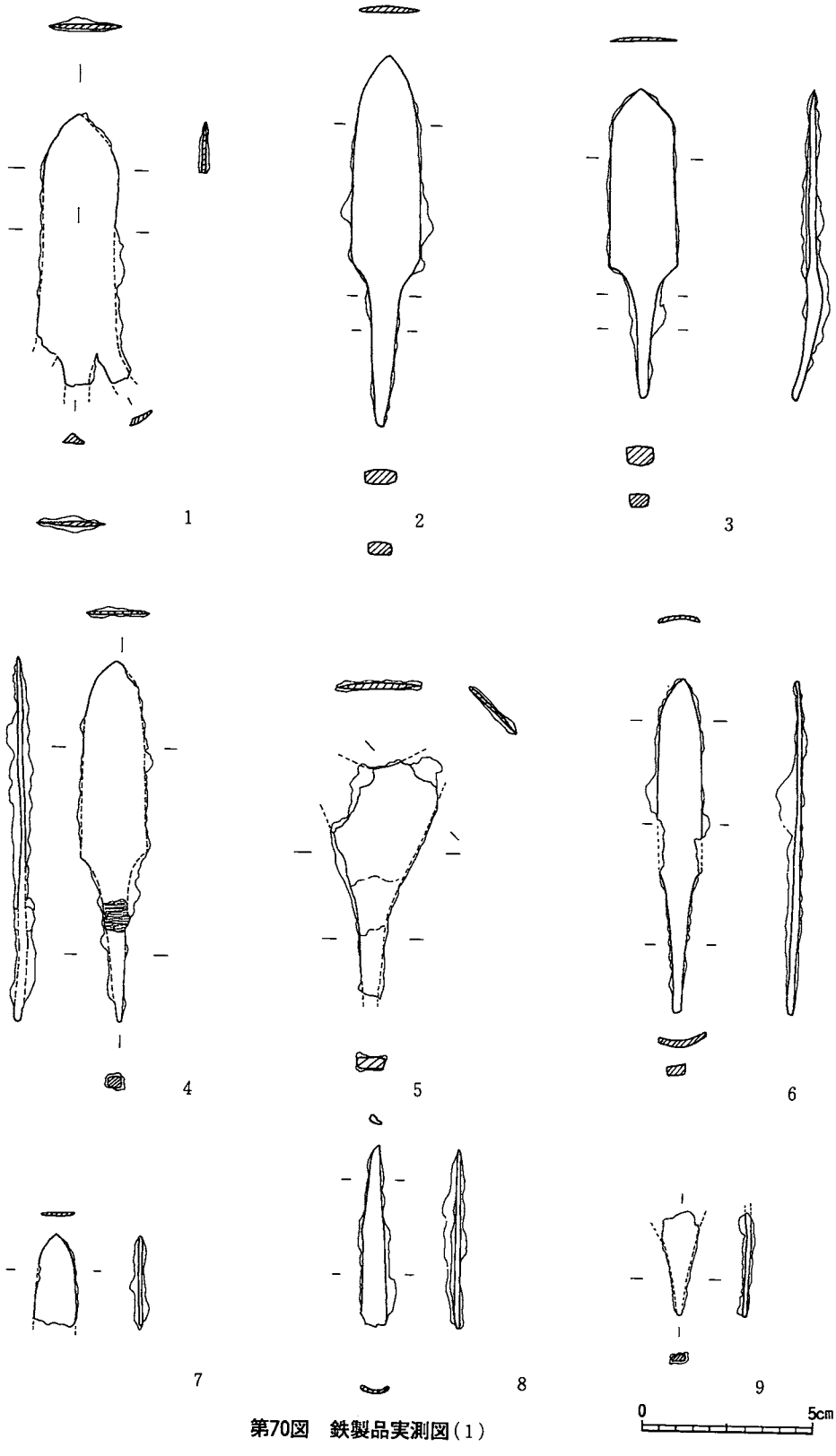
Ｇ－６グリッドからは単独の楕円形を呈する土壙が検出された。副葬されたと思われる幅広の短刀が１振出土している。



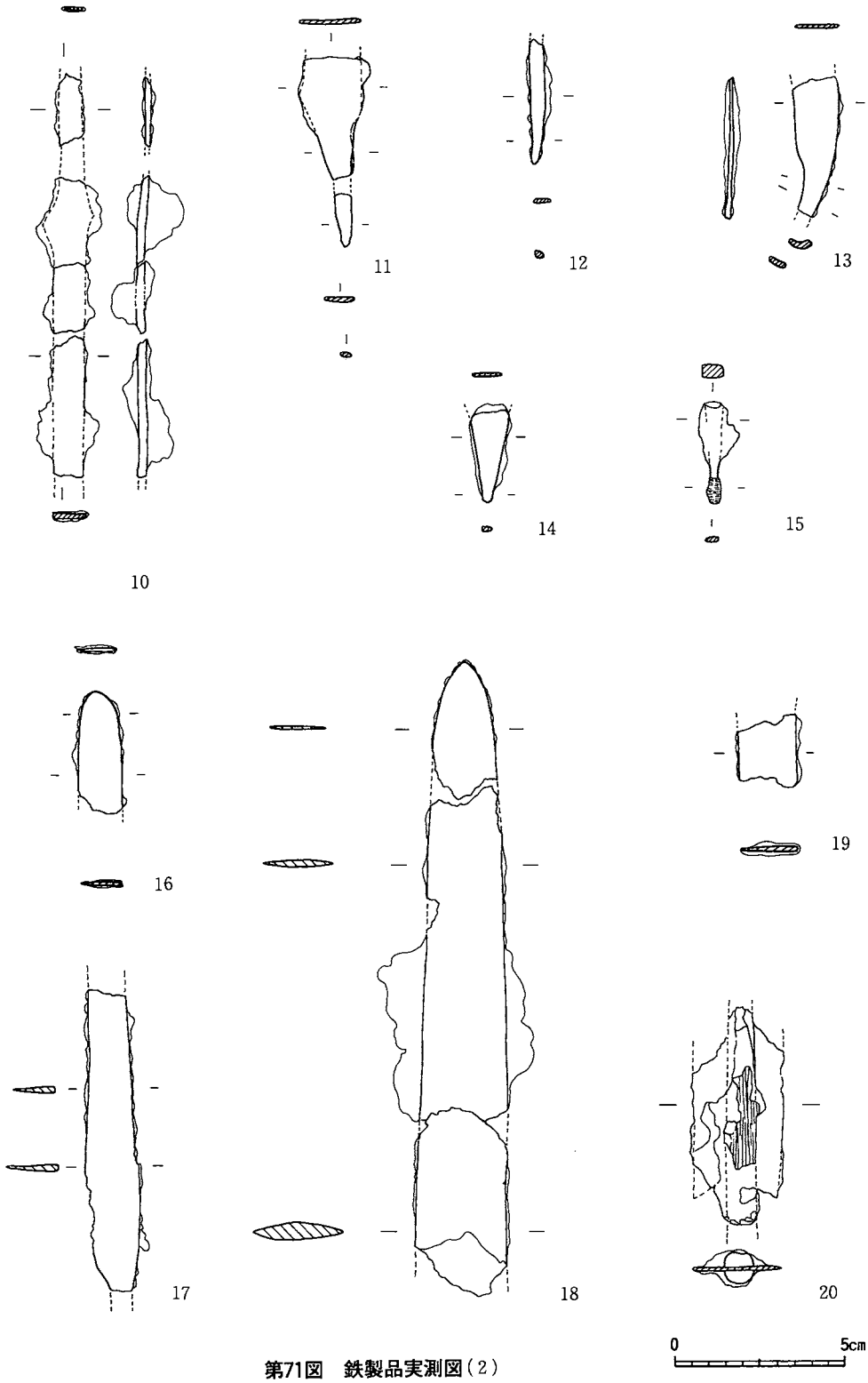
第69図　古代遺物実測図

第６節　鉄製品について（第70～73図）

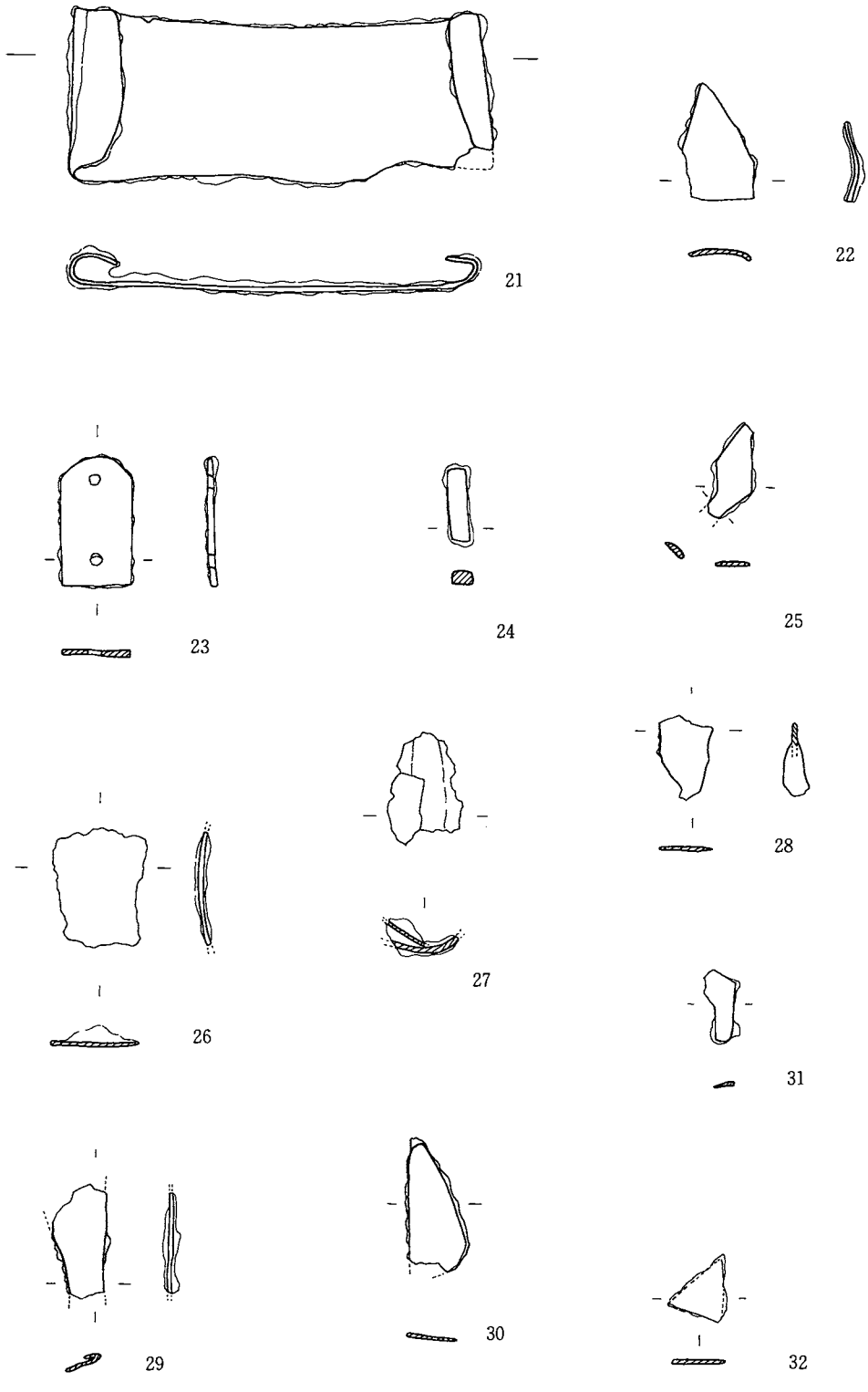
今回の調査で出土した鉄製品は33点が実測することができた。器種としては鉄鏃，刀子，鉄剣，鉄鎌，短刀と鉄片である。鉄鏃や刀子，鉄刀片は弥生時代住居内や古墳遺構の主体部と周溝からも出土している。鉄鎌は弥生住居内からの出土である。鉄鏃の形状には飛燕式，長三角形，雁投式や柳葉式有茎鏃がある。15には口巻糸痕が認められる。鉄剣片や鉄鎌が住居内から出土しており鉄製品が相当使用されていたことがうかがわれる。住居内から鉄片の出土も多くこの遺跡で小規模の切断や加工が行われていたものであろう。33の短刀は大きく時期を異にするが中世の墓壙に副葬されたものであろう。「鎧通し」と称される幅広の短刀である。



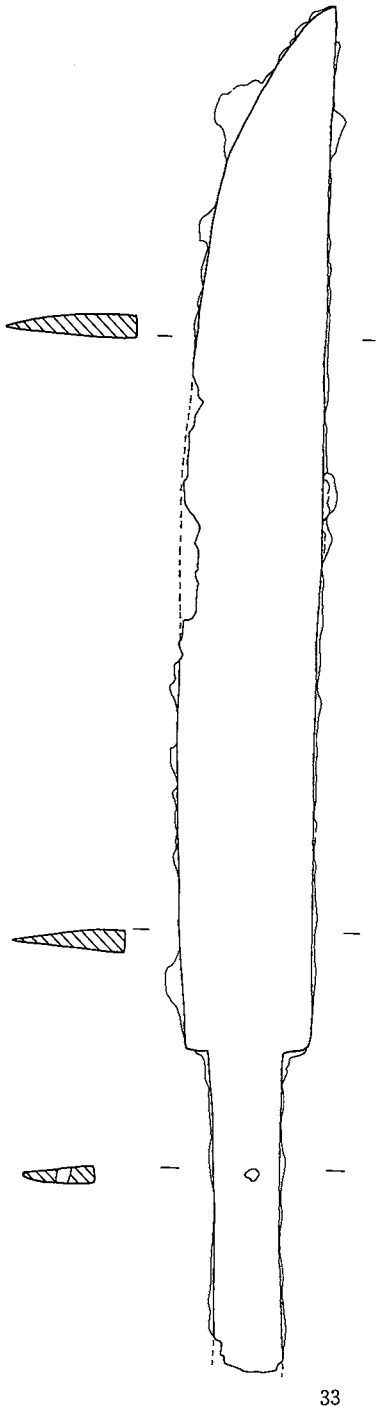
第70図　鉄製品実測図（1）



第71図　鉄製品実測図(2)



第72図　鉄製品実測図（３）



0　5cm

第73図　鉄製品実測図（4）

第３表　方形周溝墓一覧表

番号	規模（縦×横×深さ）	主体部の確認有無	主な出土遺物
１号	13.50× 8.60× 0.45m	（有）　１基	土師器
２号	7.88× 8.50× 0.15	（無）	土師器
３号	12.45× 9.50× 0.30	（有）　１基	土師器
４号	8.80× 8.26× 0.20	（有）　２基	土師器
５号	7.75× 5.72× 0.20	（有）　１基	土師器
６号	11.66×11.10× 0.40	（有）　１基	土師器　鉄鏃
７号	7.86× 9.00× 0.25	（有）　１基	土師器　鉄鏃
８号	6.80× 7.75× 0.10	（無）	土師器
９号	7.95× 8.80× 0.20	（有）　１基	土師器
10号	17.67×16.30× 0.45	（無）	土師器
11号	15.68×15.97× 0.35	（有）　１基	土師器　箱式石棺
12号	10.52×12.73× 0.40	（無）	土師器

第４表　円形周溝墓一覧表

番号	規模（縦×横×深さ）	主体部の確認有無	主な出土遺物
１号	10.80×10.30× 0.50m	（有）　１基	土師器　須恵器　箱式石棺
２号	9.80× － × 0.20	（有）　１基	土師器　須恵器
３号	15.51×15.10× 1.00	（有）　１基	土師器　須恵器
４号	10.80×10.30× 0.50	（有）　１基	土師器　須恵器　箱式石棺
５号	10.81×11.58× 0.30	（無）	土師器　須恵器

番号	規模（縦×横×深さ）	主体部の確認有無	主な出土遺物
6号	6.30×　－　× 0.30	（有）　1基	土師器　木棺
7号	10.50× 9.80× 0.40	（有）　1基	土師器　須恵器　箱式石棺
8号	7.80× 8.80× 0.30	（無）	土師器
9号	9.50× 9.40× 0.25	（無）	土師器　箱式石棺

円　墳　　1基

内径　約25.5m×外径　約34.4m　　土師器、勾玉

主体部　　箱式石棺　2基、土壙　1基

（参考）県内の主要な円墳	径	高さ
勝負塚古墳（一の宮町）	58.7m	11.4m
車塚　古墳（一の宮町）	47.0m	8.0m
経塚　古墳（天水町）	45.0m	7.0m
慈恩寺古墳（植木町）	43.4m	7.5m
津袋大塚古墳（鹿本町）	42.0m	不明確
大野窟古墳（竜北町）	38.5m	11.5m
馬見塚古墳（山鹿市）	38.5m	6.0m
濡れ観音古墳（西合志町）	35.0m	不明確

（隈昭志氏作成）

第５表

出土遺物観察一覧表 (1)

No. 1

挿図番号	出土位置	出土遺構	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
第11図(1)	E－3	第４号住居跡	高杯	－	－	13.0	砂粒混じり	良好	赤褐色	スカシ４個
第13図(1)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	32.1	－	29.4	〃	〃	赤褐色	
(2)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	17.5	－	20.1	〃	〃	赤橙色	煤付着
(3)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	19.2	－	21.9	〃	〃	褐灰色	〃
(4)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	19.3	－	23.8	〃	〃	明褐灰色	〃
(5)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	12.3	28.5	17.5	〃	やや不良	黄橙色	〃
(6)	C－6	第５号住居跡	甕形土器	－	－	23	〃	良好	黄褐色	〃
第14図(7)	B－5	第６号住居跡	脚台	－	－	－	〃	〃	淡橙色	内面砂粒
(8)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	12.4	〃	〃	浅橙色	煤付着
(9)	B－5	第６号住居跡	小形丸底壺	7.2	－	9	〃	〃	浅橙色	〃
第16図(1)	B－5	第６号住居跡	脚台付甕形土器	21.2	45.2	25.5	〃	〃	橙色	
(2)	B－5	第６号住居跡	壺	11.0	45.3	27.3	〃	〃	橙色	〃
(3)	B－5	第６号住居跡	長頸壺	9.6	25.4	17.0	〃	〃	明赤褐色	重弧文土器
(4)	B－5	第６号住居跡	甕形土器	12.1	－	20.7	〃	〃	明赤褐色	
(5)	B－5	第６号住居跡	〃	24.5	－	25.3	〃	やや不良	明赤褐色	煤付着
第17図(6)	B－5	第６号住居跡	〃	21.3	－	21.5	〃	良好	橙色	
(7)	B－5	第６号住居跡	〃	16.0	－	20.3	〃	〃	橙色	煤付着
(8)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	15.6	〃	〃	褐灰色	煤付着
(9)	B－5	第６号住居跡	壺	17.5	－	－	〃	〃	橙色	
(10)	B－5	第６号住居跡	脚台	－	－	12.2	〃	〃	赤橙色	内面砂粒
(11)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	－	〃	〃	黒褐色	煤付着
(12)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	－	〃	〃	橙色	
(13)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	－	〃	やや不良	暗赤灰色	
(14)	B－5	第６号住居跡	〃	－	－	－	〃	良好	淡赤色	
第20図(1)	J－15	第８号住居跡	甕形土器	16.2	－	21.5	〃	〃	淡赤橙色	
(2)	J－15	第11号住居跡	壺	15.2	－	－	〃	〃	橙色	
(3)	K－18	第11号住居跡	〃	－	－	32.3	〃	〃	橙色	

第6表　出土遺物観察一覧表 (2)　No.2

挿図番号	出土位置	出土遺構	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
第20図(4)	K－18	第11号住居跡	脚台付甕形土器	20.4	40.8	24.5	砂粒混じり	やや不良	黄橙色	煤付着
(5)	K－18	第11号住居跡	小形壺	13.8	15.4	16.8	〃	良好	黄橙色	
(6)	I－20	第12号住居跡	壺	16.6	－	－	〃	〃	黄橙色	
第26図(1)	J－20	第13号住居跡	甕形土器	16.0	－	－	〃	〃	黄橙色	煤付着
(2)	J－20	第13号住居跡	甕形土器	－	－	16.1	〃	〃	黄橙色	〃
(3)	J－20	第13号住居跡	高杯	15.4	－	－	〃	やや不良	黄橙色	
(4)	K－21	第18号住居跡	甕形土器	－	－	21.8	〃	良好	黒褐色	煤付着
(5)	K－21	第18号住居跡	小形壺	－	－	14.4	〃	〃	黒褐色	研磨
第30図	6点	細片								重弧文土器
第31図		第1表に詳述								勾玉玉
第33図(1)	I－5	第1号方形周溝墓	小形壺	13.4	－	15.5	砂粒混じり	やや不良	橙色	化粧粘土
(2)	I－5	第1号方形周溝墓	〃	11.8	－	15.0	〃	〃	灰黄色	煤付着
(3)	I－5	第1号方形周溝墓	小形丸底壺	11.3	－	10.4	〃	良好	橙色	
(4)	I－5	第1号方形周溝墓	甕形土器	－	－	23.2	〃	〃	橙色	
(5)	I－5	第1号方形周溝墓	〃	－	－	30.4	〃	不良	橙色	
第35図(1)	I－6	第2号方形周溝墓	壺	19.7	－	28.4	〃	やや不良	橙色	器面荒れ
(2)	I－6	第2号方形周溝墓	小形丸底壺	8.3	9.3	9.5	〃	良	淡橙色	いびつ
(3)	I－6	第2号方形周溝墓	甕形土器	－	－	25.6	〃	やや不良	橙色	
第40図(1)	G－4	第6号方形周溝墓	甕形土器	14.6	－	28.2	〃	良	灰白色	
(2)	G－4	第6号方形周溝墓	甕形土器	14.8	－	26.2	〃	良好	明褐灰	
(3)	G－4	第6号方形周溝墓	甕形土器	－	－	25.5	〃	良好	灰褐灰	薄手
第42図(1)	G－3	第7号方形周溝墓	甕形土器	18.1	－	－	〃	良	橙色	煤付着
(2)	IJ－11	第10号方形周溝墓	壺	14.8	27.0	22.3	〃	良	淡橙色	
(3)	IJ－11	第10号方形周溝墓	壺	15.8	37.8	32.8	〃	良好	橙色	煤付着
(4)	IJ－11	第10号方形周溝墓	甕形土器	18.5	－	25.6	〃	〃	橙色	穿孔
(5)	IJ－11	第10号方形周溝墓	甕形土器	15.8	－	－	〃	〃	橙色	煤付着
(6)	K－18	第10号方形周溝墓	甕形土器	－	－	23.7	〃	〃	明褐灰	煤付着

第７表　出土遺物観察一覧表 (3)　No. 3

挿図番号	出土位置	出土遺構	器種	口径	器高	胴部(最大径)	胎土	焼成	色調	備考
第42図(7)	Ｉ－11	第10号方形周溝墓	甕形土器	－	－	34.2	砂粒混じり	やや不良	橙色	煤付着
第46図(8)	Ｋ－18	第10号方形周溝墓	甕形土器	16.0	－	26.0	〃	やや不良	橙色	
(9)	Ｉ－20	第10号方形周溝墓	甕形土器	15.8	－	25.0	〃	良好	黄橙色	煤付着
(10)	Ｊ－20	第10号方形周溝墓	甕形土器	14.0	－	23.0	〃	〃	黄橙色	
第49図(1)	Ｊ－20	第12号方形周溝墓	高杯	19.5	12.5	11.8	〃	やや不良	赤橙色	
(2)	Ｊ－20	第12号方形周溝墓	高杯	16.2	13.3	12.3	〃	良好	暗赤褐色	
(3)	Ｋ－21	第12号方形周溝墓	高杯	19.6	－	－	〃	不良	浅黄橙色	
(4)	Ｋ－21	第12号方形周溝墓	高杯	19.5	－	－	〃	やや不良	橙色	
(5)	Ｈ－11	第12号方形周溝墓	高杯	－	－	13.5	〃	不良	浅黄橙色	
第52図(1)	Ｈ－11	第２号円形周溝墓	甕形土器	17.2	23.6	22.3	〃	良好	褐色	煤付着
(2)	Ｉ－５	第２号円形周溝墓	椀	14.3	6.5	15.2	〃	良好	明赤褐色	
第55図(1)	Ｉ－５	第３号円形周溝墓	甕形土器	18.4	48.5	39.4	〃	不良	橙色	
(2)	Ｉ－５	第３号円形周溝墓	甕形土器	16.7	－	26.0	〃	良好	橙色	煤付着
(3)	Ｉ－５	第３号円形周溝墓	甕形土器	18.6	－	－	〃	〃	橙色	煤付着
(4)	Ｉ－５	第４号円形周溝墓	甕形土器	13.4	－	－	〃	〃	灰褐色	
(5)	Ｉ－６	第４号円形周溝墓	甕形土器	16.3	－	－	〃	〃	明褐灰	
第56図(6)	Ｉ－12	第４号円形周溝墓	甕	15.2	28.2	27.8	〃	良好	黄橙色	
(7)	Ｉ－12	第４号円形周溝墓	甕	14.2	－	30.4	〃	不良	淡橙色	煤付着
第57図(8)	Ｉ－12	第４号円形周溝墓	甕	19.3	－	30.0	〃	良好	灰褐色	須恵器
(9)	Ｉ－12	第４号円形周溝墓	坏	13.1	4.6	12.7	〃	良好	灰褐色	須恵器
(10)	Ｉ－12	第４号円形周溝墓	蓋	11.5	5.0	13.1	〃	良好	灰褐色	須恵器
第61図(1)	Ｉ－13	第６号円形周溝墓	甕	16.0	26.3	26.8	〃	良好	橙色	煤付着
(2)	Ｉ－13	第６号円形周溝墓	高杯	－	－	11.7	〃	良好	橙色	
(3)	Ｋ－13	第７号円形周溝墓	壺	15.1	31.9	30.5	〃	良好	黄橙色	煤付着
第64図(1)	Ｉ－17	第８号円形周溝墓	甕	16.8	－	26.0	〃	〃	黄褐色	煤付着
(2)	Ｄ－12	第９号円形周溝墓	甕	17.0	－	22.5	〃	〃	橙色	煤付着
(3)	Ｄ－12	第９号円形周溝墓	甕	－	－	25.4	〃	〃	黒褐色	煤付着
第69図(1)	Ｆ－89	掘立柱建物	皿	10.8	2.2	8.9	〃	やや不良	黄橙色	煤付着

第８表　鉄製品一覧表

図版番号	No.	器種	出土遺構	観察結果	大きさ cm
第70図	1	鉄鏃	第１号方形周溝墓	飛燕式　タガネ痕がある	7.9× 2.2
〃	2	〃	第１号方形周溝墓	長三角形、茎がそっている	10.8× 2.0
〃	3	〃	第１号方形周溝墓	長三角形、茎がそっている	8.9× 2.0
〃	4	〃	第１号方形周溝墓	桜皮巻、鍛接面がある	10.5× 1.9
〃	5	〃	第11号方形周溝墓	雁股式	6.8× 3.3
〃	6	〃	第１号方形周溝墓		9.8× 1.2
〃	7	〃	第18号住居跡	刃子の鋒の可能性あり。	2.2× 1.3
〃	8	〃	第18号住居跡		5.3× 0.8
〃	9	〃	表土層		3.1× 1.1
第71図	10	〃	第７号円形周溝墓		11.7× 0.9
〃	11	〃	第14号住居跡		5.5× 1.8
〃	12	〃	第14号住居跡		9.7× 0.5
〃	13	〃	Ｊ－16区表採		4.0× 1.3
〃	14	〃	第18号住居跡	柳葉式有茎鏃	2.9× 1.2
〃	15	〃	第14号住居跡	口巻糸痕が残る	3.1× 0.7
〃	16	刃子	第11号住居跡	刃部であろう	3.6× 1.3
〃	17	〃	第３号円形周溝墓	研り減りがある	8.9× 1.5
〃	18	鉄剣	第10号方形周溝墓		18.5× 2.7
〃	19	〃	第11号住居跡		1.8× 2.1
〃	20	〃	第５号住居跡	無茎	8.3× 2.6
第72図	21	鉄鎌	第６号住居跡		12.3× 4.5
〃	22	鉄片	第18号住居跡		3.3× 2.1
〃	23	〃	第６号土壙	金具？	3.7× 2.1
〃	24	〃	第11号住居跡	線状鉄素材か	2.4× 0.7
〃	25	〃	第14号住居跡		2.8× 1.2
〃	26	〃	第８号住居跡	鉄破片	3.4× 2.5
〃	27	〃	第10号方形周溝墓		2.8× 2.1
〃	28	〃	第14号住居跡		2.5× 1.5
〃	29	〃	第８号住居跡		3.3× 1.6
〃	30	〃	第12号住居跡	鉄器製造工程での鉄片	3.9× 1.8
〃	31	〃	第11号住居跡		2.0× 0.8
〃	32	〃	第14号住居跡		1.9× 1.6
第73図	33	刀	第１号土壙	直刀	35.5× 3.7

第Ⅲ章　総　　括

柏木谷遺跡の発掘調査は県営圃場整備事業に伴う事前の緊急調査であった。周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが，それまでに進められてきた周辺の遺跡の発掘調査によって地形的に絶好の場所に位置する一帯は，住居跡を中心とした遺跡の可能性が強く予想されたのである。圃場整備事業予定地区の踏査と可能な限りの試掘調査が実施された結果，住居跡遺構や遺物包含層が確認され，およそ8,000㎡が発掘調査の必要な面積であった。調査途中での遺構の拡がりに伴う調査区の拡張を加えると，およそ10,000㎡が最終的な調査の全体面積であった。調査の結果は以下のとおりであった。

少量ではあるが縄文早期の撚糸文土器片が出土しており，この遺跡のもっとも古い時代の遺物ということになる。この時期の遺跡は最近調査報告書が刊行された菊池郡大津町瀬田裏遺跡で代表されるように，押型文土器を中心にして大規模そして集石遺構などを伴っているのが普遍的である。今回の調査では顕著な遺構や多くの遺物などが検出されていないため，拠点とする場所を異にしているものと考えるべきであろう。

一方，縄文前期と判断される住居跡の検出ができ，完形に復原できる土器も出土している。検出できた住居跡は２軒であり，いずれも円墳の封土の下から出土している。長径が約２～３ｍをはかる大きさで小判形の形状である。県内では時期がやや異なるものの，熊本市清水町庵ノ前遺跡や下益城郡松橋町曲野遺跡などで検出された住居跡と，その規模や形状などの特色を同じくしている。そして，この住居跡の時期を示したのは轟式土器である。

周知のように，轟式土器は九州の縄文前期前半を代表する標式土器であり，県内では海岸部域を中心にして出土する土器である。また，完全に復原できるような資料は非常に少ないのもこの土器の大きな特色である。このようななか，第５号住居跡の北側壁面から出土した土器は，ほぼ完全な形に復原ができており，県内で貴重な例を一つ増やしたことになる。

この土器は丸底で器高13.4cm，口径20cmをはかる小型の深鉢である。器面には貝殻による調整を施した条痕跡が残され，この土器の大きな特色をみたしている。２条の隆帯を巡らせ轟Ｂ式土器であることの主張をなし，端正な形状，製作技術や調整痕跡の確かさ，そして明確に施されている隆帯文など，決して時期的に新しくは位置づけられない様相を多く保持している。一般的に縄文前期の土器群は，海岸部から内陸部へと進入していくにしたがい，時間の経過とともに，形状や製作技術の退化が必然的に生じるものと理解されるが，今後，熊本県地域においては中間地域の資料が検出されることが強く望まれるものである。

轟式土器の包含層とアカホヤ火山灰層との前後関係についてを，火山灰層の薄い貝塚や海岸地域の遺跡で求めるのは大変困難である。阿蘇山起源の火山灰層などに恵まれた阿蘇カルデラ地域で追求していかねばならないであろう。

今回の縄文前期の２軒の住居跡の埋土は，アカホヤ火山灰層の上位の黄褐色粘質土を主としたものであることや，第５号住居跡の北側壁面から出土した土器もアカホヤ火山灰層の純層の上位に位置していることなど，ここでの轟式土器の包含層そのものはアカホヤ火山灰層の上位になりそうである。

中期と見られる土器片はわずかで，晩期の住居跡を３軒検出できている。いずれも方形を呈しているが多くを消失した状態であった。

弥生時代は16軒の住居跡を検出し集落が形成されている。県内各地での調査によって弥生時代の大きな集落には，大規模で複合する環濠が作られていることがよく知られているが，今回の調査では環濠の存在は確認されていない。いづれにしろ，従来，存在そのものが明確ではなかった南郷谷地区にも，阿蘇谷地区と同様に，弥生時代の集落が大きく展開していたことを明らかにしたことになる。

住居跡群は第５・６号住居跡を中心とした北側のグループと，第11・12号住居跡を中心とした南側のグループの，大きく南北２つのグループに分けられようが，中央部東側に位置する第７号住居跡からさらに東側に向かって住居群が拡がっていたと判断すると，この中央のグループを加え，合計３つのグループとできようか。

住居跡ごとの切り合いは少なく，各住居はそれぞれに適当な空間域をもって，いわば散在した状況を示している。住居跡の大きさには差異が見られるが，形状は隅丸方形で統一的な様相を呈している。

第６号住居跡の出土状況は特徴的である。住居跡は焼失家屋であるが，焼失後に土壙を掘り，埋納したものと判断される３点の土器がセットで出土している。３点の土器は台付甕・壺・長頸壺で明確なセット関係を示すことになる。台付甕は弥生後期の最も普遍的な土器であるがやや低めの脚台である。肥後南部地方を中心にして特徴的な出土を見せる重弧文土器（免田式土器）に加えて，複合口縁部を有する豊後地方の壺（安国寺式土器）がセットとなるのである。時間的な指標となることはもとよりであるが，中九州における地域間交流を知る貴重な資料である。

第14・18号住居跡からは滑石製勾玉・玉類が出土しており祭祀など特殊な住居と思われるが，勾玉の未製品が出土していることから玉類の製作場所の可能性もあろう。

弥生時代の墓域としては第９号円形周溝墓の周囲に存在する小規模の土壙群に可能性が持たれる。住居跡と場所を異にしており，周溝などの施設を有していないことなどをその理由とできよう。

古墳時代になると住居跡はなくなり，一帯は完全な墓域と化している。前期を中心とした９基の小ぶりの方形周溝墓が北側に整然と並び，中央部では９基の円形周溝墓と３基の大型化した方形周溝墓とが混在している。主体部は前者が土壙もしくは木棺と推定され，後者は箱式石

棺が主体となっている。同様に周溝内出土の土器は土師器だけを出土する方形周溝墓の段階から，土師器と須恵器が共にする円形周溝墓へと変化している。すなわち，小形の方形周溝墓群は古式土師器（４世紀）を伴い，大型化し円形周溝墓が現れるころから須恵器（５～６世紀）が出現する。特に第４号円形周溝墓から出土した須恵器の坏・蓋は６世紀の初頭と判断され，阿蘇地方では最も古く位置づけられるものである。

最も高いところに位置する大型の円墳は古墳群の中では突出した存在である。円墳は現状で外径34.5m，封土は約1.5mを測る。南郷谷では最大規模であり，県内でも最大級の円墳の一つである。主体部は破壊されており明瞭ではなかったが，複数の箱式石棺が設置されていたものと判断される。周溝内の遺物には須恵器は見られず，古墳群のなかでは方形周溝墓と同期の築造であろう。

以上のような縄文時代から古墳時代にかけての調査の成果がまとめられるが，ここ久木野村においては県営圃場整備事業の推進に伴い多くの大規模の発掘調査が実施されてきており，さらに多くの調査の成果が上げられている。早急の報告書が刊行されその全容が報告されねば成らないところである。いずれにしても，阿蘇南郷谷地区は従来遺跡の空白地帯であったが，柏木谷遺跡の調査と報告によってこの地区に大規模の遺跡が存在することを明らかにし，南郷谷地区の古代遺跡は阿蘇谷と遜色がないような状況となってきていることが述べられよう。

このようななか，久木野村教育委員会では柏木谷遺跡の重要性を認識され，遺跡の保存を決定されている。圃場整備事業が必要とする面積との協議が重ねて行われ，可能な限りの保存場所が決定されている。さらに，熊本県指定史跡に申請が提出されて平成４年度末に指定が決定されている。今後，久木野村当局によって遺跡の保存事業が進められていく予定であり，史跡公園や資料館の建設が計画され史跡の保存と公開，それに活用が行われていかれよう。

報　告　書　抄　録

書　　名	柏木谷遺跡
副　書　名	県営圃場整備事業（阿蘇久石地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第134集
編著者名	江　本　　直
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862　熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	西暦1993年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード	調査期間	調査面積	調査原因
かやのきだに 柏木谷遺跡	熊本県阿蘇郡 久木野村 大字久石	市町村:434302 遺跡番号:38-7-5	19910107- 19911205	12,000㎡	県営圃場 整備事業

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代	住居跡　５軒	前期・晩期土器	轟式土器
弥生時代	住居跡　16軒	壺・甕・長頸壺	免田式土器(重弧文土器)
古墳時代	方形周溝墓　12基	土師器	古式土師器
	円形周溝墓　９基	土師器・須恵器	須恵器（６Ｃ初頭）
中世	掘建柱建物　柱穴		

写　　真

写真１

上　第１号住居跡　　下　第２号住居跡

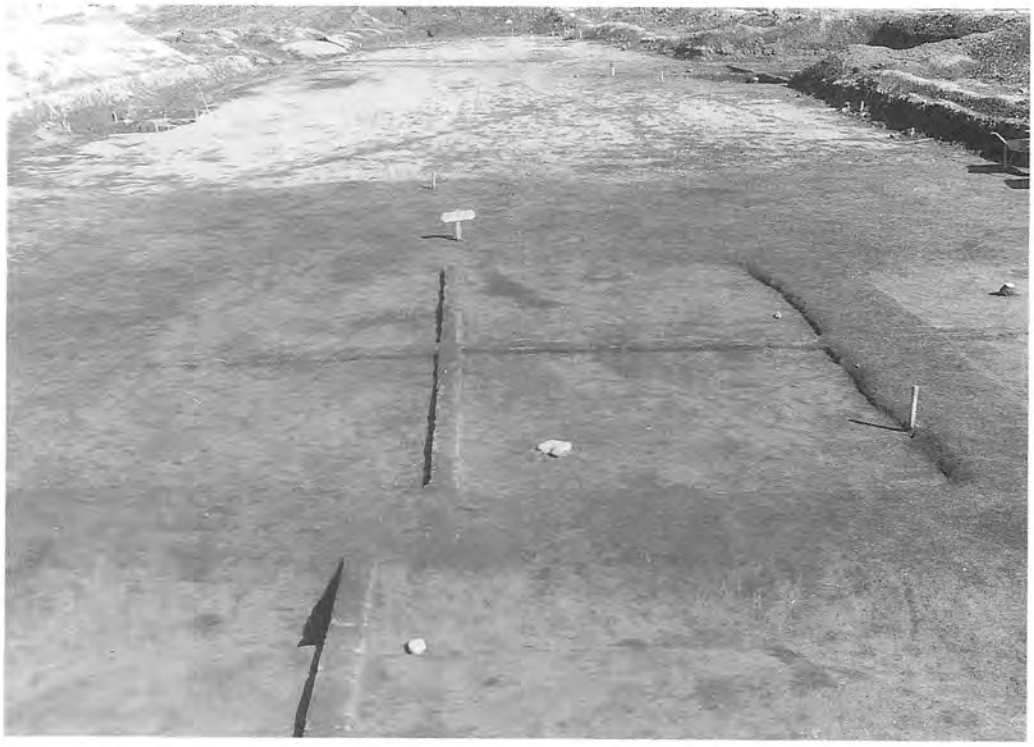


写真２

上　第３号住居跡　　下　第４号住居跡

写真３

上　第５号住居跡　　下　第５号住居跡遺物出土状況

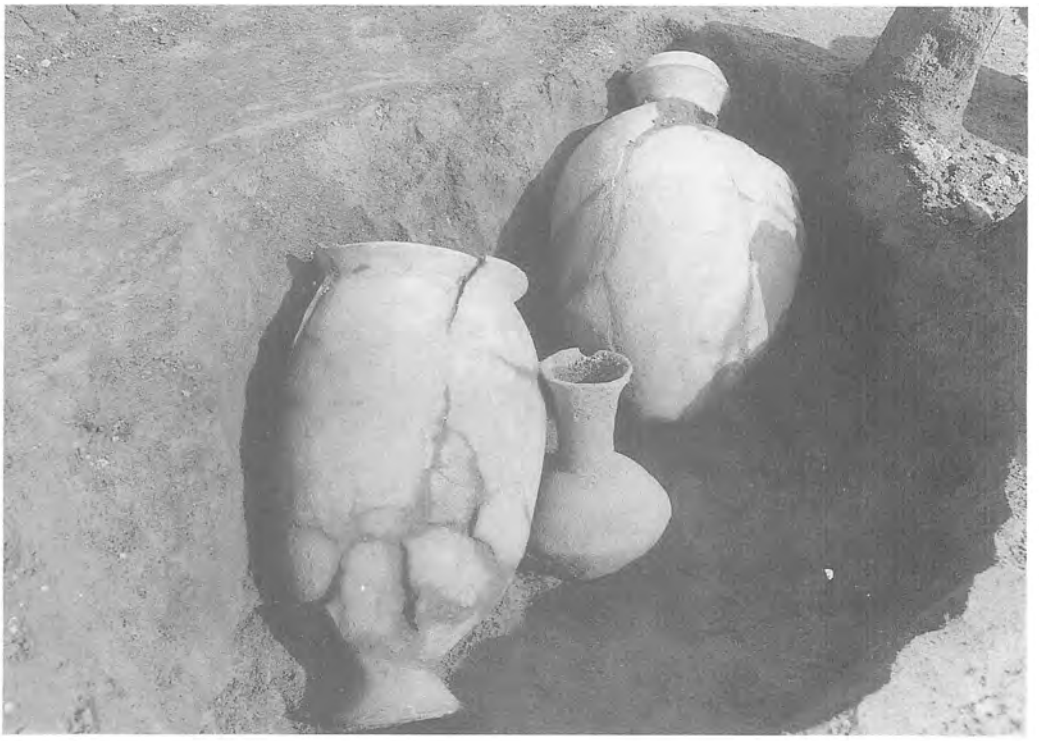
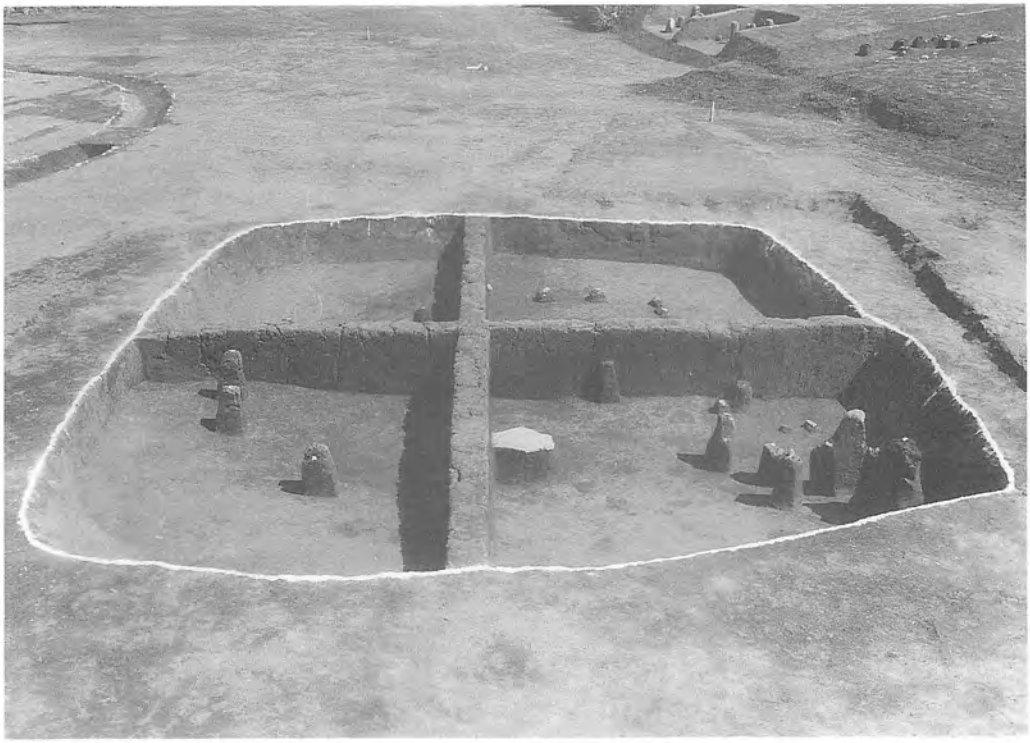


写真４

上　第６号住居跡検出状況　　下　第６号住居跡遺物出土状況

写真５

上　第６号住居跡重弧文土器出土状況　　下　第７号住居跡



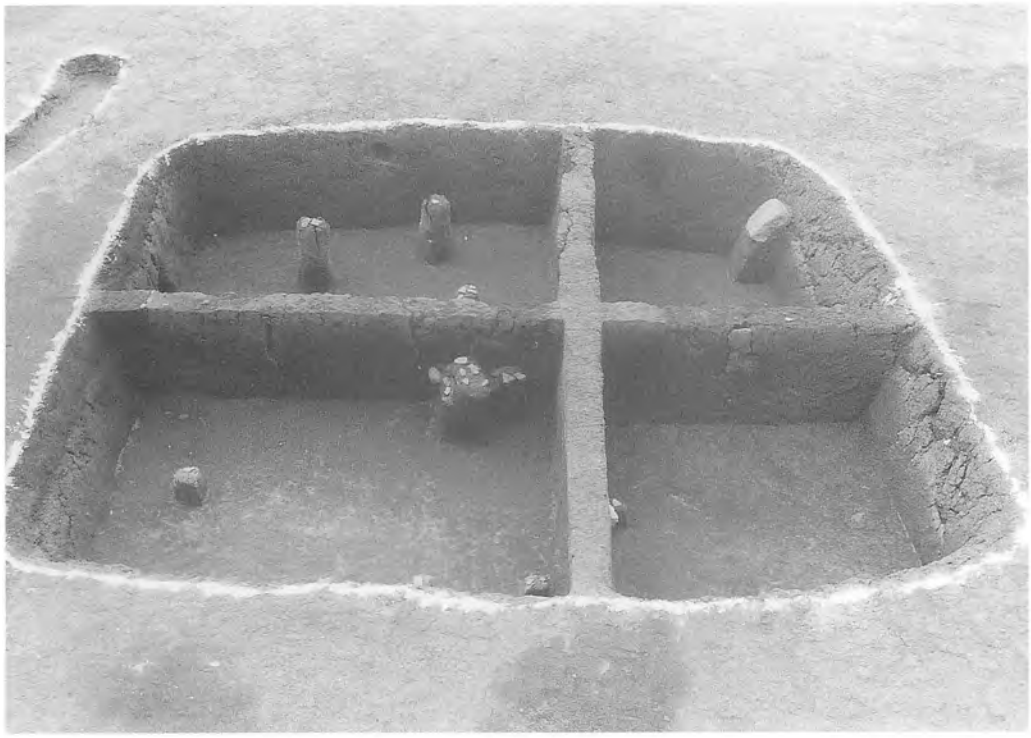
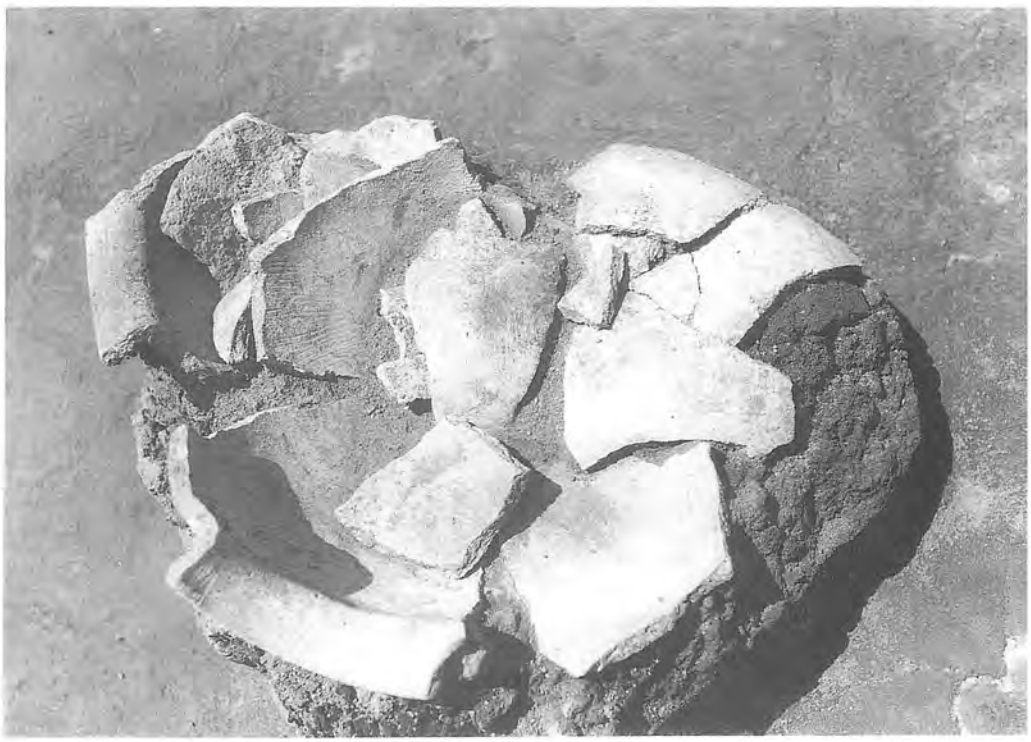


写真６

上　第８号住居跡　　下　第９号住居跡

写真 7

上　第10号住居跡　　下　第11号住居跡



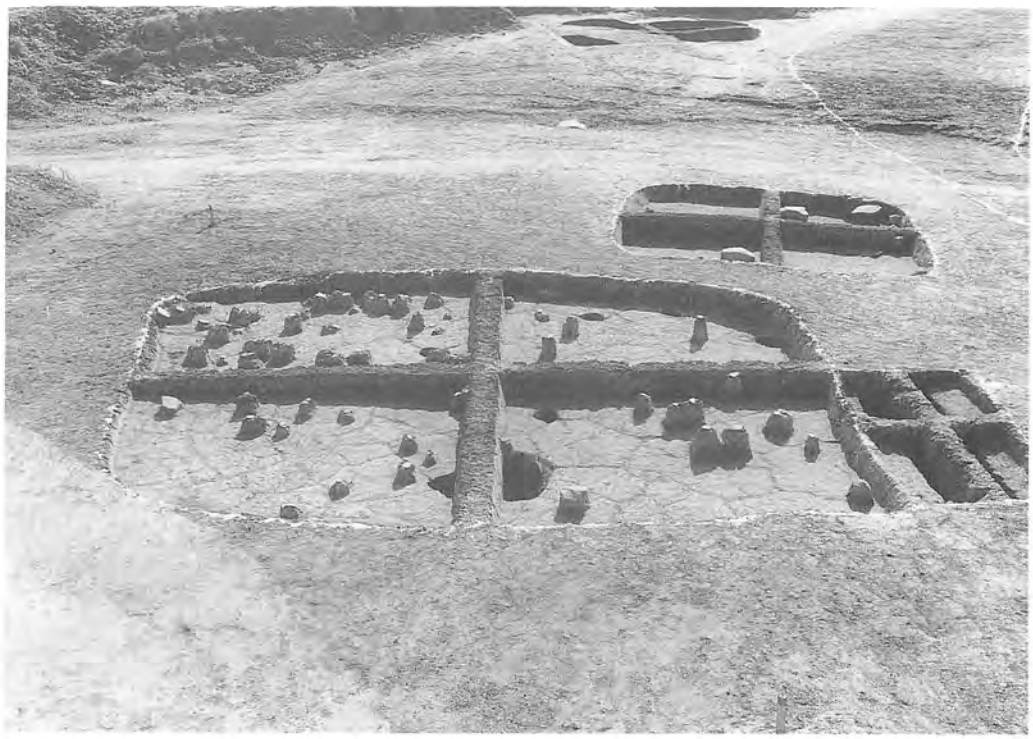
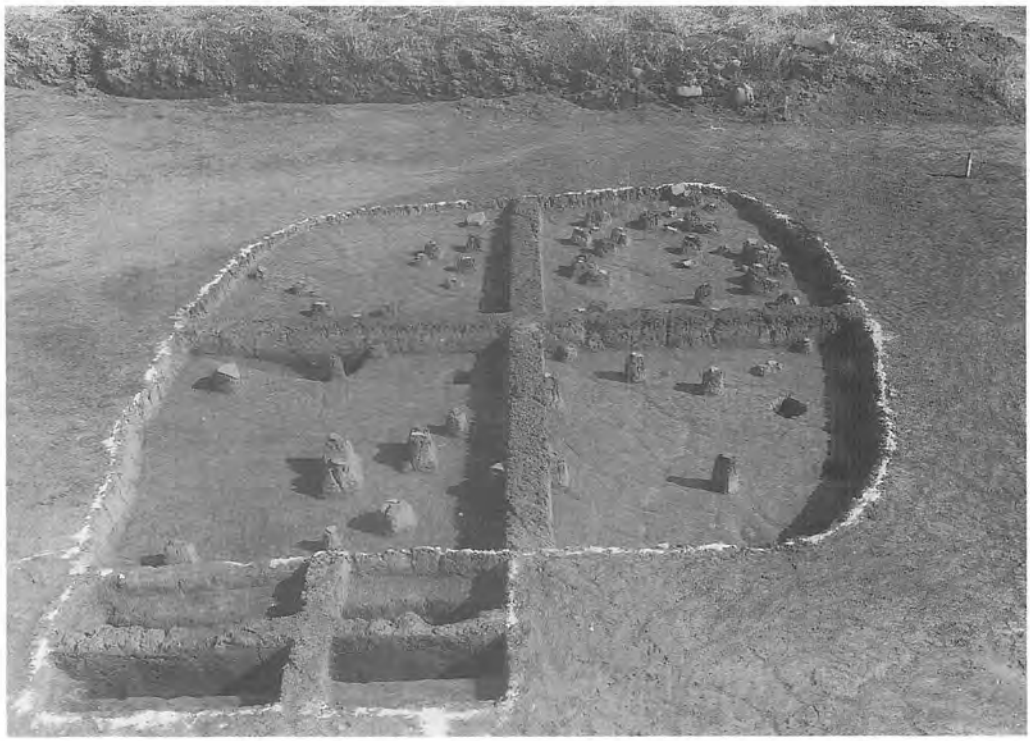


写真８

上　第11号住居跡遺物出土状況　　下　第12号住居跡



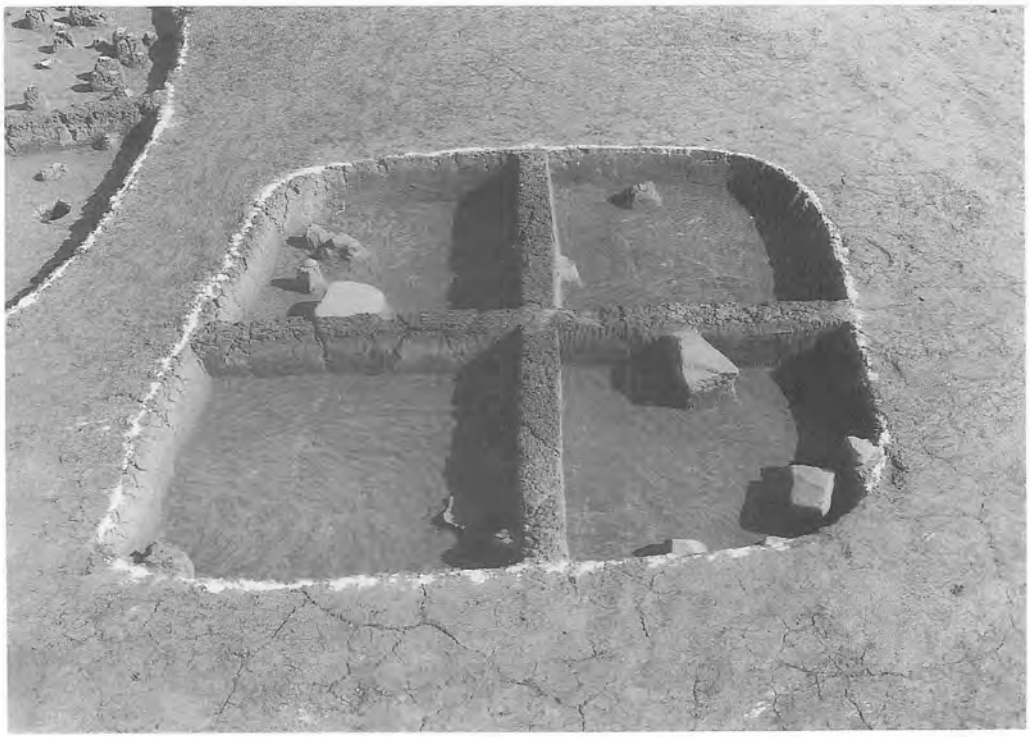


写真９

上　第12号住居跡　　下　第13号住居跡

写真10

上　第14号住居跡　　下　第14号住居跡遺物（勾玉未製品）出土状況

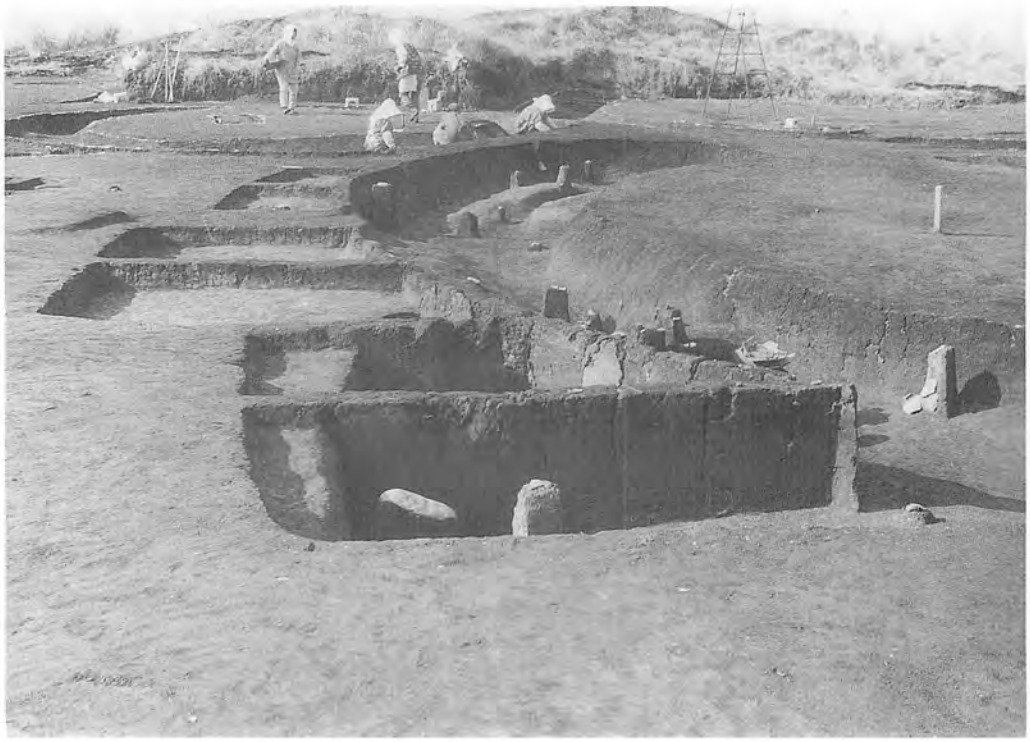


写真11

上　第15・16・17号住居跡　　下　第18号住居跡

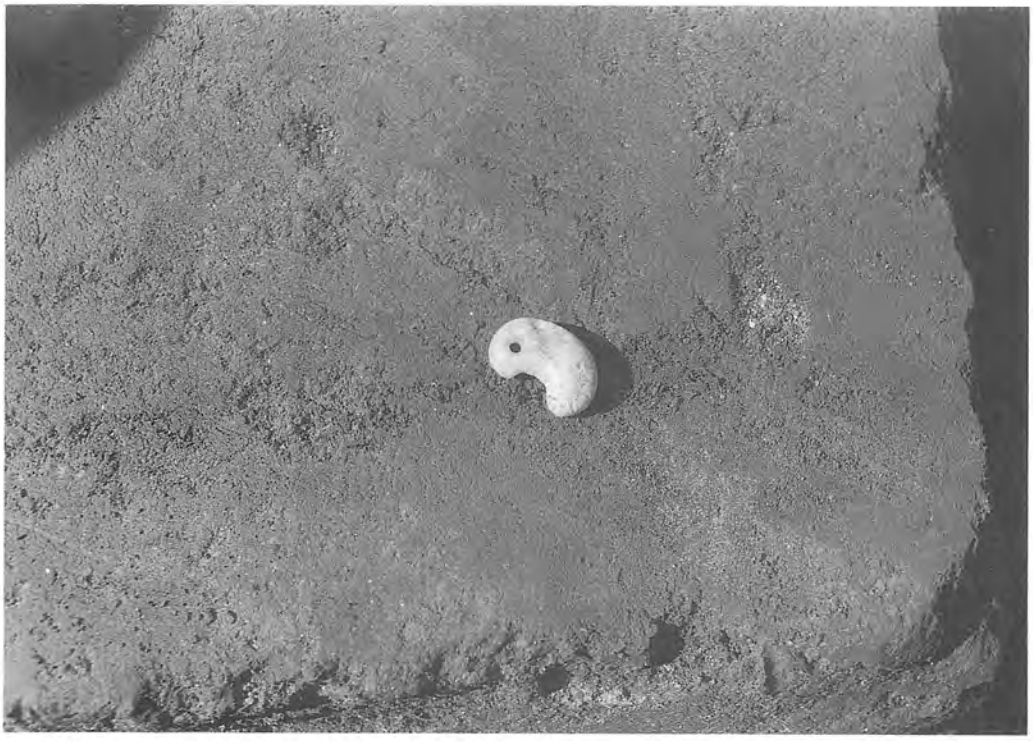
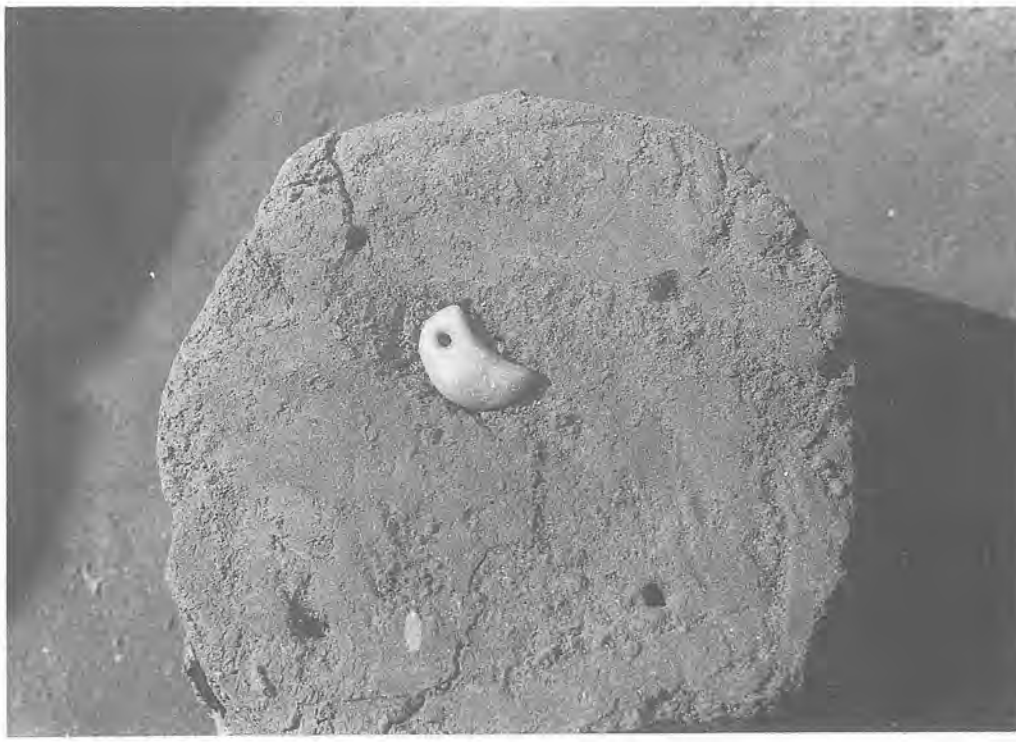


写真12

上　第18号住居跡　　下　第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況



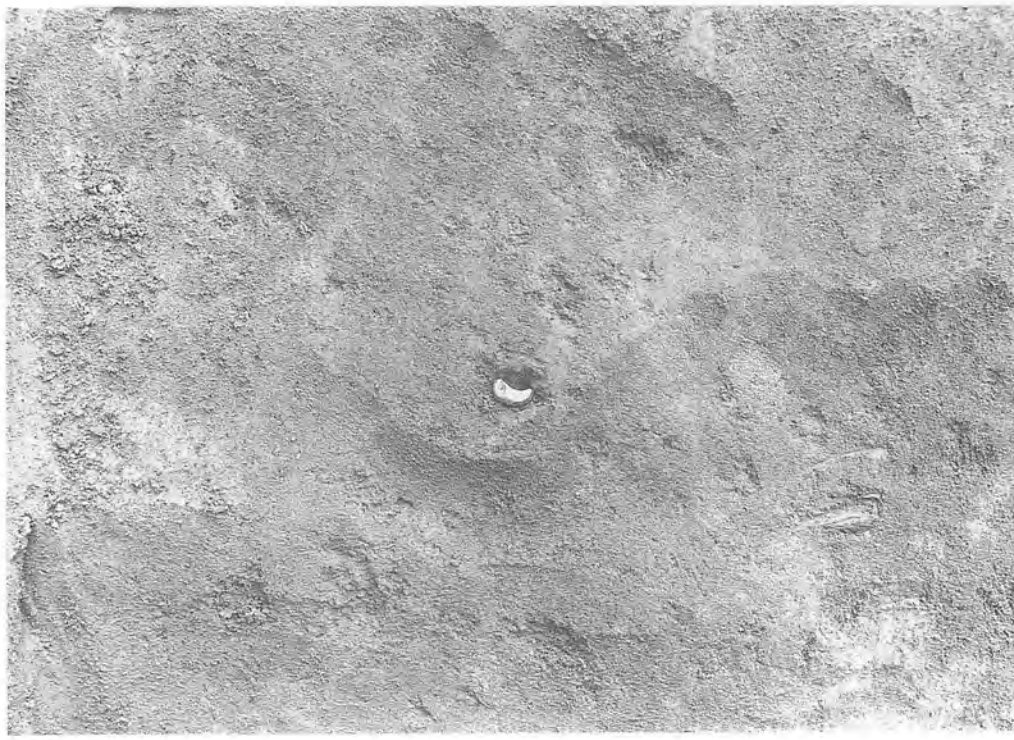


写真13

上　第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況　　下　第18号住居跡遺物（勾玉）出土状況

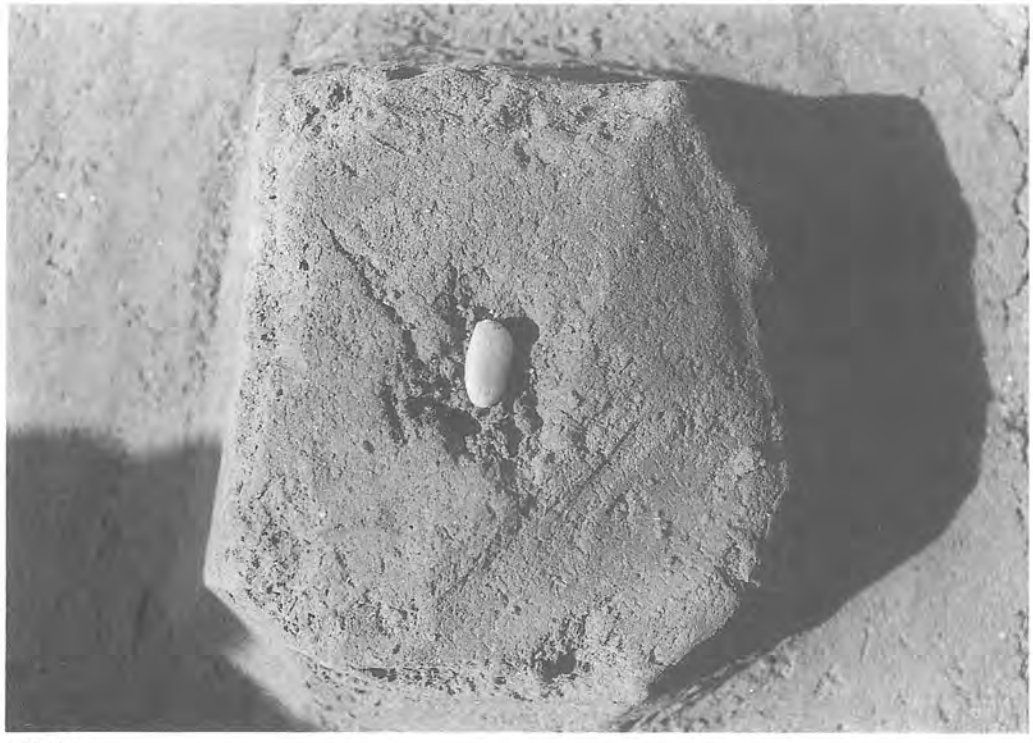


写真14

上　第18号住居跡遺物（玉）出土状況　　下　第18号住居跡遺物出土状況

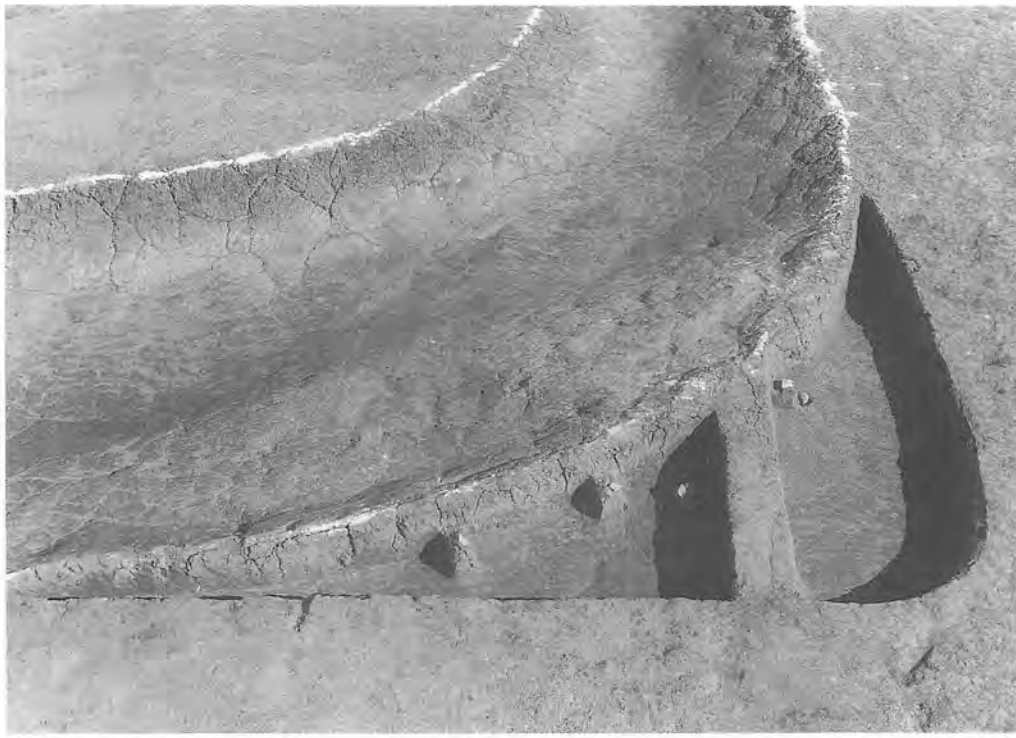


写真15

上　第18号住居跡遺物出土状況　　下　第19号住居跡

写真16

上　第20・21号住居跡（東から）　　下　第20・21号住居跡（南から）

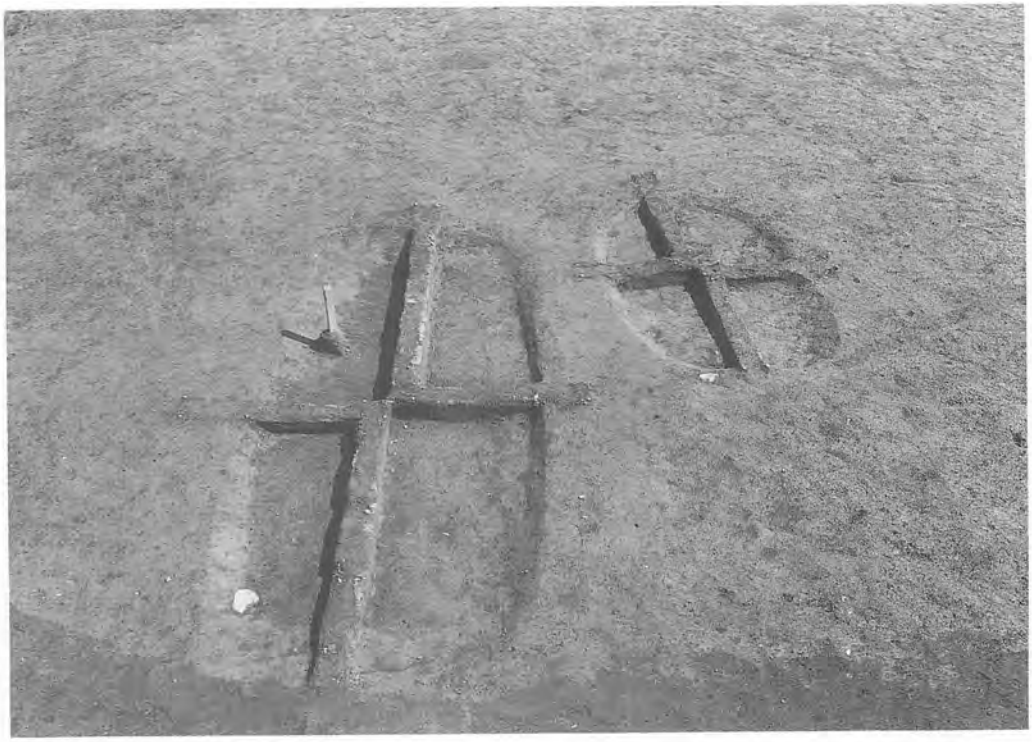


写真17

上　第１号方形周溝墓　　下　第１号方形周溝墓主体部

写真18

上　第２号方形周溝墓　　下　第３号方形周溝墓

写真19

上　第３号方形周溝墓周溝内遺物出土状況　　下　第４号方形周溝墓

写真20

上　第５号方形周溝墓　　下　第６号方形周溝墓

写真21

上　方形周溝墓群（第１～７号）　　下　第７号方形周溝墓

写真22

上　第７号方形周溝墓主体部　　下　第７号方形周溝墓鉄器出土状況

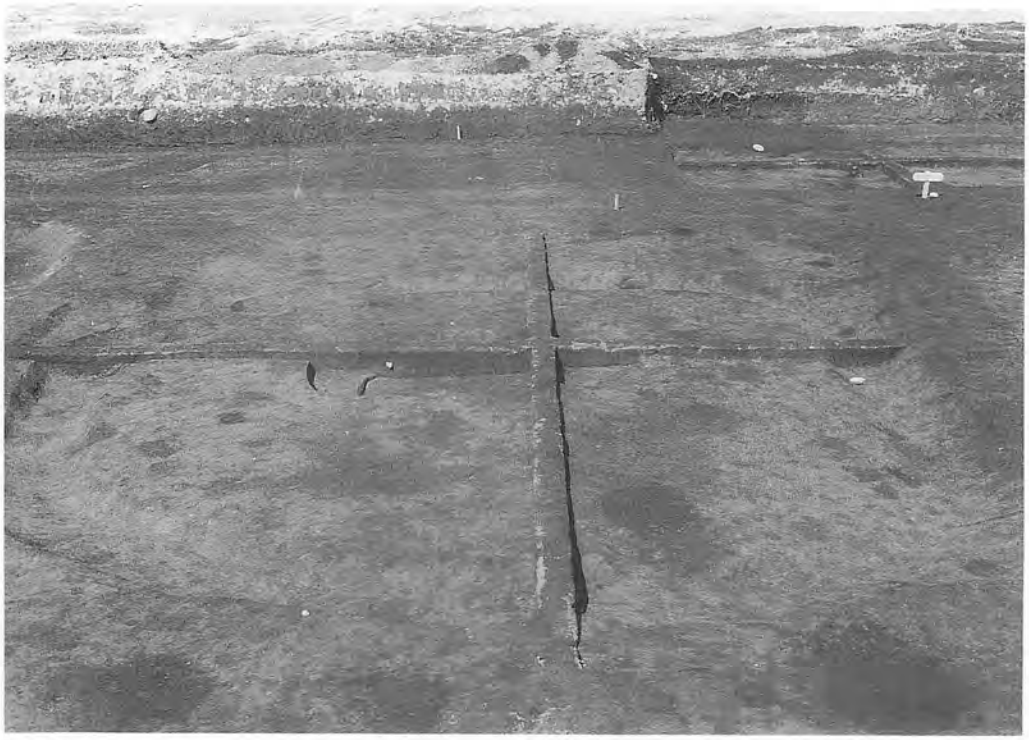


写真23

上　第８号方形周溝墓　　下　第９号方形周溝墓

写真24

上　第10号方形周溝墓　　下　第10号方形周溝墓鉄器出土状況

写真25

上　第11号方形周溝墓　　下　第11号方形周溝墓主体部周溝内遺物出土状況

写真26

上　第11号方形周溝墓　　下　第１号円形周溝墓

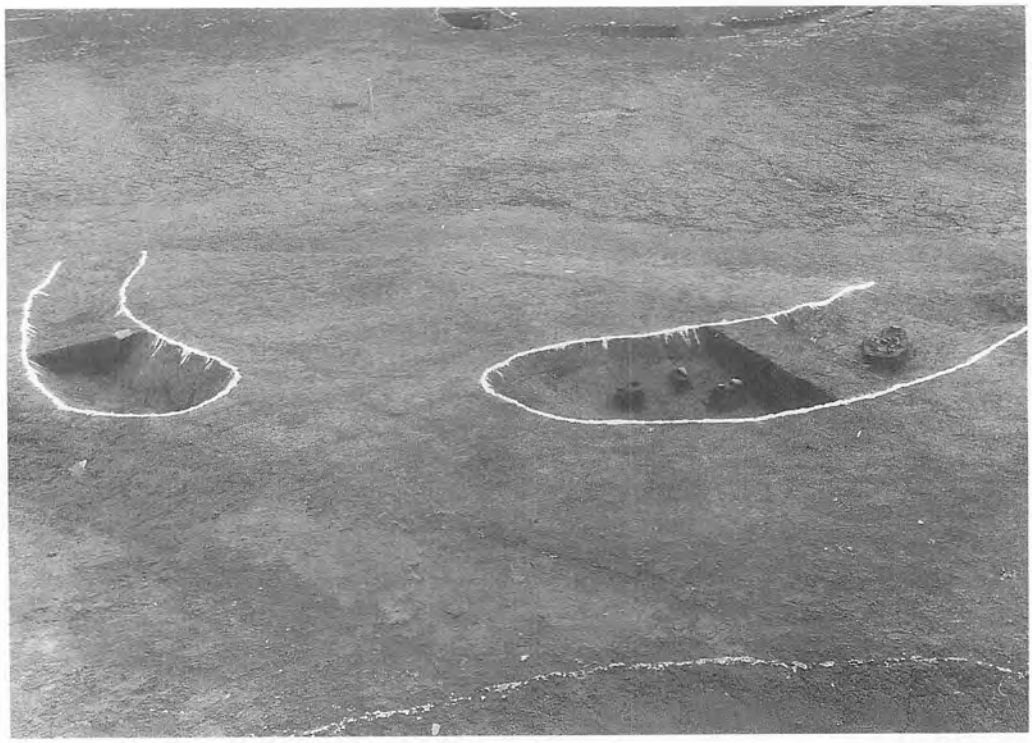


写真27

上　第１号円形周溝墓主体部箱式石棺（西側から）　　下　第２号円形周溝墓

写真28

上　第３号円形周溝墓　　下　第４号円形周溝墓

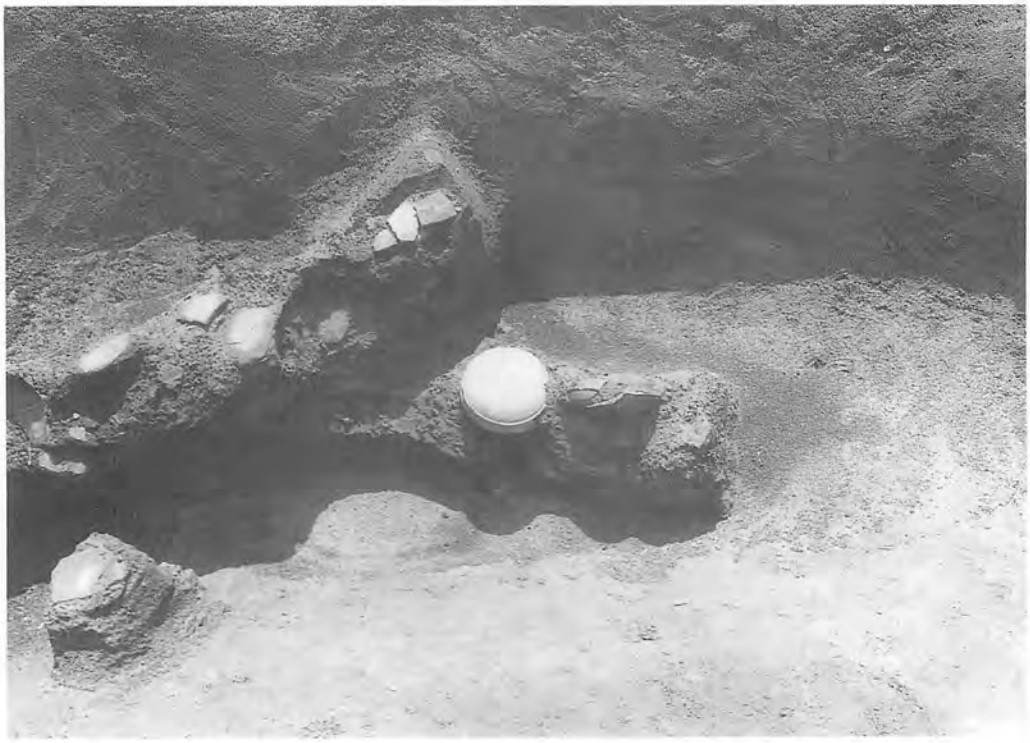


写真29

上　第４号円形周溝墓周溝内遺物出土状況　　下　第５号円形周溝墓

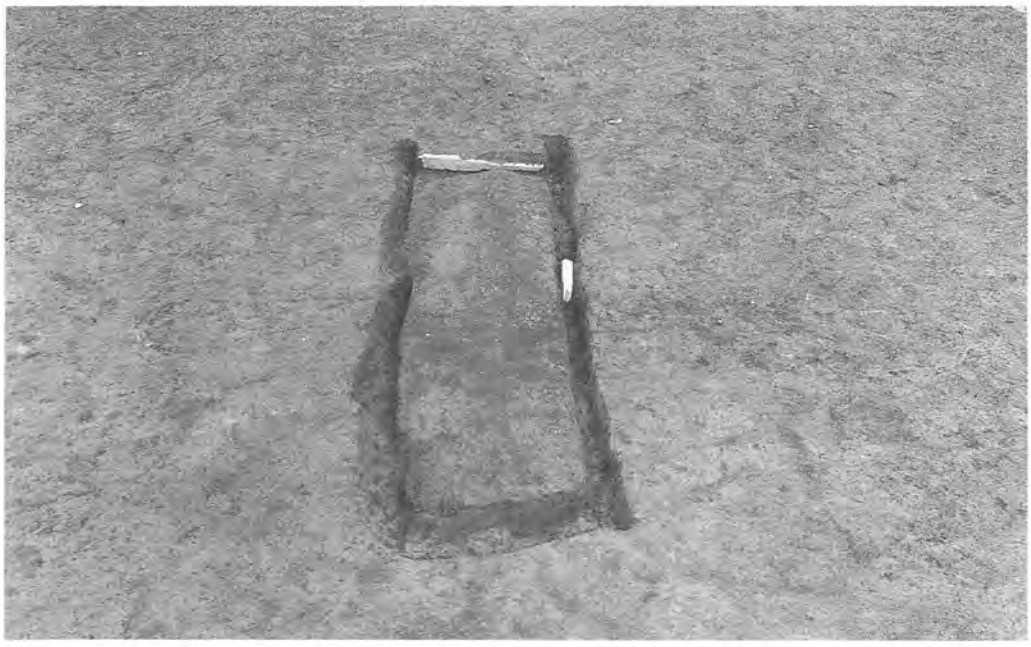


写真30

上　第４号円形周溝墓主体部　　下　第４号円形周溝墓周溝内遺物出土状況

写真31

上　第７号円形周溝墓　　下　第７号円形周溝墓

写真32

上　第８号円形周溝墓　　下　第８号円形周溝墓周溝内遺物出土状況

写真33

上　第９号円形周溝墓　　下　箱式石棺検出状況

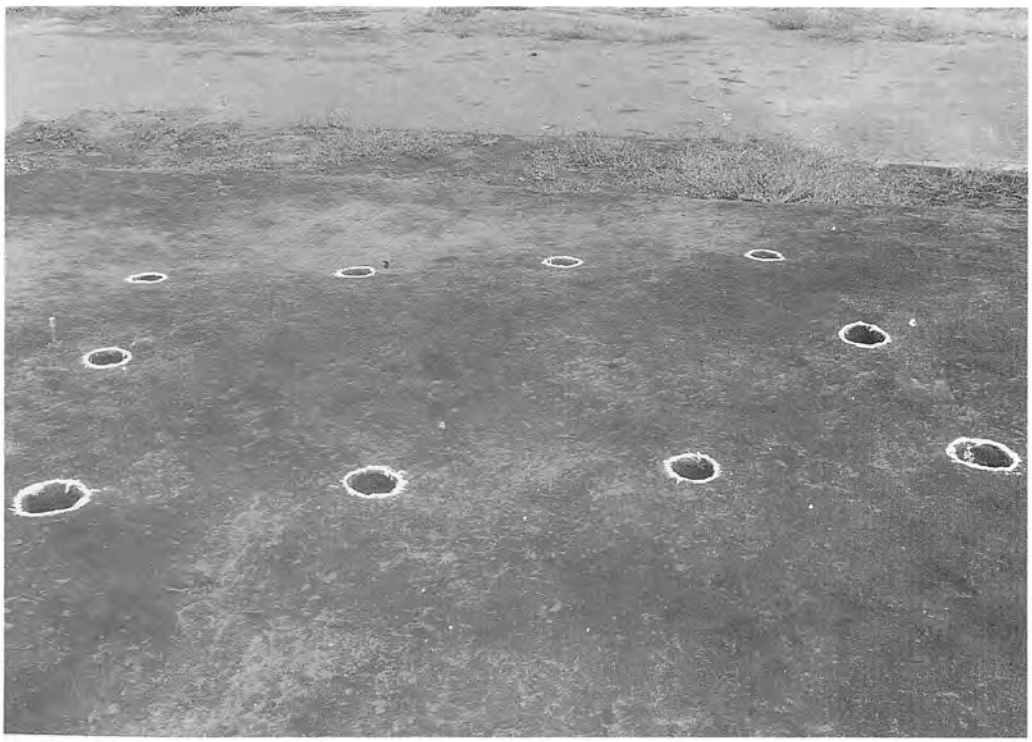


写真34

上　円墳主体部検出状況　　下　掘立柱建物検出状況

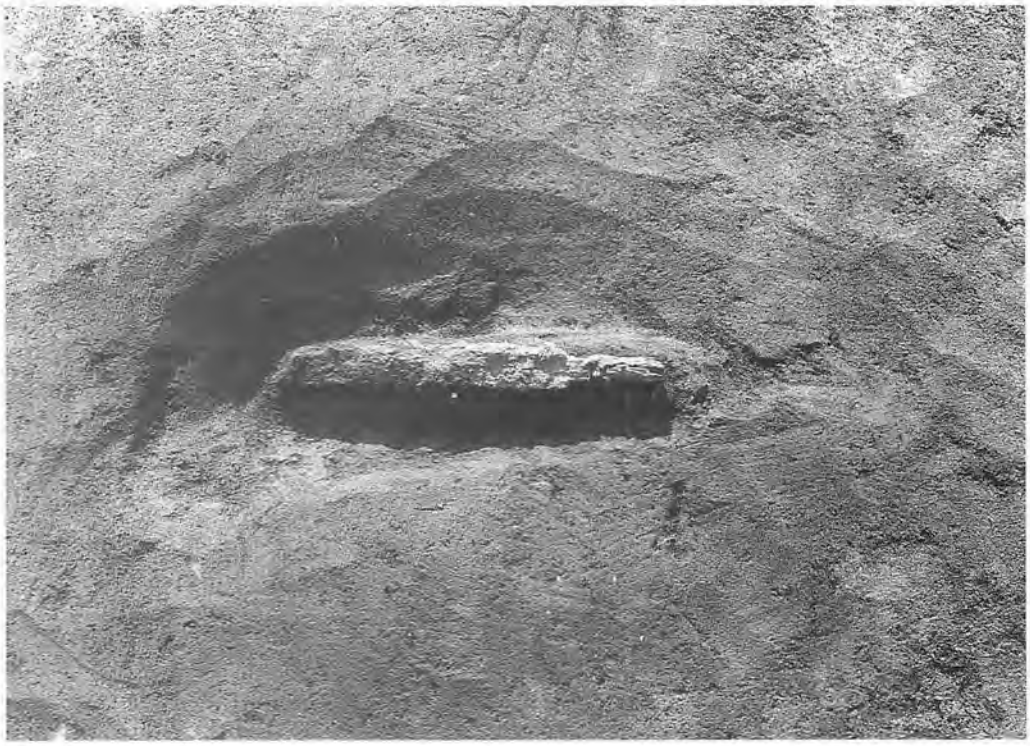


写真35

第１号土壙鉄器出土状況

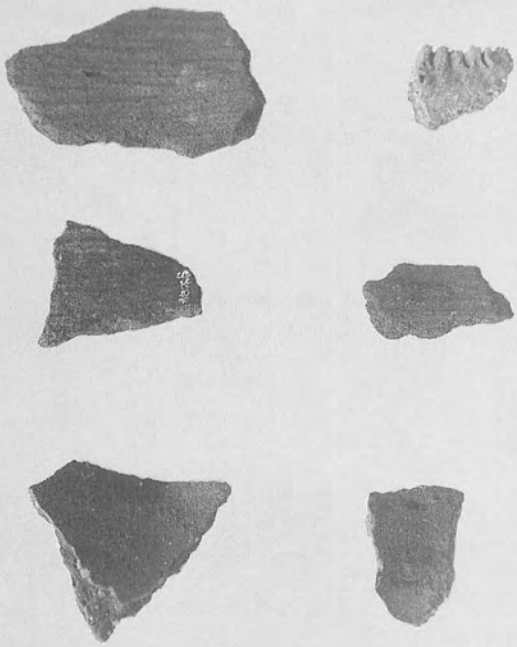
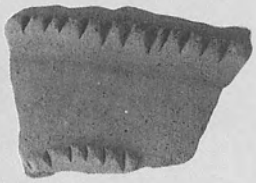


写真36　縄文前期・中期土器



縄文晩期土器　縄文時代石器

写真37　第４号住居跡出土遺物

写真38　第５号住居跡出土遺物

写真39　第６号住居跡出土遺物

写真40　第６号住居跡出土遺物

写真41　第８、11、12号住居跡出土遺物

写真42　　第13、18号住居跡出土遺物

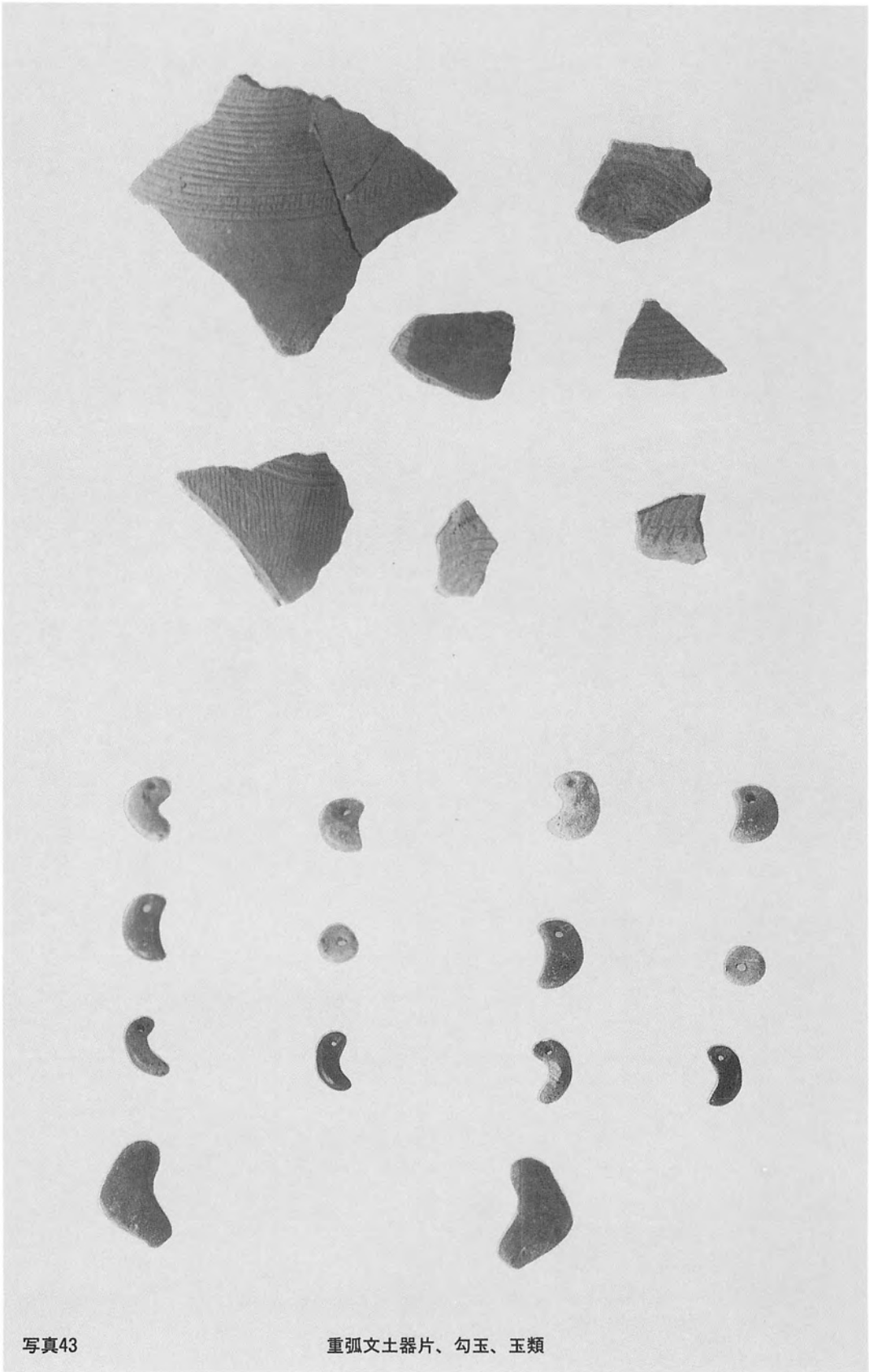


写真43　　重弧文土器片、勾玉、玉類

写真44　第１号方形周溝墓出土遺物

写真45　第２号方形周溝墓出土遺物

写真46　　第６号方形周溝墓出土遺物

写真47　　第７、10号方形周溝墓出土遺物

写真48　第10号方形周溝墓出土遺物

第12号方形周溝墓出土遺物

写真49　　第２号円形周溝墓出土遺物

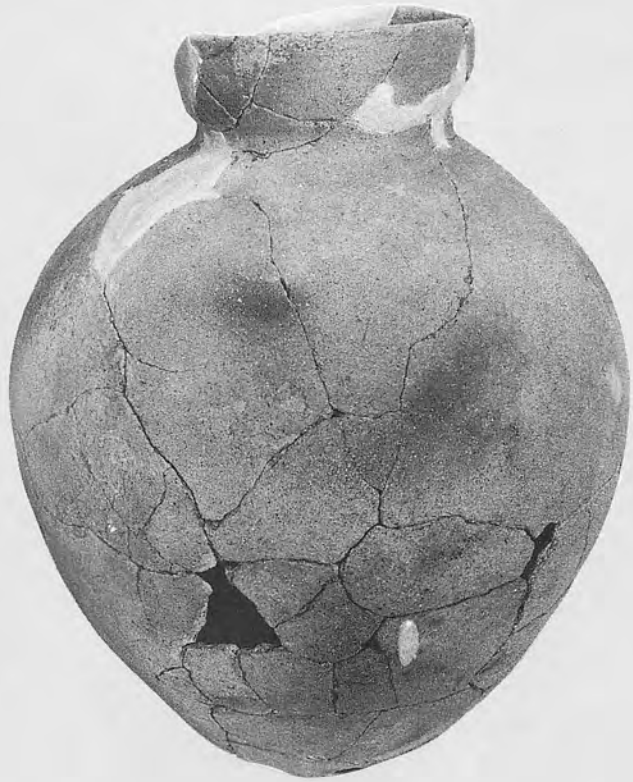


写真50　　第３、４号円形周溝墓出土遺物

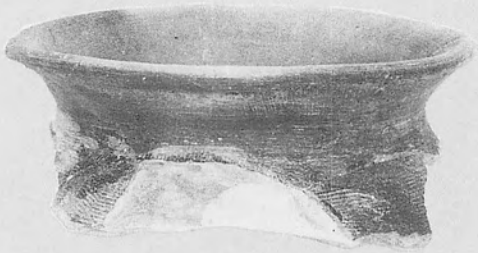


写真51　　第３、４号円形周溝墓出土遺物

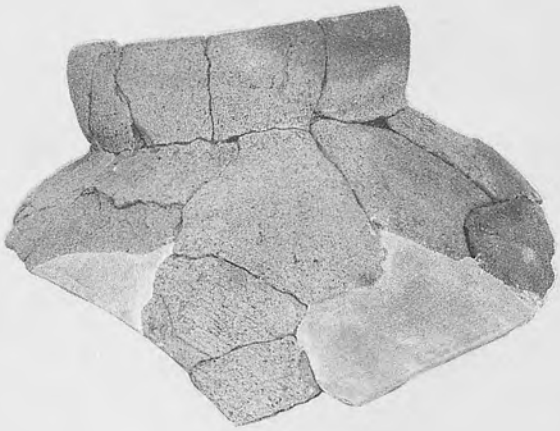


写真52　第４号円形周溝墓出土遺物

写真53　　第４号円形周溝墓出土遺物

写真54　　第６、７号円形周溝墓出土遺物

写真55　　第８、９号円形周溝墓出土遺物

古代遺物

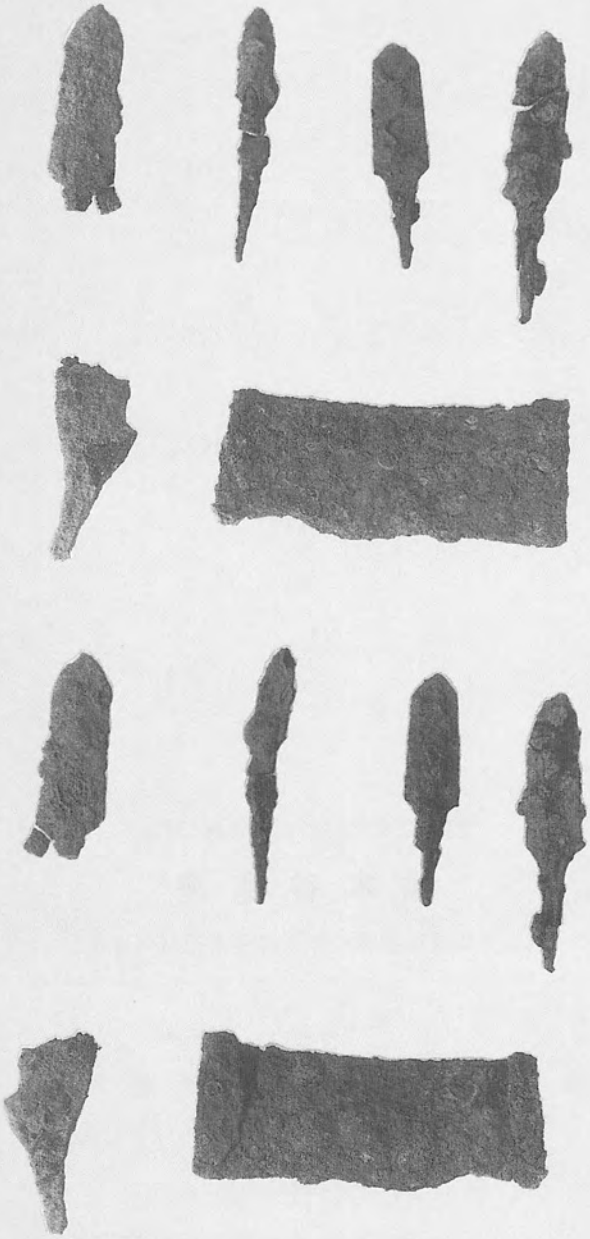


写真56　　鉄製品

熊本県文化財調査報告第134集

柏木谷遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

発行年月日　平成5年3月31日

発　　行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　株式会社　秀巧社
〒861-22 上益城郡益城町古閑106
☎096-286-2221

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 134 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：柏木谷遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/